梅園三語　玄語　第五冊

# 地冊露部

丁未浄本準拠

（安永四年本からの組み込みあり。）

# 玄語目（げんごもく）


地冊（ちさつ）　露部（ろぶ）

體界の冊（たいかいのさつ）

天地（てんち）　並びに圖（ならびにず）

華液（かえき）　並びに圖（ならびにず）

性界の冊（せいかいのさつ）

日影（にちえい）　並びに圖（ならびにず）

水燥（すいそう）　並びに圖（ならびにず）

# 玄語

地冊　露部
體界の冊
天地

六八四六ー四七［同胞孿胎］
錯綜して之を觀れば、則ち天は虚にして動く、
六八四八　地は實にして止る、
六八四九　日月は上に通ず、
六八五〇　水燥は下に塞す、
六八五一ー五二　剖析して之を觀れば、則ち機は以て動止す、
六八五三　體は以て虚實す、
六八五四　衡は輕重を持す、
六八五五　精は乾潤を有す、
六八五六　條貫して子孫仍雲、孤は以て衆を紀す、
六八五七　理析して反比傍斜、多は寡を嫌せず、是を以て
六八五八　天地なる者は氣物の成名なり。
六八五九　成れば則ち性體は氣物に入る。氣物は以て全す。

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

(PB 449)
(I 452b)

六八六〇　全なれば則ち鬱浡の活は天を爲し、
六八六一　　混淪の立は地を爲すと雖も、而も地中にては。
六八六二　氣象は動天地に依りて、以て衰衰に通ず、
六八六三　氣質は靜天地に依りて、以て坱坱に塞す、
六八六四　動は則ち轉持なり、
六八六五　靜は則ち天地なり、
六八六六　機體は相い合して。一球は混然として立す。
六八六七　靜なる者は能く居る、居る者は位を以てせざること能わず、
六八六八　動なる者は能く行く、行く者は方を以てせざること能わず、
六八六九　位は則ち上下内外なり、
六八七〇　方は則ち東西南北なり、
六八七一　没は露に由りて認む、
六八七二　露は没に由りて成る、
六八七三　山京河海は、内に在りて位を占む、
六八七四　日月星辰は、外を行りて方を占む、
六八七五　没露動靜は。相い得て全す。
六八七六　止なる者は動の止なり。
六八七七ー七八　而して靜と異なるなり。故に動中は動止を有す、

六八七九　　靜中は虛實を有す、
六八八〇　氣象なる者は動物、虛に依りて行る、
六八八一　氣質なる者は靜物、實を以って止る、
*六八八二　虛實は胞を合して、同胞孿胎なり。
六八八三ー八四　胎中の雙兒は、各天地を持す。一球は能く連環を容る。
六八八五　天體は散ず、
六八八六　地體は結ぶ、
六八八七　日體は動く、
六八八八　影性は收む、
*六八八九　運轉と虛實と其の圓を合す。而して孿胎は雙圈なり。
*六八九〇　水燥は本圈に歸す、
六八九一　日影は別圈を成す、
六八九二　本圈は則ち直圓山壑なり、
六八九三　雙圈は則ち日影水燥なり、
六八九四　日影景月は、靜虛規矩の形中に循行す、
六八九五　水燥溼火は、山壑拗突の體上に居る、
六八九六　動止は。內形理を含む、
六八九七　外華液を吐く、夫れ

(PB 450)

六八九八　天地の分。天體なる者は虚なり、
六八九九　地體なる者は實なり、
六九〇〇　天機なる者は動なり、
六九〇一―〇二　地機なる者は止なり、而して天氣なる者は乾なり、
六九〇三　地氣なる者は潤なり、
六九〇四　天體なる者は輕なり、
六九〇五　地體なる者は重なり、
六九〇六　虚乾は輕動し、物を上に於て成す、
六九〇七　潤實は重止し、物を下に於て成す、乃ち華液の成る所なり。
六九〇八　華液は既に成る。而して性體は氣物と竝び立つ。
六九〇九　轉持形理は、則ち機を没中に於て痕す、
六九一〇　天地華液は、則ち物を露中に於て體す、物の成なり。
六九一一　形體は相い得る、
六九一二　色性は相い合す、
六九一三　之を分てば則ち轉持天地は、形體を以て成る、
六九一四　日影水燥は、色性を以て合す、
六九一五　色に清濁明暗有り、
六*九一五1復元　明暗は日影に歸す、

六九一五2復元　清濁は水燥に歸す、
六九一五3復元　氣に水燥感熱有り、
六九一五3復元　寒熱は日影に歸す、
六九一五4復元　温冷は水燥に歸す、
六九一六ー二三　（欄外追記につき削除。）
六九二四　故に天象は輕乾、虛にして動く、
六九二五　地質は重濁、實にして止る、
六九二六　各圈の氣物は。象を天地に於て分つ。
六九二七　色氣は充塞して。絪縕摩盪成る。
六九二八［條貫］　虛實の間は、上下内外の位を緯に於て序す、
六九二九　動止の中は、東西南北の方を經に於て成す、而して
六九三〇　内外は動の爲に位を上に於て分つ、
六九三一　上下は實の爲に位を内に於て分つ、而して
六九三二　西北なる者は止方なり、
六九三三　東南なる者は動方なり、
六九三四　内外なる者は動位なり、
六九三五　上下なる者は靜位なり、
六九三六　天は地に徹して動なり、

六九三七ー三八　地は天を貫して靜なり、而して動は靜の奉に依る、
六九三九　靜は動の保に依る、
六九四〇　請う。運轉の道を審かにして。以て其の脈を導くを。夫れ
六九四一　天地なる者は、天を巔にして地は趺なり、而して轉ずる者は此の條理に合す、
六九四二　運する者は、天を趺にして地は巔なり、而して日影は　此の條理を分つ、是に於て
六九四三　運轉は巔趺を返して、循環は脈を通ず
六九四四　天地は日影を分ちて、剖析は勢を張る　是に於て
六九四五　易成は則ち日巔影趺なり、
六九四六　会成は則ち天巔地趺なり、
六九四七ー四八　唯だ其の脈を導けば。則ち轉は根よりして上に達し、以て幹を爲す、
六九四九　運は枝に至りて下に鬱し、以て根に歸す、
六九五〇　轉巔なる者は廣なり、轉趺なる者は狹なり、
六九五一　運巔なる者は狹なり、運趺なる者は廣なり、
六九五二　辰は暗體を以て、而して景中に重ぬ、
六九五三　星は明體を以て、而して影中に列す、
六九五四　列星は廣と雖も、而も其の脈絡を一にす、
六九五五　重辰は狹と雖も、而も其の脈絡を各にす、
六九五六ー六二*　（欄外追記につき削除。）

六九六三　星なる者は影曜なり、
六九六四　辰なる者は景曜なり、
六九六五　運圈の中。星漢日月は。軸を緩急の節に分つ。
六九六六　圈は乃ち弧なり、
六九六七　軸は乃ち弦なり、
六九六八　月弧の弦は短、而して運勢は急なり
六九六九　日弧の弦は長、而して運勢は稍や緩なるも、亦た同中の異なるのみ。
*六九七〇　星漢に至れば則ち弧形は最大にして。弦旋も亦た遲なり。
六九七一　日月　將に根實を結ばんとするの前。會易の精は華を著す。
六九七二　地なる者は持の水燥を以て自から養う。
六九七三　運勢は持中に入れば則ち無し。
六九七四　易蘊は地面に播し。質實の養を爲す。
六九七五　天なる者は日月を以て其の根を護す。
*六九七六ー七七　是を以て其の根は運中に在りて。而して月は其の象を歧せずして。其の行を歧す。
　　日は其の行を歧せずして。其の象を散ず。
六九七八　猶お花蘂の其の辨を多くして以て自から其の心を守るがごとし。而して
六九七九　日は其の弧中に華し。自から機軸を出だす。
六九八〇　諸辰は其の日を囲繞す。

(I 453b)

六九八二　以て華の天地を開く。
六九八三　以て實の天地を偶す。是に於て
六九八四　保根の氣は西轉す、
六九八五　養花の氣は東運す。而して
六九八六　諸辰は層層を相い重ねて、機軸を運す、
六九八七　衆星は点点と平布して、罫面を圍む。是に於て
六九八八　衆星は脈絡を一にす、
六九八九　諸辰は脈絡を各にす、
六九九〇ー九一　是に於て運環の成る所は。層層緩急有り。故に
*六九九二　轉ずる者は、章を地に於て羅ねて、質を轉中に於て没す、
六九九三　運する者は、文を天に於て繫けて、氣を持中に於て潜む。故に
六九九四　轉圈は地心より起りて、而して天表に至る、
六九九五　運圈は天表より反して、而して地心に歸る、
六九九六　轉は亭亭として幹を爲す。章は持中に具す。
六九九七ー九八　運は文を運中に開きて。節を生じ枝を出だし。華を開き蔓を出だす。
六九九九　嘘喩は以て日の南北を致す。蓋し日弧以内の動なり。
七〇〇〇　地は根を以て中を占む。其の華は弧に居らざること能わず。
七〇〇一　弧は地を周る。日は天地に遍す。

七〇〇二　日月は既に自から節を生じ枝を出だす。
七〇〇三　以て其の華を開きて根に合して實を爲す。
七〇〇四　何ぞ其の艸木と能く相い似たる。然り而して
七〇〇五　日月の物を爲すは、會易の性の標に成るなり、
七〇〇六　水火の物を爲すは、會易の物の本に成るなり、
七〇〇七　水火なる者は麁象、遂に地質に培う、
七〇〇八　運轉なる者は虛氣、以て日月を釀す、
七〇〇九　此れは則ち質より氣を結ぶ、
七〇一〇　彼れは則ち氣より象を發す、
七〇一一　其の理を通ずるを以て。一球を混成す。是を以て
七〇一二　水火は地に用有り、
七〇一三　日月は天に爲有り、
七〇一四　運の易を折りて地に向うこと數萬年を經て。而して天を一周す。
七〇一五　標は日月の偶弧を爲す。其の勢は急なり。
七〇一六　日は轉ずること三百六十有六度の頃を度る、
七〇一七　月は轉ずること二十七回の頃を度る、
七〇一八　轉行は一齋に推去す、下緩上急は、之を自然に於て得る、
七〇一九　運行は節節に分推す、上緩下急は、之を使然に於て得る、

七〇二〇　日影なる者は会易なり。会易は象を著して。天地と相い杭す。
七〇二一　自から英華を枝頭に於て開きて。根實と勢を張る。是を以て
七〇二二　日を天と爲す、
七〇二三　影を表と爲す、
七〇二四　日は巔を爲す、
七〇二五　影は趺を爲す、
七〇二六　日は天を爲す、
七〇二七　影は地を爲す、
七〇二八*（復元）　明暗大小の辰。其の軸を以て其の輪を轉ず。
七〇二九*（復元）　其の道は黄道に依違す。
七〇三〇*（復元）　亦た月と西轉の游輪を爲す。是に於て
七〇三一　歧は圏線に在らず。故に星漢は罫を布く。
七〇三二　日月は其の處を認む。
七〇三三　日月は東運の線。一西線有りて之を纍ぐ。
七〇三四　日なる者は其の華英を盛にして。其の依違の歧は微なり。
七〇三五　月なる者は華英を分たず。其の行を迂邪にして。
七〇三六　艸木の蔓を出だす者に似たり。
七〇三七　杳渺たる昊天。星漢は則ち遠し。

七〇三八　日月は始めて能く地と親しむ。
七〇三九　是に於て屬物を除けば。則ち日月の一を見る。
七〇四〇　持は柔境。水燥は以て陸に合す。
七〇四一　寒熱殺威。日月は此に絪縕す。是に於て
七〇四二　氣を轉じて表を保す、
七〇四三　象を運して裏を營す、
七〇四四　升降條貫は。之を樹の外形、
七〇四五　獸の内體に比すれば、
七〇四六　依稀として其の佗ならざるを觀る。
七〇四七　地なる者は会實の質なり。天動に由りて而して上に伸ぶ。
七〇四八　伸ぶる者は垠り有りて。精と融せず。
七〇四九　達は翻って鬱を爲して。折るるが如くにして降る。
七〇五〇　昜虛の復勢は降りて下に入る。
七〇五一　地體なる者は根實なり、
七〇五二　鱗比する者は根實を分かつ、
七〇五三　循環する者は根實を一にす、
七〇五四　地體を根と爲す。轉を幹と爲す。
七〇五五　運は下垂して。枝を生じ華を結ぶ。

七〇五六　杪は地に歸して實を爲す、故に
七〇五七　轉幹は亭亭として。一齊に推去し。能く本根の鬱を漏す。
七〇五八　運文は地に塌し枝蔓は　各　動き。
七〇五九*　能く華實の精に達す、
七〇六〇*　天體は虛にして外に於て柔なり、故に持は能く柔なり、
七〇六一*　地は土を以て下に於て堅を成す、故に水は能く輭なり、
七〇六二　能く滋煦の境を開く、
七〇六三　地體は一圓球なり。噫嘻に中界して。
七〇六四　運轉の斜と。其の進退を合す。
七〇六五　運轉は相い得て。而して日月は駕す。
七〇六六　水生は水に沈む、
七〇六七　燥生は燥に浮く、
七〇六八　諸辰は景中に於て重ぬ、
七〇六九　衆星は影中に於て列す、
七〇七〇［象質］　天體なる者は清虛なり、
七〇七一　地體なる者は濁實なり、
七〇七二　清中は淡濃し　虛體を以て物を成す、
七〇七三　實中は通隔し　實體を以て物を成す

(PB 456)
(I 454b)

七〇七四　實を以て成る者は、則ち收りて結ぶ、
七〇七五　虛を以て成る者は、則ち鬱して發す、
七〇七六ー七八　氣を收むるは則ち影なり、物を收むるは則ち水なり、影と水とは、同徳同機なり、
七〇七九ー八一　機を鬱すれば則ち燥なり、物を鬱すれば則ち華なり、華と燥とは、同徳同機なり、
七〇八二　雙環は竝び成り。脈は反を以て通ず。是に於て
七〇八三　地なる者は暗濁濁重にして本に歸す、弦中に就きて会質を結ぶ、質を結べば則ち氣を外に達す、
七〇八五　華なる者は清明輕乾にして標に發す、弧中に向いて易象を發す、象を發せば則ち氣を内に鬱す、
七〇八七　鬱を以て達に之く、
七〇八八　達を以て鬱に之く、
七〇八九　相い得て保奉護養す。
七〇九〇　天地なる者は、易散会結に成る、
七〇九一　日影なる者は、易發会收に成る、
七〇九二　地なる者は物なり、
七〇九三　天なる者は氣なり、
七〇九四　體界に立つ者は、天に居りて会球を履む、
七〇九五　色界に在る者は、影に居りて易球を奉ず、
七〇九六　会球は弦中に在りて移らず、
七〇九七　易球は弧中に行きて住せず、

七〇九八　日地は　各　弦弧を持す、而して
七〇九九　地の兩端は、弦の左右に在る、
七一〇〇　日地は常に矢勢を爲す、
七一〇一　車を以て之に比するに。地は軸の如し、
七一〇二　　日は輪の如し、
七一〇三　日地は環守を異にすれば、則ち　各　輪軸を有す、
七一〇四　既に之を變と謂えば、則ち變ぜざる所無し、
七一〇五　始めて能く其の名に副う、條理に由りて之を推すに、
七一〇六　洪濛の前、
七一〇七　悠久の後、
七一〇八　轍跡は天に遍して。而して日の地を射す。
七一〇九　將に其の跡を盡くさんとす。而して
七一一〇　星辰の天に於るも亦た然り。之を天變地常と謂う。而して
七一一一　其の地を心とし天を外とし、
七一一二　　日を心とし影を外とするは、
七一一三　二の勢を張るなり。一の成る所より之を觀れば。
七一一四　轉顚は運趺に歸す、
七一一五　運顚は轉趺に歸す、　是に於て

七一一六　日の歧運の、屹として一敵を爲すを觀れば、
七一一七　既已に依りて一天は天地に立ちて且つ運の巔趺を置く。
七一一八ー一九　日影は別に天地を開く。是に於て運轉順逆は一に歸す、
七一二〇　日の自から機軸を出だすは、
七一二一　水燥の機軸を天地に於て合するに反するなり。
七一二二ー二三　既に天地は其の球を二にす。是に於て衆星は運の輪軸に從う、
七一二四　諸辰は日の輪軸に從う、
七一二五　日月は既に運の小環弧中に居れば、則ち自から衆星の心を爲すこと能わず、
七一二六　衆星の心は。則ち運巔に歸して止る。
七一二七　然して則ち日月の歧を爲すを知る可し。
七一二八　一の統ぶるを以て、日月の弧は環軸に歸し、衆星と重形を爲す、
七一二九　二の分かつを以て、弧中に心を爲し、暗影と天地を成す、而して
七一三〇　日通の線は乃ち東中なり。
七一三一　日は東中に依違し。又た自から圓を爲す。
七一三二　月は東中に依違し。種種の歧行を爲す。
七一三三　蔓と稱する所以なり。
七一三四　大圈に星漢有り。
七一三五　小圈に日月有り。

(I 455a)

七一三六　月なる者は日の配なり。
七一三七　諸辰なる者は日の屬なり、
七一三八　小辰は黯黯たり
七一三九　大辰は曀曀たり、
七一四〇　歳塡は又た輪軸を出だして。自から屬辰を領す。
七一四一　歧は歧を出だして。而して枝椏は益ます繁る。故に
七一四二　衆星の列布と。諸辰の重畳とは。其の心は同じからず。而して
七一四三　日月は則ち圏を運心に歸して。而して一統に出でず。但し
七一四四　諸辰なる者は日表に重居す、
七一四五　諸星なる者は影中に布列す、
七一四六　辰なる者は暗物、天の露を爲す、猶お
七一四七　火の明象の、ち地の星を爲すがごとし、是を以て
七一四八　星漢の體は散じて輕なり、
七一四九　日月の體は聚りて重なり、
七一五〇　日影水燥なる者は。性の物なり。
七一五一　絪縕を虚天實地の際に於て爲して。以て生生化化を爲す。故に
七一五二　其の物は敷き得て間無し。
七一五三　分かてば則ち兩環勢を張る、

七一五四　合すれば則ち運轉　脈を通ず、
七一五五　既已に脈を通ず。是に於て
七一五六　轉は内より外に向う、
七一五七　運は内より内に向う、
七一五八　東西は反旋するも。
七一五九　亦た他糾に非ざるに似たり、
七一六〇　天地なる者は、氣　根上に在り、
七一六一　氣象なる者は、華　氣中に在り、
七一六二　水燥の天地は、其の物を合す、
七一六三　日影の天地は、其の物を分つ、
七一六四　二圈は又た一球に歸す。而して上下は位を定む。虚實は體を立す。
七一六五　清濁は色を分つ、
七一六六－六七　乾潤は性を反す、是に於て靜境は物を定む、
七一六八　動境は氣を變ず、
七一六九　其の位は既に立す、
七一七〇　其の理は既に布す、
七一七一　運轉は清に在り、
七一七二　升降は濁に在り、

（内は■で消され、外に訂正。）

七一七三ー七四　濁結する者は質なり、質　成れば則ち實す、實すれば則ち物は地表に居らざるを得ず、

七一七五ー七六　清散する者は氣なり、氣　成れば則ち虚す、虚すれば則ち物は天中に在らざるを得ず、（I 455b）

七一七七　星辰動植は。物の分るる所なり。故に

七一七八　氣物の活立は　動靜虚實に成る、

七一七九　会易の絪縕は、清濁明暗に分つ、

七一八〇［眞妄］　蓋し宙間に天神は遊ぶ、

七一八一　宇内に天地は居る、

七一八二　天は則ち清虚隠没なり、

七一八三　地は則ち濁實見露なり、

七一八四　氣は活して機軸を運す、

七一八五　體は立ちて文章を成す、

七一八六　天文は璀璨として以て宙を紀す、

七一八七　地章は鬱郁として以て宇を成す、

七一八八　覆載は垠る所有り、

七一八九　無垠は幺界に入る、

七一九〇　一室の開閉は。明暗の往來を知らず。

七一九一　烈風の抜樹は。穴隙の明を動かさず。

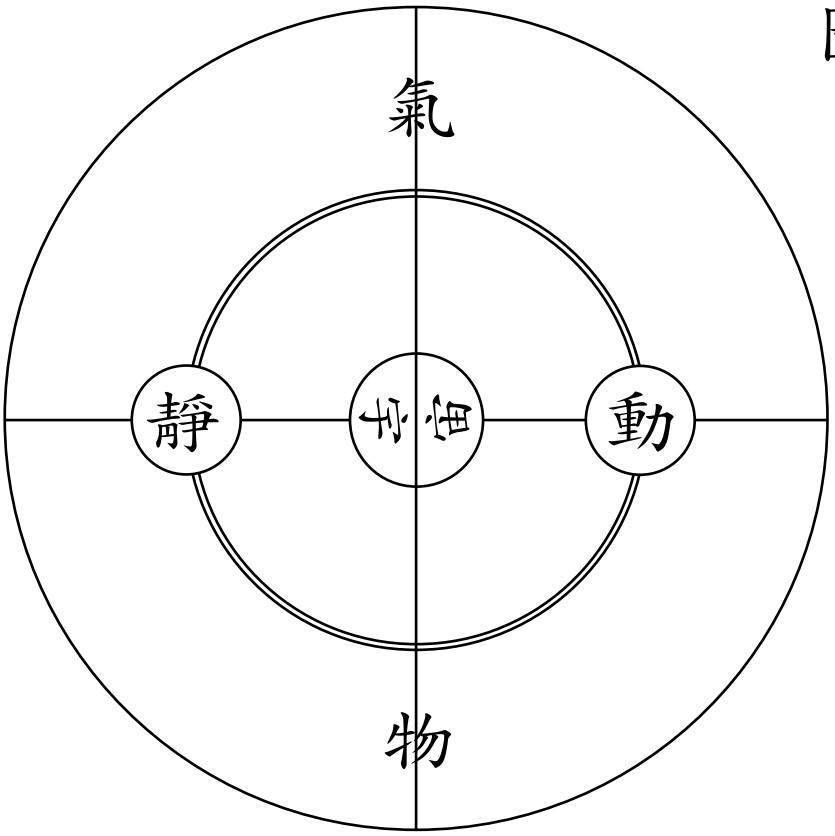
七一九二　圓轉は首尾を没す、

七一九三　直往は標本を失す、
七一九四　天地は中を以てして立つ　而して中は思う可からず、
七一九五　天地は外を以てして成る　而して外は知る可からず、
七一九六　起滅は機に入る。其の神は變を窮む、
七一九七　　其の天は能く定む、
七一九八　麁露すれば則ち門を開き途に上る、
七一九九　隠没すれば則ち室に入り戸を閉すと雖も
七二〇〇　妄人は幽冥を模索し。事物を構幻す。
七二〇一　聴く者は麁心を擾攪して。城郭を結幻す、
七二〇二　燦爛たる文章は。皆な空濛に入る、
七二〇三　之に邇くして我は我を閉す、
七二〇四　之を遐にして物は物を閉す、

(PB 460)

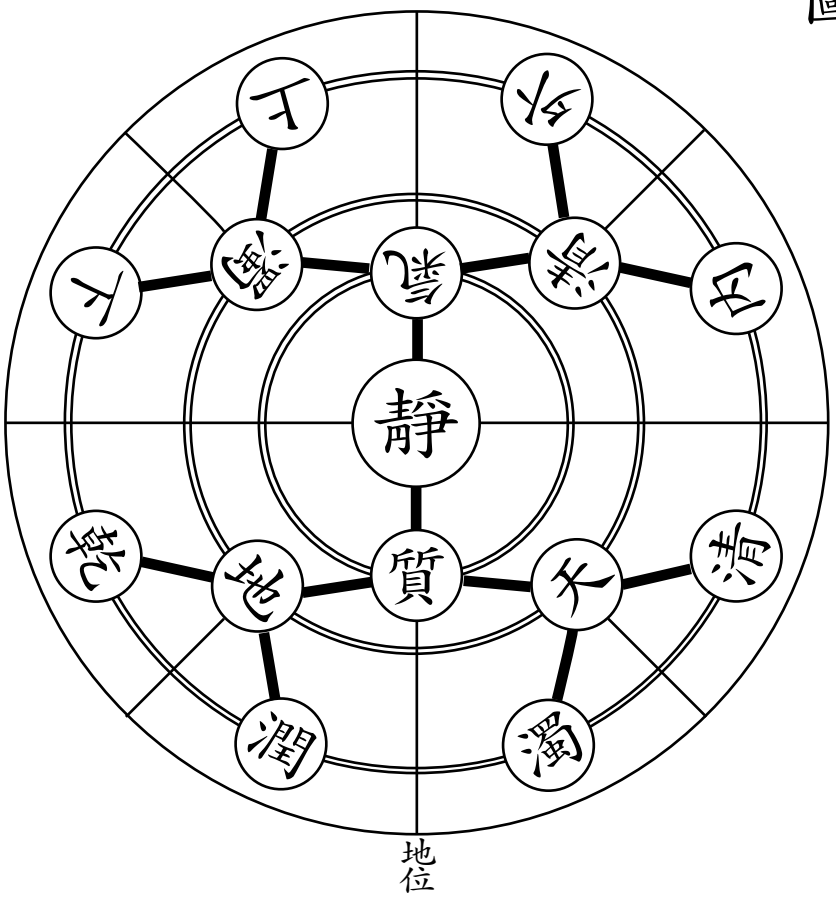
(PB 461)

# 宇宙動靜圖

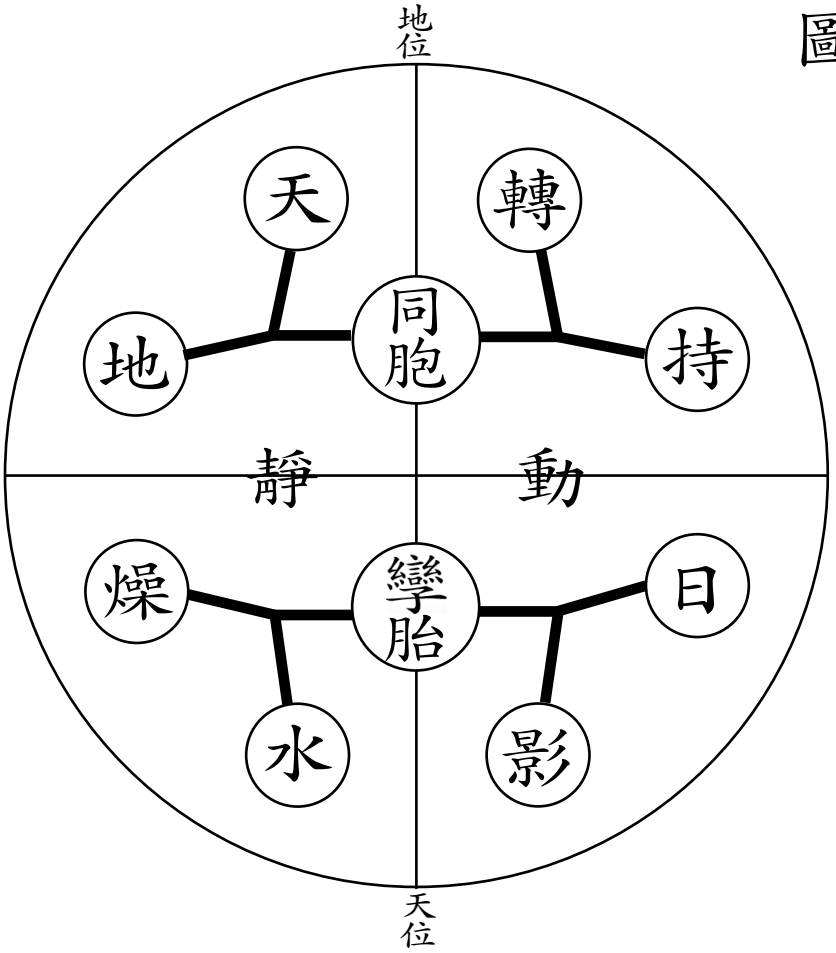


# 動天地圖

# 靜天地圖

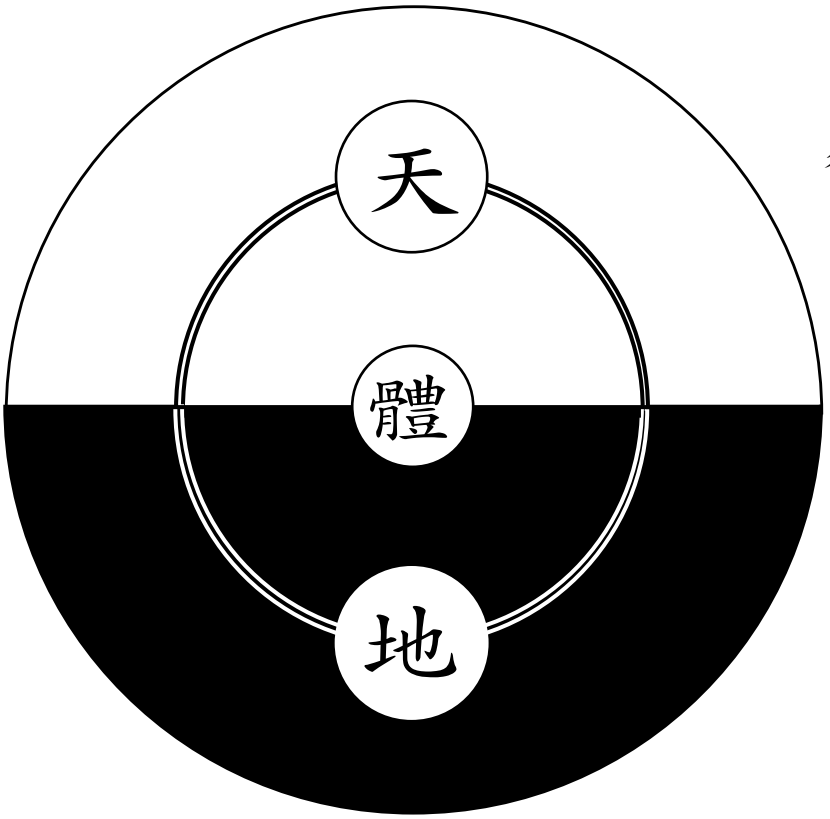


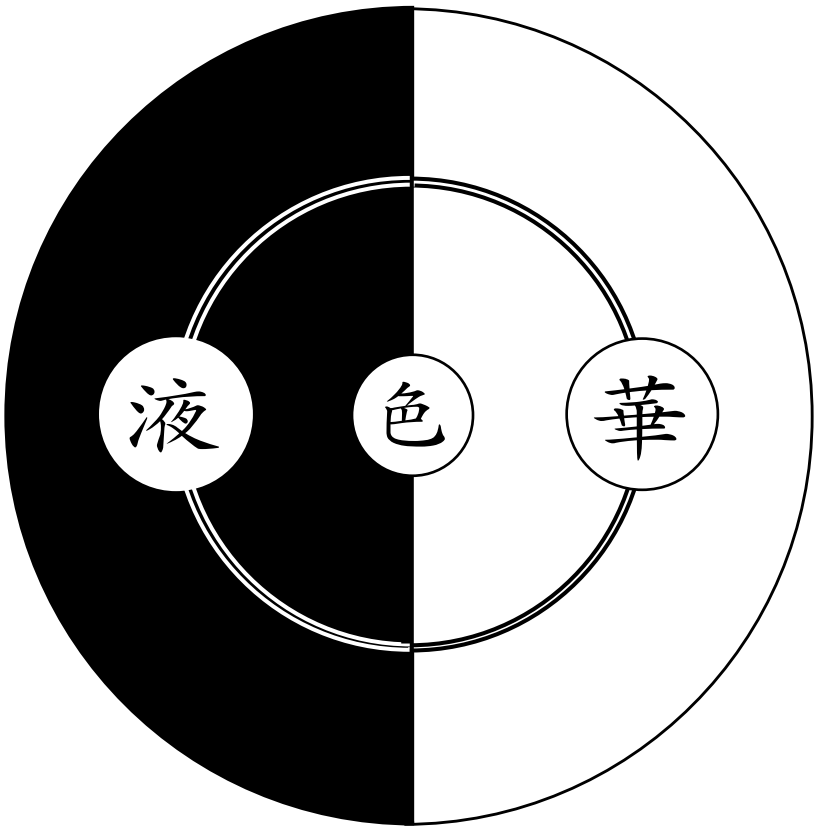
# 同胞孿胎圖



# 天地華液圖一合

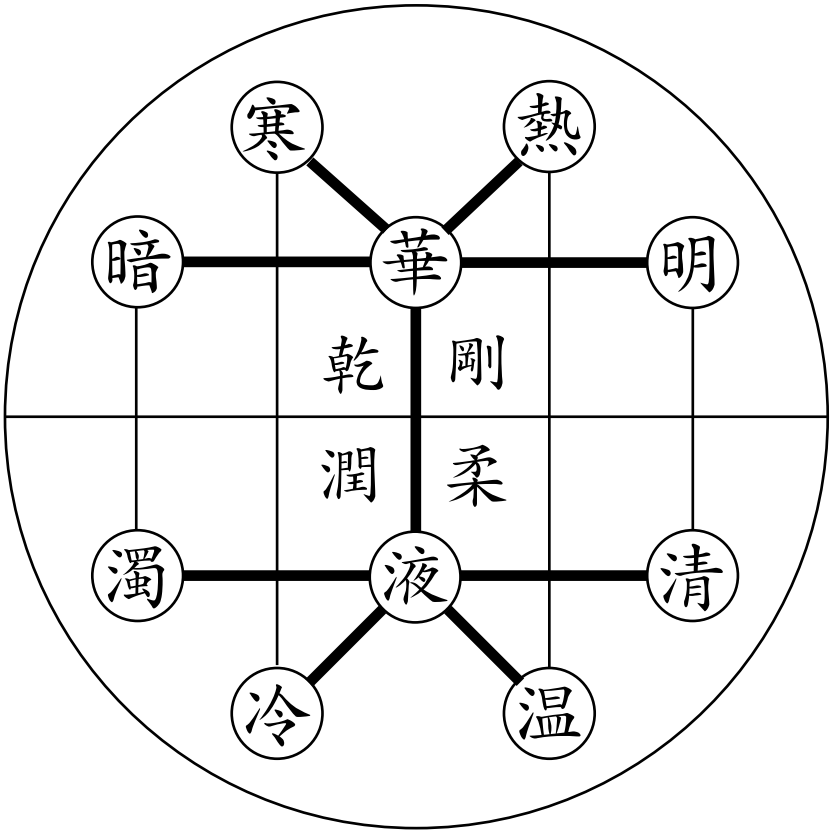
前體
後色




液
色
華

# 四界圖


天位
地位
地位
天位
一
性
體
露
没
欲界
欲界
欲界


寒
熱
暗
華
明
乾
剛
潤
柔
濁
液
清
冷
温

七二一四*［色體二界］
縫は既に綻び。精麁没露す。
七二一五　没境は天機の活を見す、
七二一六　露境は性體の立を露す、
七二一七　體は形體を以てして成る、
七二一八　性は色氣を以てして成る、
七二一九　虚動靜實は、體の物を爲す、
七二二〇　明暗寒熱は、性の物を爲す、
七二二一　體物は性物を容る、
七二二二　性物は體物に居る、
七二二三　體物は一球にして、條貫相い通ず、
七二二四　性物は兩環にして、理析相い隔つ、
七二二五　理析は相い隔つと雖も、而も
七二二六　條貫は一球なり、是を以て
七二二七　其の分つ者は偶比合一す。
七二二八　日影は月景を析して、而して上に動く、
七二二九　水燥は溼火を析して、而して下に遊ぶ、

七二三〇　日影水燥なる者は其の雄なり、
七二三一　月景溼火なる者は其の雌なり、
*七二三二―三三　體の一球を爲す者は天地なり、　天地を説く者は則ち體の虚實動止に入る、
*七二三四―三五　性の連環を爲す者は華液なり、　華液を説く者は則ち性の清濁寒熱に入る　(PB 461, I 456a)
七二三六　體は同胞を見す、
七二三七　性は孿胎を見す、
七二三八　水燥は載を見して地圈を假る、
七二三九　日影は容を見して天圈を別つ、
七二四〇　剖析して對を反する者は。一の分なり。
七二四一　分は能く一に歸すれば。則ち孿胎は一母に成る。
七二四二　天地なる者は、之を散結に於て用し、之を虚實に於て體す、
*七二四三　華液なる者は、之を發收に於て用し、之を乾潤に於て成す、
七二四四　華なる者は日影にして、發收を虚體に於て物して、而して明暗寒熱を爲す、
*七二四五　液なる者は水燥にして、解結を實體に於て物して、清濁温冷を成す、（而してを欠くか。）
七二四六　［散結發收］　蓋し坱坱の處は。中外既に立つ。
七二四七　結は依る所有り、而して質を中に於て成す、
七二四八　散は向う所有り、而して氣を外に於て充つ、

七二四九　之を坱坱の　中を併せて結ぶ所無きに比すれば。則ち

七二五〇　其の散は亦た結なり。

七二五一　既に散を併せて結を爲す。鬱然の文章。一大結物に成る。

七二五二　既に一大結物を得る、

七二五三　又た一坱散氣を餘す、

七二五四　一の剖析は。会易を平分す。

七二五五　平は不平に走り。不平は平を合す。

七二五六　衡は低昂せず。其の力は相い持す。

七二五七　易に走り会に走る。其の勢は相い傾く。故に

七二五八　易物は外に向い、其の虚動に託す、

七二五九　会物は内に向い、其の實止に託す、

七二六〇　日影水燥なる者は性物なり。天地の體に託す。

七二六一　覆おう者は文を見す、

七二六二　載する者は章を呈す、而して

七二六三*　天物は體を以て其の虚體を見す、

七二六四　地物は體を以て其の實體を露す、
七二六五　其の勢は則ち背きて相い走る
七二六六　其の力は則ち對して相い持す、
七二六七　天は散じ地は結ぶ、
七二六八　火は發し水は收む、
七二六九　天地は體を露す、
七二七〇　水火は性を見す、
七二七一　體は其の位を立てて覆載す、
七二七二　性は其の形を活して絪縕す、
七二七三　人は麁小の身を以て。水火の中間に立つ。
七二七四　己よりして天地を分つ。亦た未だ盡くさざるなり。
七二七五　若し一坱散氣を以て。此の一大結物を觀れば。
七二七六　此の如く大なりと雖も。而も亦た会なり。小なり。結なり。物なり。故に
七二七七　天地は本と一なり。之を散物に於て移せば。則ち
七二七八　植の皮身なり。
七二七九　動の皮肉なり。故に
七二八〇　坱坱たる一昜散氣は。此の一会結物を爲す。
七二八一　一昜散氣、

七二八二　一大結物、
七二八三　結物を開き天地を見す。天地を開き華液を見す。
七二八四*　氣は則ち精物なり、
七二八五　物は則ち麁露なり、
七二八六　天は爾く散虚精清す、
七二八七　地は爾く結實麁濁す、
七二八八　人は地上に立ちて。天上の低覆する者を望み。
七二八九　己以下なる者を以て、結實麁濁と爲す、
七二九〇　己以上なる者を以て、散虚精清と爲す、是を以て
七二九一　己の身。暨に偕居する者を以て之を分つ者なり。
七二九二　若し己の身を精して。日星倒射の地に置き。以て此の天地を觀れば。則ち
七二九三　水土の核は。日影　之を桴す。
七二九四　水烟星月は匝聚して。而して同じく結實麁濁に歸す。是に於て
七二九五　結實麁濁は。散虚精清を食す。
七二九六　若し散虚精清にして。結實麁濁を吐せば。
七二九七　則ち散虚精清は。焉んぞ精没を得ん。
七二九八　既已に精没せずんば。則ち相與に勢を張らん。故に
七二九九　没して方位形理を立て、

(I 456b)

(PB 473)

露して散結通隔を爲す者は、
七三〇一　没中に見るる有り、
七三〇二　隠中に露する有り、
七三〇三　彼此は粲立す。以て覆載を成す。
七三〇四　故に精麁は食して天地を混成す、
七三〇五　吐して天地を粲立す、
七三〇六　粲立すれば則ち一氣大物なり。
七三〇七　一氣の性は華液に於て見る、
七三〇八　大物の體は天地に於て露す、
七三〇九　天地は散結す、
七三一〇　会易は絪縕す、
七三一一　萬物は此に於て遊ぶ。
七三一二　会結べば　則ち結中に易發す、
七三一三　易散ずれば則ち散中に会收す
七三一四　会は、天中に於て收めて影、地中に於て收めて水なり、
七三一五　易は、天中に於て發して日、地中に於て解けて燥なり、
七三一六　天色は散虚に清通す、
七三一七　地影は結實に濁隔す

七三一八　虚實なる者は没露散結す、
七三一九　清濁なる者は隠見通塞す、
七三二〇　天地は之を體境に於て觀る、
七三二一　華液は之を色境に於て觀る、
七三二二　體實の物を質と謂う、
七三二三　體虚の物を象と謂う、
七三二四　容れらるるの物は、之を容るるの體に従えば。則ち
七三二五　象中も亦た象質を有す。是を以て性體の合する所は。
七三二六　收めて結ぶ、其の堅は則ち地にして、而して其の輭は則ち液なり、
七三二七　發して散ず、其の精は則ち天にして、而して其の麁は則ち華なり、
七三二八　天象なる者は日を盛と爲す、会影の斂は、散じて天を爲す能わざるに由る、
七三二九　地質なる者は水を大と爲す、易氣の噴は、結びて地を爲す能わざるに由る、故に
七三三〇　易散の中、会は易を發す、
七三三一　会結の中、易は会を噴く、
七三三二　細かに條理の貫く所を尋繹するに。
七三三三　会は易散の處より、收めて質を結ぶ、
七三三四　易は会結の處より、發して象を見す、蓋し
七三三五　地なる者は實す、其の體は密結、其の氣は麁解なり、

(PB 474)

七三三六　密結は入る可からざれば、則ち物は皆な麁解に居る、
七三三七　天なる者は轉ず、其の轉は剛急、其の運は柔緩なり、
七三三八　剛急は行く可からざれば、則ち物は皆な運緩に從う、
七三三九　轉中は則ち　氣は西走し、象は東走す、
七三四〇　實中は則ち　氣は上行し　質は下行す、
七三四一　實の極は、土石よりも堅くして、露質の下に潜む、
七三四二　動の極は　風濤よりも剛にして、没氣の標に急ぐ、
七三四三　時處は其の物を精没し、經通緯塞、露する所無し、
七三四四　天地は其の物を麁露し、文質實質、没する所無し、
七三四五　天は則ち虚にして、而して
七三四六　地は則ち實なり、
七三四七　天虚は透らざる所莫し、
七三四八　地實は隔てざる所無し、
七三四九　天象は東行して西退す、
七三五〇　地質は天居りて地立つ、是に於て
七三五一　火の象は、則ち虚を以てして外に出づ、
七三五二　以て氣を發し、以て物を食し、物　來りて接すれば則ち食して吐す、
七三五三　水の質は、則ち實を以てして内に入る、

七三五四　以て物を容れ、以て氣を拒み、氣、來りて交われば則ち拒みて容る、故に

七三五五　水は能く火氣を食す、而して火體を養す、

七三五六　養すと雖も而も火體を容れず、小中分別すれば、則ち膏は能く養す、而して（能を欠くか。）

七三五七　水は則ち賊す、大物より之を觀れば、膏と水と奚んぞ擇ばん、（則を欠くか。）

七三五八　火は　水氣を食す、而して水體を養す、（能を欠くか。）

七三五九　養すと雖も而も水體を容るる能わず、小中分別すれば、則ち燐は能く親す、而して

七三六〇　火は則ち疏す、一氣より之を觀れば、則ち燐と火と奚んぞ擇ばん、

七三六一　天散地結の分にては。氣は聚散する有り、質は解結する有り、

七三六二　蓋し一なり。其の用は則ち吐食を見す。

七三六三　火は溼柴に著けば、則ち溼暗上に浮く、

七三六四　火は溼物を煨せば、則ち溼潤内に結ぶ　是を以て

七三六五　影體は、日氣の發を以てして散を爲す、

七三六六　日體は　影氣の斂を以てして聚を爲す、

七三六七　燥體は、地を水質に占めらるに由りて升り解く、

七三六八　水體は、地を燥氣に囲まるるに由りて降り結ぶ、是を以て

七三六九　水質の收まる所は、火發の本を爲す、

七三七〇　燥氣の解くる所は、水結の原を爲す、故に

七三七一

七三七二　火　南地に解くれば、則ち水は北地に凝す、
七三七三　火　北地に解くれば、則ち水は南地に凝す、
七三七四　影は収め地は結びて、而して天地は会成す、
七三七五　天は散じ日は發して、而して天地は易成す、
七三七六　水は質を結外に融して、而して解くる所の燥に偶す、
七三七七　日は象を散中に發して、而して収むる所の影に偶す、
七三七八　轉間に日影有り、
七三七九　地表に水燥有り、
七三八〇　水は親しむ可し、而して火は親しむ可からず、
*七三八一　諸を地上の火に試みて。而して水火の用を知る。
*七三八二　水火の用を知りて。而して後　華液の絪縕。以て窺う可し。蓋し
七三八三　易は収結の中より、天間に鬱發すれば、則ち
七三八四　華を象に於て爲す、華は日を以て其の宗と爲す、
七三八五　会は發散の表より、地上に疏收すれば、則ち
七三八六　液を質に於て爲す、液は海を以て其の宗と爲す、故に
七三八七　火なる者は天会を收むの中に於て發す、
七三八八　水なる者は地易を解くの中に於て融す、
*七三八九　發收解結する者は。天地の態なり。天地の異なるを以て。天地の態も異なる。

(I 457b)

(PB 476)

七三九〇　土石なる者は體成なり、
七三九一　金水なる者は性成なり、
七三九二　性に成る者は凝融す、
七三九三　體に成る者は解結す、
七三九四　凝融解結は。本と佗に非ず。
七三九五　唯だ其の性の異なるを以て。而も其の態も亦た異なり。故に
七三九六　土にして常に解く、
七三九七　石にして常に結ぶ、
七三九八　金にして常に凝す、
七三九九*　水にして常に融す、然り而して
七四〇〇　水なる者は天然の融物なり、
七四〇一　金なる者は天然の凝物なり、
七四〇二　氷なる者は水にして凝す、
七四〇三　汞なる者は金にして融す、
七四〇四　石なる者は天然の結物なり、
七四〇五　土なる者は天然の解物なり、
七四〇六　玉なる者は石にして精なり、
七四〇七　石なる者は玉にして麁なり、

七四〇八　土なる者は土にして解なり、
七四〇九　砂なる者は土にして結なり、
七四一〇　結なる者は固にして脆なり、
七四一一　凝なる者は輭にして粘なり、
七四一二　金は粘り石は脆し、
七四一三　埴は粘り壌は脆し、
七四一四　此の性の有らざる所靡ければ。則ち
七四一五　艸木鳥獣、
七四一六　萬の事物、
七四一七　人の性情、
七四一八　物に従いて名を異にすと雖も。堅輭を有せざる所靡し。
七四一九　稲の糯粳。禾の粱秫。結ぶ所佗に非ず。
七四二〇　水火なる者は。会易の麁體なり。会易の用を綻露する有り。故に
七四二一　或いは結を解き。又た能く結を固にす。
七四二二　或いは解を結び。又た能く結を輭にす。之を此に於て試みるに。
七四二三　水なる者は滋潤を以て物を黏す、
七四二四　火なる者は乾燥を以て物を固す、
七四二五　陶瓦なる者は人造の石、水は粘し火は固る、

七四二六　氷金なる者は天凝の水、晛は澌き火は融す、是を以て

七四二七　土に和すに水を以てし、之を攻むるに火を以てす、其の質は石を爲す、

七四二八　之に灌ぐに水を以てし、之を攻むるに火を以てす、其の質は終に解く、

七四二九　體を以てして成る者は、火を見て解く、

七四三〇　性を以てして成る者は、火を見て融す、

七四三一　條理は必ず往く所に於て剖す。

七四三二―三五　而して日は景を吐す、水は溼を吐す、溼は火を含む、景は月を含むと

七四三六　天なる者は散易なり、

七四三七　地なる者は結会なり、

七四三八　其の間は則ち日影水燥なり。

七四三九　影なる者は收会なり、

七四四〇　日なる者は發易なり、

七四四一　易發は景を伸ぶれば、則ち露は其の中に結ぶ、

七四四二　水なる者は結会なり、

（編集による削除。）

七四四三　会溼は易を發すれば、則ち星は其の表に發す、

七四四四　月と辰とは、天の露なり、

七四四五　火と雷とは、地の星なり、

七四四六

七四四七　地は会を弦中に結びて止る、
七四四八　日は昜を弧中に發して走る、
七四四九　中に居りて外を觀る。目は際涯を盡くさず。
七四五〇　地に於て囿せらるるを以てなり。
七四五一　日景は、昜の一圓物なり、
七四五二　影地は、会の一圓物なり、
七四五三　天は地を包む、
七四五四　日は地を循る、
七四五五　混淪たる一圓物。未だ之を坱坱に歸せず。
七四五六　氣は收れば則ち会肅す、肅し結べば則ち地なり、
七四五七　質は結べば則ち氣達す、達し屈せば則ち鬱なり、
七四五八*　日表の餘氣は。地に歸して燥なり。
七四五九　燥は昜にして解く、
七四六〇　水は会にして融す、
七四六一　水は則ち上なれば影に比し日に反す、
七四六二　　下なれば火に反し溼に比す、
七四六三　日は会を食す、而して其の發は盡きず、
七四六四　地は昜を噴く、而して其の融は已まず、

鬱して發すれば則ち日なり、（対の文を欠くか。）

七四六五　剖析の盡きざる所然り。

七四六六［象質通脈］

七四六七　發すれば則ち乾く、

七四六八　融すれば則ち潤う、

七四六九　潤は以て水を釀す、

七四七〇　乾は以て火を致す、

七四七一　乾なる者は、求めて贍る者なり、

七四七二　潤なる者は、漏れて慊き者なり、

七四七三　水は火を以て融け、火を以て枯る、火の吐きて食うを觀る、

七四七四　火は水に由て燃え、水に由て滅す、水の噴きて嗡うを觀る、

七四七五　会は噴きて而も易を盡すと雖も、嗡を見るを以て而して又た能く会に入る、

七四七六　易は吐きて而も会を盡すと雖も、食を見るを以て而して又た能く易に入る、

七四七七　條貫の道なり。是の故に

七四七八　天は散じ地は結ぶ、

七四七九　会は收め易は發す、

七四八〇　收むる者は地に歸す、

七四八一　發する者は天に之く、

七四八二　散結は天地を成す、

七四八〇　發收は華液を爲す、故に
七四八一　日影は天に於て照蔽す、
七四八二　水燥は地に於て滋煦す、是に於て
七四八三　象は色に於て濃にして性を見す、
七四八四　質は體に於て實にして物を露す、
七四八五　天氣なる者は精なり、
七四八六　地氣なる者は麁なり、
七四八七　天體なる者は虛なり、
七四八八　地體なる者は實なり、
七四八九　吐せば則ち天精は地麁を容れず、
七四九〇　地麁は天精に居らず、是に於てか精も亦た麁なり、
七四九一　天體なる者は虛なり、
七四九二　地體なる者は實なり、
七四九三　天虛は地實を容れず、
七四九四　地實は天虛に居らず、是に於てか虛も亦た實なり、
七四九五　食せば則ち麁を出でずして後精なり、
七四九六　實を拒みて後虛せず、
七四九七　没跡と露跡と同じく居る、

七四九八　没體と露體と同じく居る、
七四九九　同居は粲立を妨げず。以て能く混成す。
七五〇〇　混成すれば則ち天を地に於て觀る、
七五〇一　粲立すれば則ち天を地に於て吐す　故に
七五〇二　天は地に於て没し　地は天に露すれば　則ち地も天の大の若きなるを觀る、
七五〇三　地は以て天を吐し　天は以て地を吐せば　則ち天は大にして地は小なるを觀る、
七五〇四　是に於て此の麁露の天地の地を爲し
七五〇五　精没の天地の天を爲すを觀る、是を以て
七五〇六　體虚の地は。體實の天よりも精なりと雖も。
七五〇七　其の地を取りて以て是れ天なりと爲す可からず、
七五〇八　此の天を取りて以て其の地なりと爲す可からず、是に於て
七五〇九　聲なる者は麁にして、而して
七五一〇　主なる者の精なるを觀るなり、
七五一一　主なる者は活す、
七五一二　聲なる者は死す、
七五一三　死聲を以て活主を呼ぶ。
七五一四　其の定まる所を前に指せば。則ち活する所を後に逸す。
七五一五　其の得るは。實に逸するに勝らず。

苟くも意を聲外に於て活せずんば。則ち言語するに益無し。
已に粲焉として立つ　聲は之を毫厘に於て移す可からず、
本と混焉として成る、以て之を天地に於て盡くす可し、是を以て
虚なる者は虚なりと雖も、而も虚を呼べば則ち實も亦た從う、
精なる者は精なりと雖も、而も精を呼べば則ち麁も亦た從う、故に
之を会と呼ぶ者も　易なり、
之を地と呼ぶ者も亦た天なり、故に
氣は物に非ずと雖も而も其の呼ぶ所の氣は。
或いは氣なり。
或いは物なり。
之を他に移すに。皆な然らざる靡し。是を以て
之を實結と謂う者も。亦た之を散虚と謂う。
之を地體と謂う者も。亦た之を天氣と謂う。
聲を聲とし主を主とす。
此を以て之を求めずんば則ち將に聲主に泥まんとす。

天體なる者は散なり、散中に明暗を偶す、
地體なる者は結なり、結中に乾潤を偶す、
易氣　散ずるの中、会を收め易を發す

(I 459a)

(PB 480)

七五三四ー三五　共に象を清虚運轉の氣中に於て成す、
七五三五　其の中に就きて之を言うに、影收は日を圍むを以て　而して
七五三六ー三七　日は鬱發して以って影を排すれば、則ち影は氣を爲す、
*七五三八　日は物を爲す　是れ氣象の明暗を以て天中に偶するなり、
七五三九　会質　結ばるの中、易を解き会を結ぶ、
七五四〇　共に氣を濁質升降の持中に於て爲す、
七五四一　其の中に就きて之を言うに、水結は氣を排すを以て　而して
*七五四二　氣は排然として而して水を出せば、則ち燥は氣を爲す、
*七五四三ー四四　水は物を爲す　是れ氣質の乾潤を以て地中に偶するなり、
七五四六　故に剖析して對持す。則ち天地は各おの其の物を偶す。
七五四七　一は能く萬を立す。
七五四八　一は能く萬を立すと雖も。
七五四九　亦た各おの天地の對を廢せず。
七五五〇　體の虛する者は則ち神活す、
七五五一　體の實する者は則ち物立す、
七五五二　虛にして活するを以て　而して覗は轉じ矩は持す、
七五五三　天體は以て剛なり、
七五五四　持體は以て柔なり、

實にして立するを以て　而して天は覆い地は載す、
天體は以て虛す、
地體は以て實す、
水火なる者は。氣を以て體を爲す。而して
火は則ち麁なり、
水は則ち密なり、而して
日影は天に於て偶す、
水燥は地に於て偶す、而して
地體　土は則ち輭なり、
　石は則ち堅なり、
動植は體を此に於て資る。
水なる者は地の象なり、諸を天象に比すれば、則ち質を解くを以て、而も猶お地質に類す、
月なる者は天の水なり、諸を地火に比すれば、則ち氣の精なるを以て、猶お地象より輕なり、
轉は剛にして濁を拒む、
持は柔にして質を容る、
地は堅にして質を拒む、
燥は柔にして象を容る、
　物なる者は體に成り。形に和し。位に立ち。機に行く。

(PB 481)

七五七五　形は則ち正斜なり、
七五七六　體は則ち虚實なり、
七五七七　虚實は正斜を得ざれば、則ち成らず、
七五七八　正斜は虚實を得ざれば、則ち立たず、
七五七九　物の體に成るや。神物と雖も。亦た虚實を以てして没露す。故に
七五八〇　一氣は則ち其の體を虚するなり、
七五八一　大物は則ち其の體を實するなり、
七五八二　實は則ち中外を位と爲す、而して上下内外を定むる有り、
七五八三　天地の物を爲すや、清虚濁實を其の中に於て體す、
七五八四　虚は則ち正邪を理と爲す、而して升降運轉を變ずる有り、
七五八五　火の物を爲すや、乾潤焚溺を其の中に於て性す、
七五八六　一動一止、動は轉を成す、
七五八七　止は持を成す、
七五八八　一虚一實、虚は天を成す、
七五八九　實は地を成す、
七五九〇　虚にして動き、動きて旋る、廼ち之を轉と爲す、
七五九一　靜にして實し、實して立す、廼ち之を地と爲す、故に
七五九二　虚氣轉象、體は剛柔を爲す、

七五九三　實體持地、體は堅輭を爲す、
七五九四　宇宙は則ち以て其の物を精没す　没すと雖も而も經緯は粲然たり、
七五九五　天地は則ち以て其の物を麁露す　露すと雖も而も方位は隠然たり、
七五九六　轉持は剛を以て規矩を見す　見すと雖も而も直圓の正を隠す、
七五九七　水火は柔を以て華液を見す　見すと雖も而も寒熱の形を示さず　故に
七五九八　清濁寒熱は　物に徹するの力有りと雖も　其の體の柔を以てして碍げず、（而もを欠くか。）
七五九九　轉持水火は　氣に虚するの體有りと雖も　而も其の體の剛を以てして物を拒む、
七六〇〇　宇宙は精せずんば　何を以てか物を率いて之を移し　而して其の跡を没するを得ん、
七六〇一　物を容れて之を住わし　而して其の體を没す、
七六〇二　天地は實せずんば　則ち奚れを以てか精麁を透し
七六〇三　堅密を融し、
七六〇四　山嶽を起し、
七六〇五　河海を畜えん　然り而して
七六〇六　天虚は礙げず　以て虚を成す、
七六〇七　地質は容れず　以て實を成す、
七六〇八　天地なる者は物なり。體は物の成る所なり。是を以て
七六〇九　氣に對すれば則ち體なり。
七六一〇　虚に對すれば則ち實なり。

(PB 482)

七六一一　天に對すれば則ち地なり。
七六一二　體は物を實體の地中に於て開けば。
七六一三　則ち性も亦た物を其の中に於て爲す。
七六一四ー一五　體性は麁露して。而して天は載す可し。
七六一六　地は踏む可し。
七六一七　色は視る可し。
七六一八　氣は触る可し。
七六一九　日影は相い追う、
七六二〇　水燥は相い盪く、
七六二一　氣は持し風は動く。
七六二二　山は峙え海は陥る。
七六二三　皆な其の體なり。是に於て
七六二四　天體なる者は虚、一精一麁なり、
七六二五　地體なる者は實、一麁一密なり、其の
七六二六　精に於て痕を有する者は、未だ麁を出でざる者なり、
七六二七　虚に於て痕を有する者は、未だ實を出でざる者なり、是を以て
七六二八　精麁を併せて之を麁にす。
七六二九　虚實を併せて之を實にす。

七六三〇　天地の一大結物たる。
七六三一　麁濁動實は體を結ぶ、而して
七六三二　精清靜虛は氣を散ず、
七六三三ー三四　地なる者は實質凝重し、降結沈下す、至小は極を爲して、中位を得て之に乘る、故に
七六三五ー三六　涓埃は漏れる所莫し、而して降結は歸する所有り、
七六三七ー三八　天なる者は虛氣輕融し、升散浮外す、至大は無窮にして、坱坱を得て之に居る、故に
七六三九ー四〇　洪荒は窮まる所無し、而して融散は竟に跡を沒す、故に
七六四一ー四二　地なる者は重凝して下に居り、堅密凝結は核を爲す、
七六四三ー四四　輾麁融解は壤を爲す、拗處は水之を占む、
七六四五　突處は燥之を占む、
七六四六ー四七　天なる者は輕融して上に浮き、精清融散は轉を容る、
七六四八ー四九　麁濁舒解は持を容る、轉處は象之を占む、
七六五〇　持處は質之を占む、
七六五一　是に於て物は。或いは天を得て之に居る、
七六五二　或いは地を得て之に立つ、
七六五三　天を得る者は虛なり、
七六五四　地を得る者は實なり、
七六五五　各おの其の資る所に從うなり。其の散は萬物を爲す。

(I 460a)

七六五六　上は則ち星辰雲雨なり、
七六五七　下は則ち土石動植なり、而して
七六五八　雲雨は則ち象中の實物なり、
七六五九　動植は則ち質中の虚物なり、
七六六〇　天なる者は氣の藏なり、
七六六一　地なる者は質の府なり、是を以て
七六六二　質は愈いよ天に寡なり、
七六六三　象は愈いよ地に寡なり、
七六六四　天に居り地に立つ。物は絪縕の間に擾擾たりと雖も。亦た唯だ一動一植のみ。
七六六五　一動一植は。是れ之を生と謂う。生は物を動植に分ち。居を水燥に分つ。
七六六六　地に資りて以て生するを以て。體は堅輭を有し。體を以て生に乘ず。
七六六七　堅植と曰い、輭植と曰う、
七六六八　堅動と曰い、輭動と曰う、
七六六九ー七〇　居を水燥に分てば。則ち堅は水に居る、
　　輭は燥に居る、
七六七一　陸は則ち艸木鳥獸なり、
七六七二　　土鹵金石なり、
七六七三　水は則ち魚龍藻樹なり、

七六七五　　龜介鱗甲なり、
七六七六　［小境］靜にして天地なり、　（これ以下、七八六一まで復元困難。傍記を採用する。）
七六七七　動にして轉持なり、
七六七八　風恬水陸は、則ち體之を持中に於て縮するなり、
七六七九　轉にして日影なり、
七六八〇　持にして水燥なり、
七六八一　晝夜冬夏は、則ち性之を持中に於て縮するなり、
七六八二　一は天中より、會を收め實を結ぶ、
七六八三　一は地中より、易を發し氣を散ず、
七六八四－八五　收むる者は清虛の中に黯黯として、以て能く物を蔽う、結ぶ者體は堅なり、
七六八六　地なる者は水土塊中の核子なり、
七六八七　堅にして至重なり、
七六八八　止にして不動なり、
七六八九　解けて土石を爲す、
七六九〇　融して淡鹹を爲す、
七六九一　之を天に反す、則ち
七六九二*　轉なる者は運轉す、
七六九三　核子に於て桴す、

七六九四　至輕にして柔なり、
七六九五　動にして已まず、
七六九六　物は日月を爲す、
七六九七　氣は景影を爲す、故に
七六九八　土石を觀て以て地と爲す者は、食して未だ核子に至らず、
七六九九　之に火して碎す、
七七〇〇　之に槌して破す、
七七〇一　豈に堅を語るに足らんや、
七七〇二　運轉を觀て以て天と爲す者は、
七七〇三　見て未だ胞を開かず、
七七〇四　清は地を拒む、
七七〇五　剛は物を拒む、
七七〇六　豈に柔を語るに足らんや、
七七〇七　力は引く、
七七〇八　火は輕くして升る、
七七〇九　水は重くして降る、
七七一〇　行は其の路を同じくせず。而して
七七*一一　質を食むを以て而して常に地に就かんと欲す。

(I 460b)

(PB 474)

七七一二　以て象質の同じく物に歸して而して氣に於て異なる所なり。
七七一三　日月なる者は。天の水火。其の路の同じからざるは。
七七一四　彼此一なり。故に
七七一五　天に於ては則ち東　物の地を爲す、
七七一六　　西　氣の地を爲す、
七七一七　氣にして輕虛す、
七七一八　物にして重實す、
七七一九　日は廼ち火なり。同じく会を食す。
七七二〇　故に天行に從うと雖も。
七七二一　而も会行を求むる有り。
*七七二二　轉の方は、猶お地の位のごとし、
*七七二三　天の路は、猶お地の處のごとし、故に
*七七二四　水は降りて而して地に就く、
*七七二五　火は升りて而して天に向う、
*七七二五1復元　日は遲行して轉に後る、
*七七二五2復元　月は急行して天に後る、
*七七二五3復元　月は則ち天の水、下りて疾く運す、
*七七二五4復元　日は則ち天の火、升りて遲く運す、

*七七二六ー三一　（欄外追記に付き削除）

七七三二　天は虚にして輕なり、故に天に親なる者は輕くして浮く、

七七三三　地は實にして重なり、故に地に親なる者は重くして沈む、故に

七七三四　火は發して天に及ばず、

七七三五　水は結びて地に透らず、

七七三六　天火は則ち会に於て發せられ、而して常持の體を内に於て存す、

七七三七　地火は則ち地に於て發せられ、而して毎換の體を外に於て滅す

七七三八ー三九　地水なる者は降る、地は止る、故に地水なる者は、止る所を得て地に聚まる、

七七四〇ー四一　天水なる者は東す、天は西す、故に天水なる者は、止る所無くして天に運す

七七四二　濁隔を以てして彩を其の表に於て塞す、

七七四三　發する者は濁實の表に昭昭として、以て物を能く照す、

七七四四ー四五　散ずる者は氣は麁にして力は浮く、清虚を以て色を其の外に於て通ず、而して　(PB 485)

七七四六　日は天地に華す、

七七四七　水は天地に液す、

七七四八　華は影を以てして護す、

七七四九　液は燥を以てして桴す、故に

七七五〇　日の鬱發は、熱は舒し明は布す、氣は往交すれば則ち乾く、

七七五一　象は引接すれば則ち焚す、　(I 461a)

七七五二　水の融盪は、冷は肅し液は滋す、氣は往交すれば則ち溼す、
七七五三　質は引接すれば則ち溺す、
七七五四　天地の物は、其の位を定めて體を接せず、
七七五五　天地間の物は、其の位を移して體を相い接す、故に
七七五六　火は水に接すれば則ち水を涸す、木に接すれば則ち木を食す、
七七五七　水は木に接すれば則ち木を腐す、火に接すれば則ち火を食す、
七七五八　乾熱は寒に遭いて溫を和し、水を喻いて滋を致す、
七七五九　燥溫は物を煦す、
七七六〇　水滋は物を液す、
七七六一　持中の萬物は。其の滋煦を受く。
七七六二　是れ絪縕の痕を露する者なり。
七七六三　影は肅し日は舒す、
七七六四　燥は煦め水は滋す、
七七六五　絪縕は以て用を造化に於て成す。
七七六六　散氣は虛動を伴う、
七七六七　結質は實止を伴う、
七七六八　天地は容居す、
七七六九　水火は絪縕す、

七七七〇　轉中は氣　剛なり、故に氣は其の力を極む、
七七七一　持中は氣　柔なり、故に氣力は自から微なり、故に
七七七二　寒熱明暗は、天に在りては其の甚を極む、
七七七三　溫冷清濁は　地に在りては其の勢を殺す、
七七七四*　天物は剛を以て自から取る、
七七七五*　　柔を以て之を地に推す、
七七七六　持中の柔輭を知る可し。是に於て
七七七七　持の物は。常に剛勢に勝らず。其の
七七七八　大寒大熱に遇いて凍焚す、
七七七九　大暗大明に遇いて盲羞す、亦た其の徵なり。是を以て
七七八〇　艸木鳥獸は。皆な柔輭の物なり。
七七八一　彼此を通觀して。以て工夫を此の絪縕に於て下すを得る。
七七八二ー八三［用］　蓋し其の成る所は。会は收を以てして結ぶ、
七七八四　　易は發を以てして散ず、
七七八五　燥火は同性にして、火は天に走り、燥は地に居る、
七七八六　水影は同性にして、水は地に浮き、影は地に沈む、
七七八七　影の常に斂まるや、火を束ねる所以なり、

七七八八　火の常に發するや、影を排する所以なり、
七七八九　物を發するを以て、而して明は常に暗分に進む
七七九〇　物を收むるを以て、而して暗は常に明熱を抱く
七七九一　聚散解結は、體成の用なり、
七七九二　發收排喩は、性成の用なり、
七七九三　鬱達肅舒。發斂凝融は。其の間に變化するなり。
七七九四　天なる者は精なり。萬物を容れて有餘を見さず。
七七九五　萬物を除きて不足を見さず。故に
七七九六　聚散解結なる者は。其の中に遊ぶ。蓋し
七七九七　氣は能く聚散す、
七七九八　質は能く解結す、然り而して
七七九九　氣は聚らざれば則ち質結ばず、
七八〇〇　氣は散ぜざれば則ち質通ぜず、
七八〇一　此の氣や。分明に聚散す。
七八〇二　若し彼に間無くんば、則ち何ぞ此に聚まらん、
七八〇三　此に聚まる可くんば、則ち何ぞ彼に間無からん、
*七八〇四－〇五　已に能く聚散す。而して能く聚散する者を容る。精ならざるを得んや。
七八〇六－〇七　水注を以て水を弄するに。水は出でざれば、則ち氣は入らず、

七八〇八　氣は入らざれば、則ち水は出でず、
七八〇九　毫末の間無きを見るが如し。
七八一〇　然りと雖も蘆莩を取りて之に風し。
七八一一　兩端を撚りて之を縮むれば。
七八一二　則ち其の脹るは小にして堅なり。
七八一三　之を緩むれば則ち其の脹は大にして輭なり。
*七八一四　是に於て間無き者も亦た活縮脹を有するを觀る。是を以て
七八一五　發する者は有餘に噴く、
七八一六　今　徑尺の鼓は　聲を數里に徹す、
七八一七　數寸の燈は　明を百歩に致す、
七八一八　收むる者は不足に喩う、
七八一九　一滴の水は、百歩を照すの明を收む、
七八二〇　鼓に灑ぐの雨は、數里に徹するの聲を鈍らす、故に
七八二一　發收なる者は、相い資るの道なり、
七八二二　散結なる者は、體を成すの用なり、是を以て
七八二三　氣の聚散、
七八二四　質の解結、
七八二五　經緯有りと雖も。亦た生化の事なり。

(PB 487)

七八二六　物の將に生ずるや、其の氣は聚まり、
七八二七　物の已に生ずるや、其の質は結ぶ、
七八二八　物の將に化するや、其の氣は散ず、
七八二九　物の已に化するや、其の質は解く、故に
七八三〇　雨は將に結ばんとすれば、則ち会溼 先に動く、
七八三一　子は將に結ばんとすれば、則ち感悦 先に動く、是の故に
七八三二－三三　將に此の物を生ぜんとすれば、則ち此の氣 聚る、聚まれば則ち質 結ぶ、
七八三四－三五　將に此の物を化さんとすれば、則ち此の氣 散ず、散ずれば則ち質 盡く、
七八三六　生化の端。水火は其の徵す可き者なり。蓋し
七八三七　持中は。氣なる者は燥なり、
七八三八　質なる者は水なり、而して
七八三九　水氣は好く收む、
七八四〇　燥氣は好く發す、是れ乃ち
七八四一　氣の常に升り。
七八四二*　質の常に降る所なり。
七八四三　收の極や凝なり、
七八四四　發の極や散なり、故に
七八四五－四六　甕中の儲水は、凝すること甚だしくして氣を聚斂すれば、終に其の器を碎く、

七八四七ー四八　以て其の質を裂く、故に

七八四九　爆竹の鬱火は、逼ること急にして氣を發出すれば、

七八五〇　收めて之を收むれば、氷の大きさは、水より小なり、

七八五一　發して之を發すれば、火の大きさは、薪より大なり、是を以て

七八五二　氷の體を水よりも小にするは、氣の散ずるに非ざるなり、氣の内に收まればなり、

七八五三　火の體を薪よりも大にするは、氣の聚まるに非ざるなり、氣の外に發すればなり、是の故に

七八五四　水を鑵中に置き、火を以て之を煎ずれば、則ち水は鑵中に沸く、

七八五五　綿を匏内に燒き、之を瘡口に置けば、則ち膿は匏内に入る

七八五六　水の鑵中に沸くは、則ち火の其の收物を發散すればなり、

七八五七　膿の匏内に入るは、則ち水の其の發氣を收斂すればなり、故に

七八五八　燥は結鬱により成る、

七八五九　水は解發により融す、故に

七八六〇　充つる者は徒らに充たず、

七八六一　結ばる者は徒らに結ばず、

七八六二　皆な天中に遊ぶ。

［一球二圈］

一結物の外は。坱坱の虚。唯だ清にして虚す。

七八六三　日影水燥は。以て其の間に敷くなり。

七八六四　天地は一胞なり、

(PB 488)

七八六五　華液は孿胎なり、
七八六六　日圈は天心を占むる能わず、弧中に行くを以て、其の圓を全す、
七八六七　水圈は地心を占むる能わず、地表に遊ぶを以て、其の圓を全す、是を以て
七八六八　水燥の圈は。能く天地の球を合すと雖も。而も
七八六九　其の實は不占心の二圈にして。以て天地の中に於て立つ。
七*八七〇　（欄外追記につき削除）
七八七一　［剖析對廣］
七八七四　天なる者は日華を以て、昜徳を上に於て播く、
七八七五　地なる者は水液を以て、会徳を下に於て施す、故に
七八七六　星辰は皆な昜華を承く、
七八七七　動植は皆な会液を含む、
七八七八　日影なる者は、華の營衛なり、
七*八七九　水燥なる者は、液の營衛なり、
七八八〇　日華と月水と、景燥と影溼と、其の性類を同じくして、而して其の会昜を反す、
七八八一　日月と水火と、景影と溼燥と、其の位類を同じくして、而して其の会昜を反す、
七八八二　剖する所。愈いよ多し。而して對する所。愈いよ多し。
七八八三　對する所の多ければ。則ち交態は各おの異なるなり。是を以て　（以下五行復元困難。）（I 462b）
　　天日地水は。則ち一球中に乾潤し。發收を相い貫す。　（PB 489）

七八八四ー八五　兩圈は既に相い分てば。則ち日影は明暗寒熱を有す、
七八八六　水燥は乾潤滋煦を有す。
七*八八七ー八八　（欄外追記につき削除。）
七八八九　引伸触類。以て推す可し。
七八九〇　天地は已に相い分る、
七八九一　萬物は已に竝び立つ、
七八九二　其の物の竝び立つや。各おの其の氣を用いて。交接する所に従う。
七八九三　亦た相い對する者有るなり。
七八九四　姑く徴を人に移して之を言わんに。
七八九五　己の身は則ち一のみ。
七八九六　君に對すれば則ち忠を以て交わる。
七八九七　臣に對すれば則ち禮を以て交わる。
七八九八　父に接すれば則ち孝なり。
七八九九　子に接すれば則ち慈なり。
七九〇〇　男女は相い感ず。
七九〇一　怨讐は相い嫉む。故に
七九〇二　物は則ち條理を以て立つ、
七九〇三　氣は則ち會に従いて變ず、是を以て

七九〇四　正偶は佗に非ずと雖も。竝び立ちて相い反す。
七九〇五　對せざる所有ること莫し。故に
七九〇六ー〇七　火なる者は会を以て燃ゆる者なり、会の粛寒に會すれば、則ち鬱して熱す、
七九〇八　金に會すれば則ち之を融す、
七九〇九　木に會すれば則ち之を燒く、
七九一〇　暗に會すれば則ち光を増す、
七九一一　水に會すれば則ち象を收む
七九一二ー一三　水なる者は昜を以て融する者なり、昜の鬱熱に會すれば、則ち粛して寒す、
七九一四　金に會すれば則ち之を沈む、
七九一五　木に會すれば則ち之を浮ぶ、
七九一六　明に會すれば則ち光を發す、
七九一七　火に會すれば則ち質を失う　是の故に
七九一八　地なる者は結物にして、而して結外に於て水融け火發す、
七九一九　乾は地に交して燥なり、
七九二〇　水は天に接して溼なり、
七九二一　天なる者は散物にして、而して散中に於て日發し月收む、
七九二二　質は日に交わりて影なり、
七九二三　日は月に交わりて景なり、

(PB 490)

七九二四　天地は覆載す、
七九二五　会易は絪縕す、
七九二六　天にして星辰なり、
七九二七　地にして動植なり、
七九二八　紛縕錯雑として。其の盡くす所を見さず。
七九二九［一二分合］
是に於て日影は處を天に於て開く　而して星辰は旋る、
水燥は處を地に於て開く　而して動植は住う、
七九三〇　地著の質は、地の性に從う　故に潤にして暗なり、
七九三一　天懸の象は　天の性に從う　故に乾にして明なり　故に
七九三二　月は暗體と雖も、主に從いて明を假る、
七九三三　火は明體と雖も　主に從いて暗を爲す、
七九三四　火なる者は鬱して發す　象にして天に居る、
七九三五　其の質を食すを以て其の尾の上に向うを推して、而して日の首の東に向うを知る、（復元困難。傍記を採用。）
七九三六　水なる者は收めて結ぶ、質にして地に居る、（同。）
七九三七　其の氣に資るを以て其の尾の地に向うを推して、而して月の尾の東に向うを知る、（同。）
七九三八　火は地を出づる有りて地に入る無し、
七九三九　水は天より降る有りて天に升る無し、而して
七九四〇

七九四一　日月水火。雌雄も亦た勢を張る。
七九四二　日は以て歳を成す、
*七九四三ー四四　月は以て月を成す、天地は隔つと雖も。而も燥物は日に應ず、
七九四五ー四六　水物は月に應ず、滋煦の正に成るなり。（PB 491）
七九四七　水は以て雪を凝す、
七九四八ー四九　燥は以て雷を發す、以て其の極と爲すなり。是に於て
七九五〇　晝夜冬夏する者は、日影なり
七九五一　生化解結する者は、水燥なり、
七九五二　水燥は持中に塞す、以て水陸の文を爲す、
七九五三　日影は轉中に通ず、以て歳時の章を爲す、
七九五四　時は精通して生化を痕する無し、
七九五五　處は精塞して方位を示す　唯だ
七九五六　物にして後　生化して衰衰に從う、
七九五七　物にして後　虚實して坱坱に居る、
七九五八　孿子は　各　活立を含むと雖も。而も胞中の氣血は。均しく兩胎を養う。故に
七九五九　華液の二圈は。一胞の中に在りて。同じく其の天地動止を成す。故に
七九六〇　之を華液と謂う、則ち孿胎は一胞の化育を活す、
七九六一　之を兩環と謂う、則ち一胞は孿生の天地を立す（PB 492）

# 體物圖


天位
人位
地位
天位
天
地
会
易
虚
靜
動
實
人
地
虚
升
地
虚
人
地
虚
人
地
虚
人

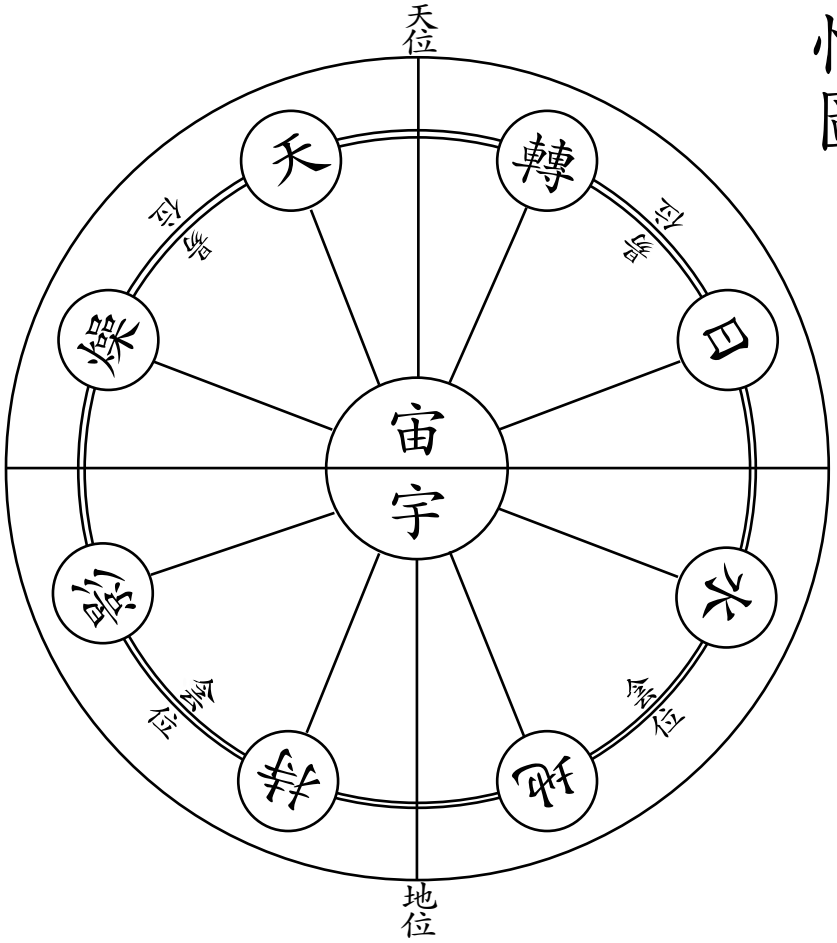
# 性物圖

# 性體氣物圖

# 爲物剖析圖

# 成物剖析圖

# 天含機體性圖

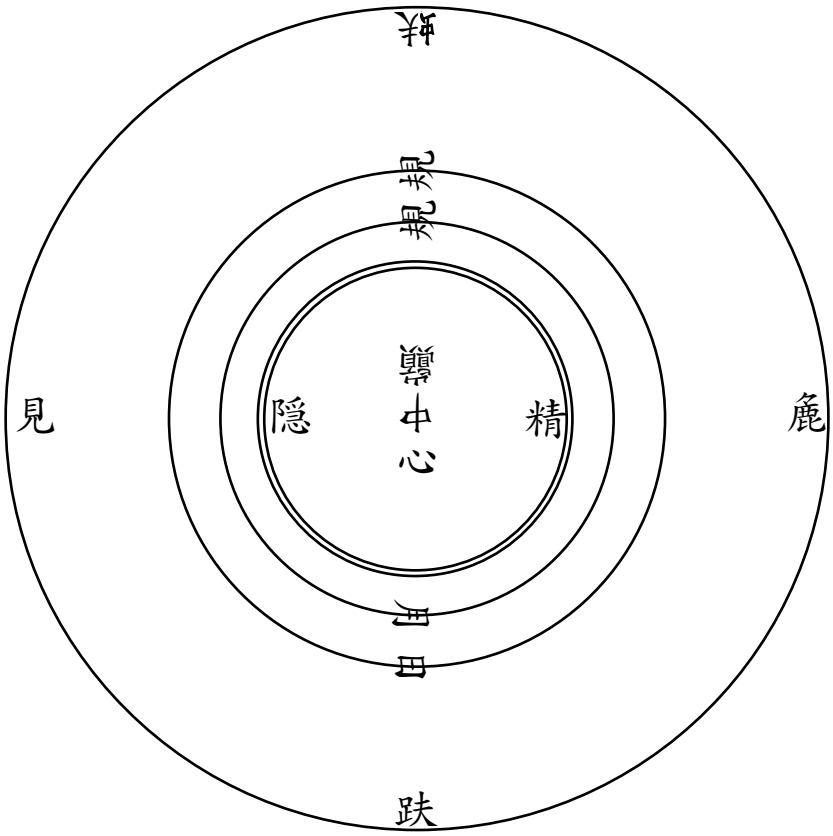


# 體成大小二境圖

# 性成象質二物圖

# 天地圈一合

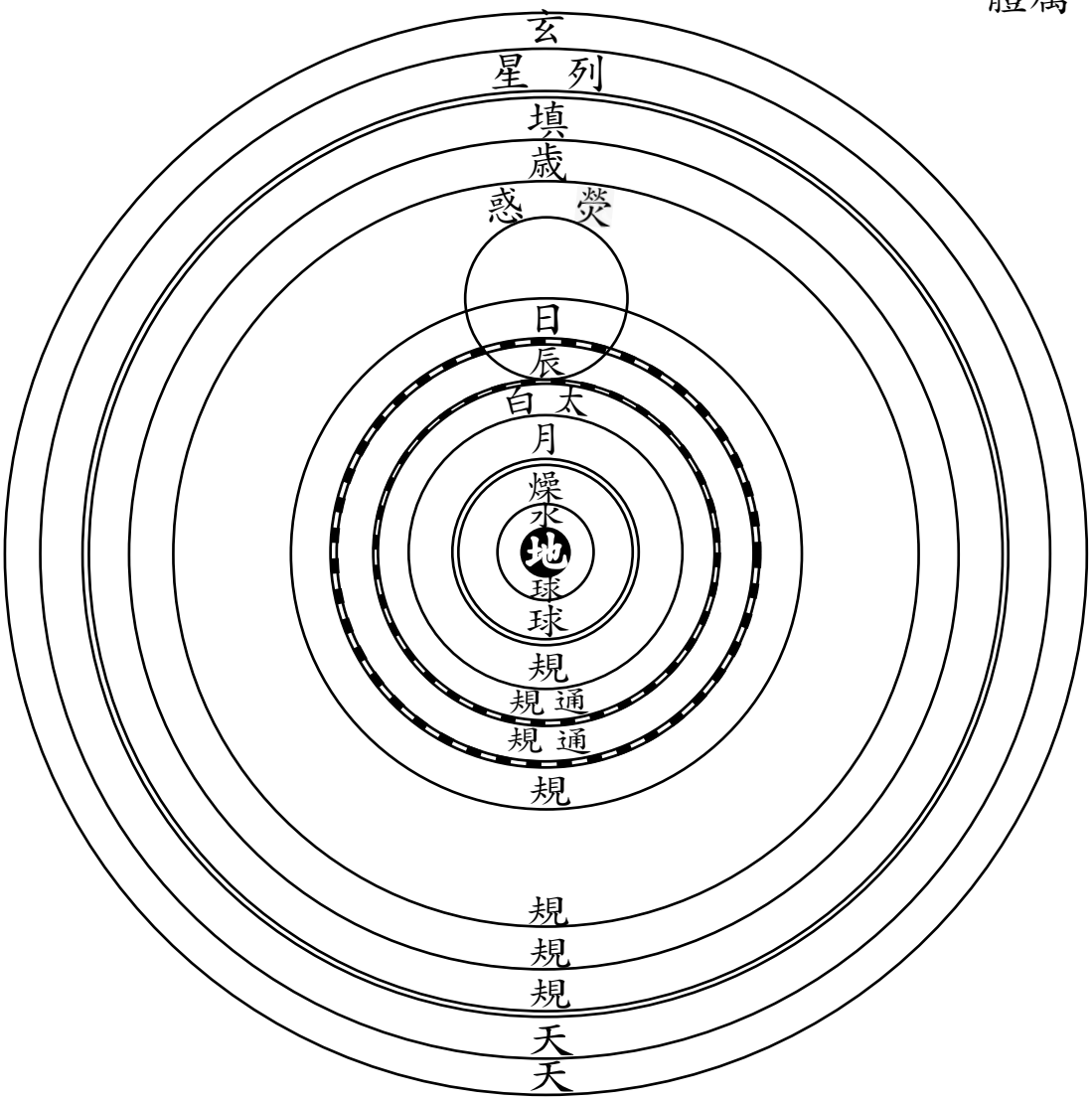
天圈則日月之毬居其趺上
地圈則水燥之毬居其趺上



巔
燥
水
蚊
中
心
球
球
露
鹿
没
精
巔

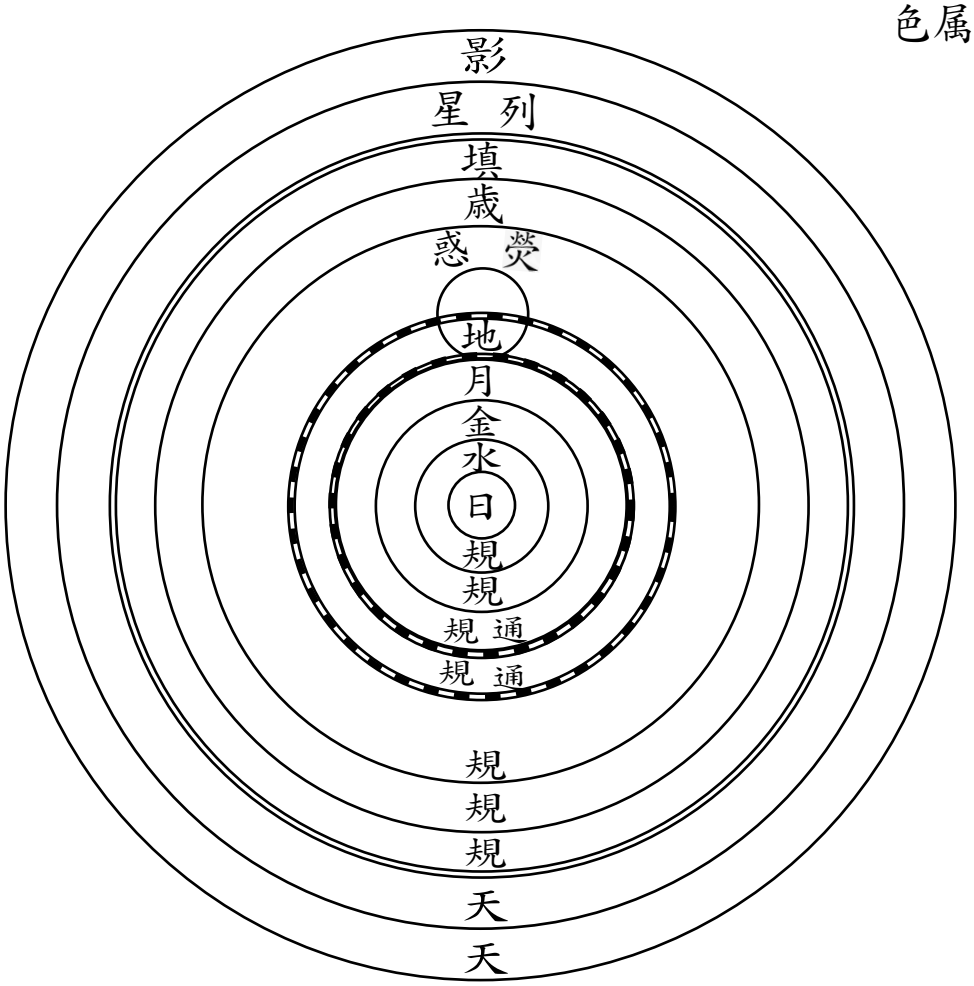
# 轉圖

體屬

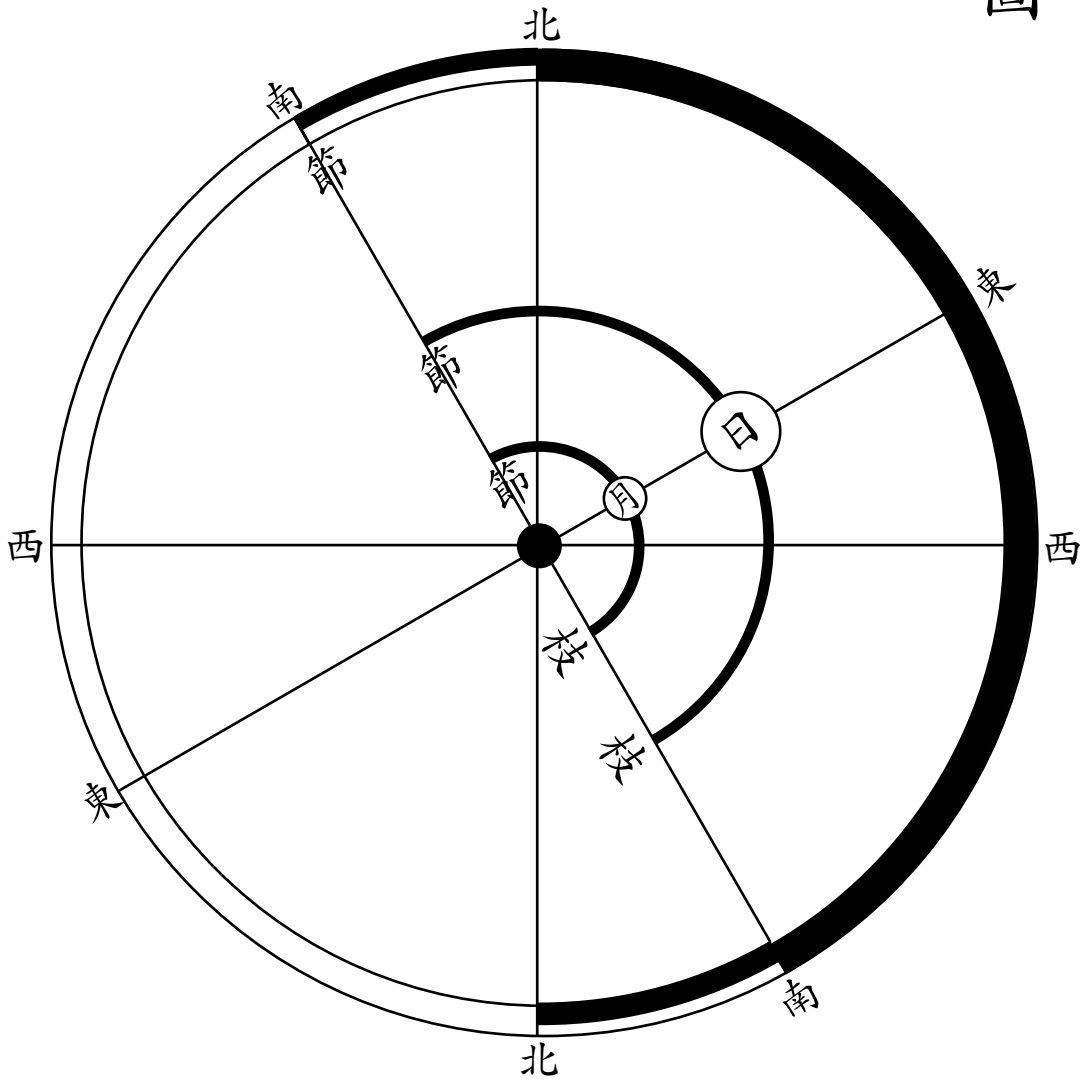


# 運圖

色屬



# 雙弦弧圖

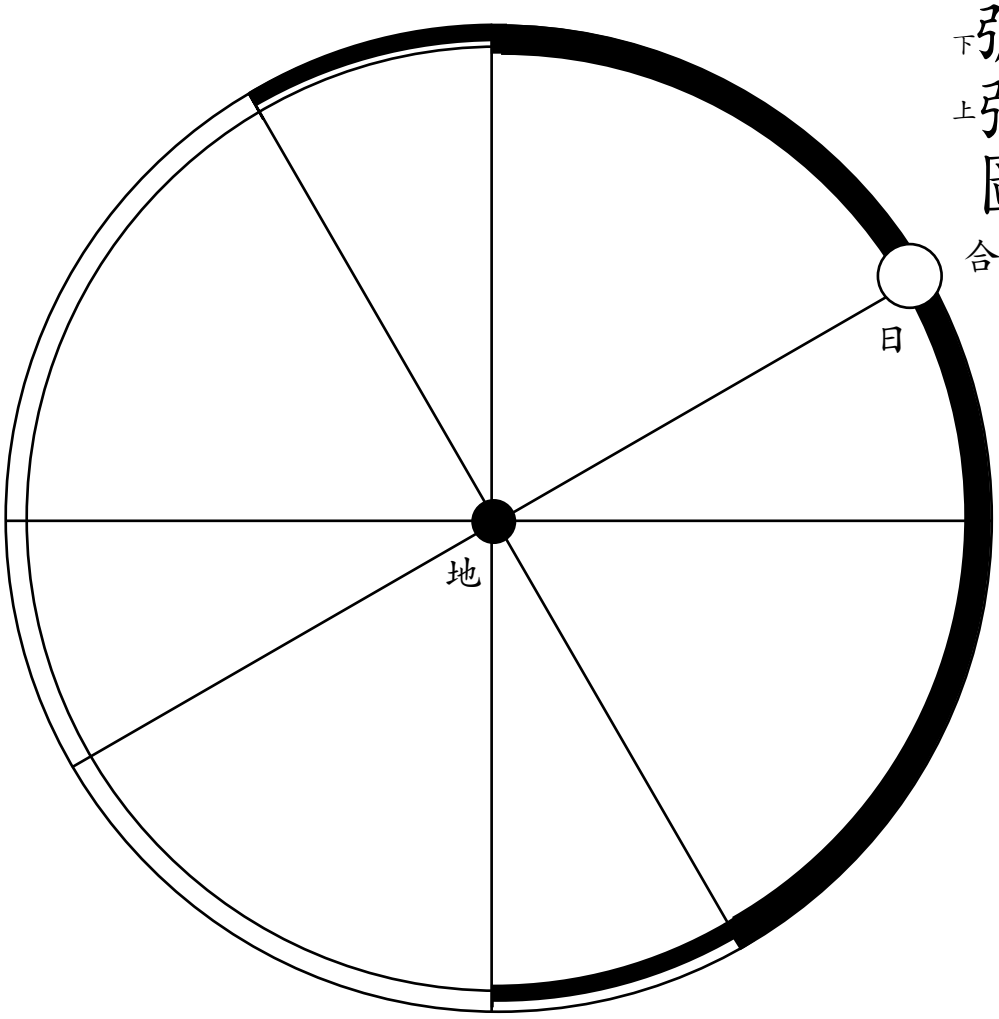


# 雙弧弦圖

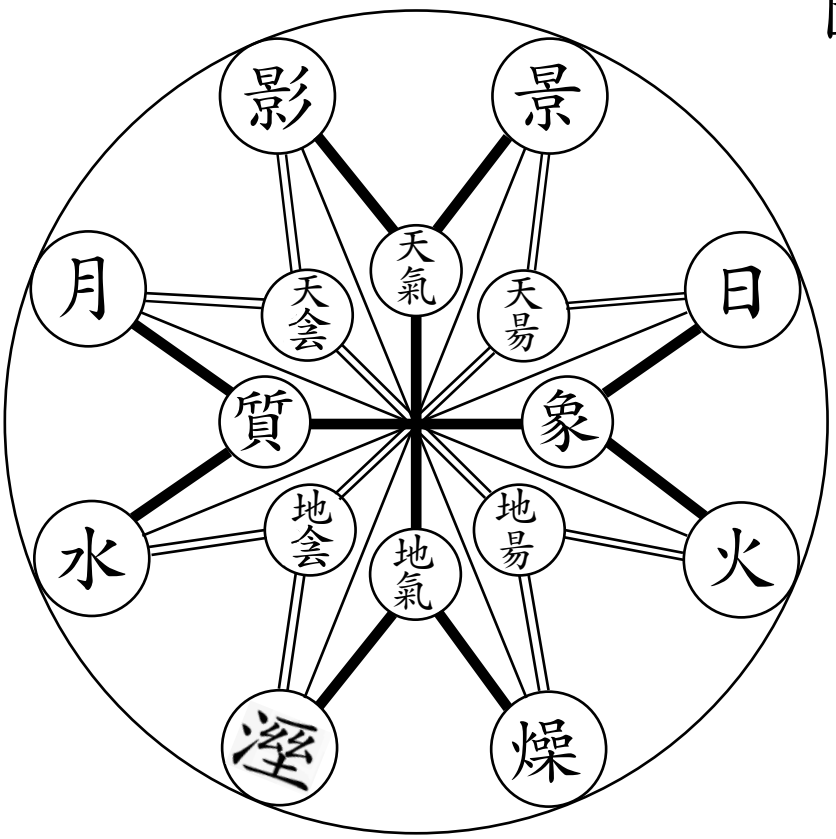
下 上

體色

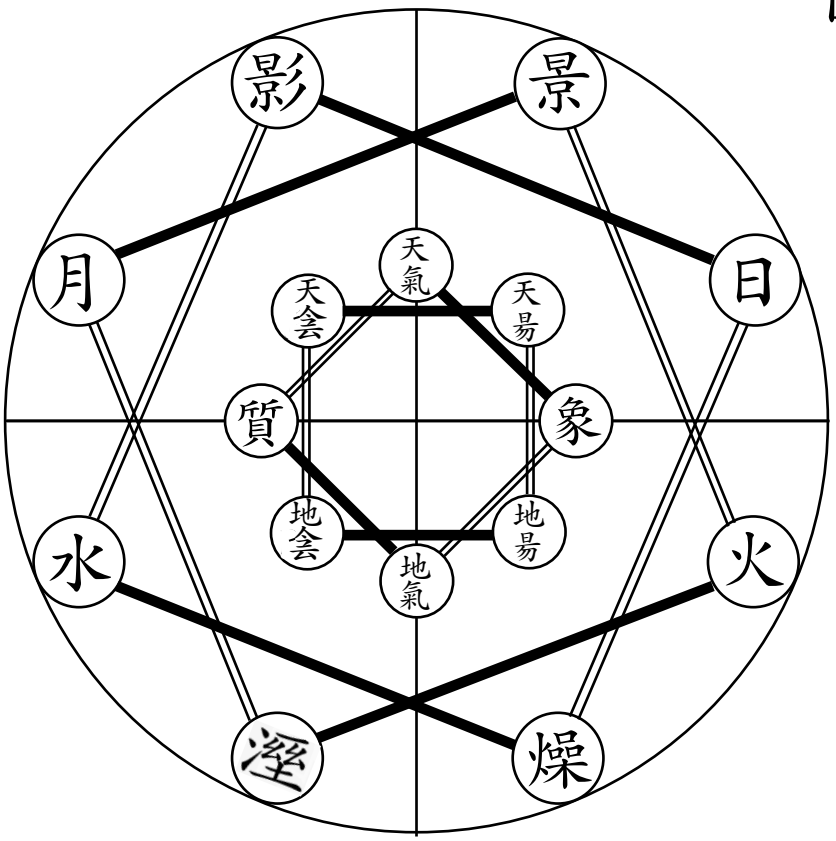
合



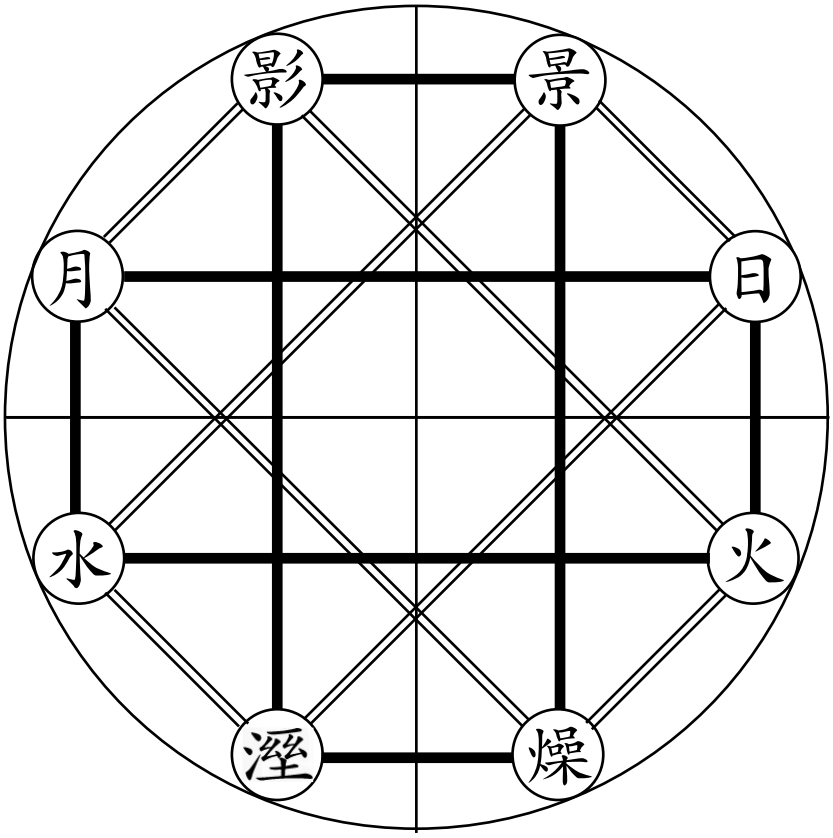
# 性物剖析圖



# 同反比圖



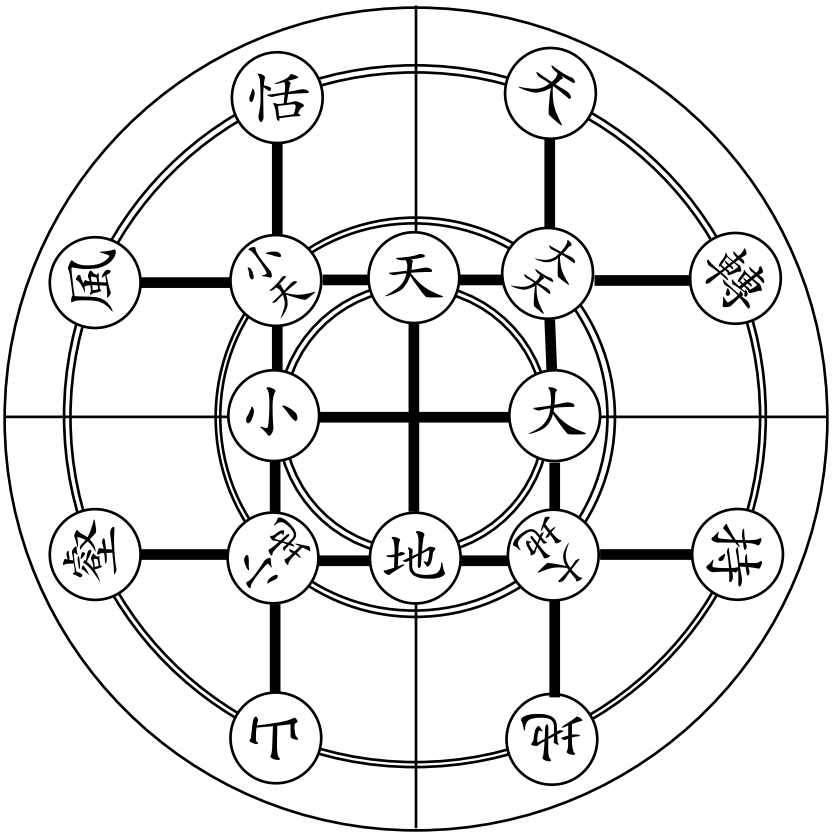
# 同比斜親疏圖



# 性體二界圖


天位
地位
地位
天位
天
性
體
天體
天性
地體
地性
日
景
易
象
曰
水
陰
陽
火
熱
晝
濕
風
木
生
長
下
地
降
收
化
藏
土
天
轉
運
升
地
降
收
化
藏
土
下
天
運
升
地
降
收
化
藏
土
下
天
轉
運
升
地
降
收
化
藏
土
下
天
轉
運
升
地
降
收
化
藏
土
下
天
轉

# 大小天地圖



七九八五［四界］宇宙は氣なり、本なり、之を天界と爲す、
七九八六天地は物なり、根なり、之を體界と爲す、
七九八七轉持なる者は、其の氣、能く物に體す、故に精なり、之を機界と爲す、
七九八八華液なる者は、其の物、能く性を見す、故に英なり、之を性界と爲す、
七九八九四界合して天地を成す。
七九九〇條理に従いて之を剖析す。本源末派。多少同じからず。夫れ
七九九一ー九二宇は能く物を立す。宙は能く其の間に通ず。
七九九三通は已に塞中に通ずれば。則ち宇は直一なり。
七九九四宇中にては。轉持の機は、正斜の形に依りて、以て其の物を没す、
七九九五　虚實の體は、華液の性を以って、以て其の物を露す、
七九九六露没を合して。以て全物を得る。
七九九七然りと雖も機體は能く合す、
七九九八ー九九　華液は能く分つ、分るれば則ち各天地を持す。
八〇〇〇機體の有せざる所の色氣を以て。之を虚天實地の間に於て充塞す。故に
八〇〇一華液と天地と。其の源を合して。其の派を分つ。
八〇〇二形體は相い得て、而して其の體立す、

(I 463b)

(PB 511)

色氣は相い得て、而して其の性　活す、是に於て
宇は能く機體を一球に於て成す、
華液は環を　球中に於て分つ、
性なる者は水燥の性才に就きて言うなり、
色なる者は日影の色氣に就きて言うなり、
色なる者は清濁なり、虚實の通隔を爲すよりして成る、
氣なる者は寒熱なり、動靜の發收を爲すよりして成る、是に於て
色氣なる者は機體の流派なり。以て一胞孿胎の狀を觀る。是を以て
氣境に入るや、氣ならざる者莫し、
色境に入るや、色ならざる者莫し、

［清濁通隔］

夫れ宇なる者は。機體を合して一球と爲す。以て之を容る。
一球は会成易成の兩圈を容る。以て性の物を成す。
会成は水燥を以て地球に襲す、
易成は日影を以て天轉に駕す、
日弧の東覘は。
西覘の線を絡して。日は其の線に駕す。
東覘と相い糾して。東に之き西に之く。

八〇二〇
日は既に此に駕す。
八〇二一
其の日に駕する者は。能く運天を中断す。日に駕する所の者は。
八〇二二
自から機軸を出だして。中を立て外を布く。
八〇二三
輪軸は輗を脱して。衆辰は之に駕す。
八〇二四
日に近き者は疾し、
八〇二五
日に遠き者は遲し、
八〇二六
諸を日月の弧に例すれば。節有りて漸むに急を爲す者に似たり。
八〇二七
諸を人の途に上る者に例すれば。道路に近遠有るに由る者に似たり。既に
八〇二八
虚を以て物を爲す。
八〇二九
動を以て行を爲す。
八〇三〇
色を以て體と爲す。
八〇三一
性を以て氣と爲す。
八〇三二
其の色は則ち明なり、而して外氣は暗を爲す、
八〇三三
其の氣は則ち熱なり、而して外氣は則ち寒す
八〇三四
此の物は持中に接して、晝夜冬夏を爲す、
八〇三五
是に由りて之を推すに。
八〇三六
月は其の色暗なり、
八〇三七
外氣は明を爲す、

八〇三八　外氣は則ち暄かし、
八〇三九　其の氣は冷に當り
八〇四〇　轉中に漸みて晦朔弦望を爲す、故に
八〇四一　日月は相い比す。下は水燥と應を爲す。是を以て
八〇四二　日は昜化を布きて燥に和す、
八〇四三　月は会化を布きて水に和す、是を以て
八〇四四　水燥滋煦の化は。全く力を日月景影に假る。
八〇四五　色界の氣を有するは、
八〇四六　猶お性界の才を有するがごとし、而して
八〇四七　氣の寒熱は、動靜に成る、
八〇四八　色の明暗は、清濁に成る、夫れ
八〇四九　虛する者は清にして通ず、
八〇五〇　實する者は濁にして隔つ、
八〇五一　神活以上は、清を以て其の體技を見さず、
八〇五二　物立以下は、濁を以て其の體技を没せず、
八〇五三　隔は何を以てか隔つ、其の能く彩を呈するを以て隔つ、
八〇五四　隔てば則ち一白一黒なり、
八〇五五　通は何を以てか通ず、其の能く色を播するを以て通ず

(PB 513)

(I 464a)

八〇五六　通ずれば則ち明なり、
八〇五七　變化の成る所は。瑣にして盡きず。
八〇五八　轉持なる者は清なり　機を以て其の技を伸ばす、
八〇五九　明暗なる者は濃なり　色を以て其の技を伸ばす、
八〇六〇　濁中は清濁通隔す。
八〇六一　通は素色を開く、
八〇六二　隔は文彩を呈す　而して
八〇六三　素色文彩は皆な色なり、
八〇六四　機態勢氣は皆な氣なり　而して
八〇六五　其の明暗寒熱を以て物を成し。天地と勢を張る者は。日影なり。故に
八〇六六　明暗寒熱は日影を成す。
八〇六七　日影は明暗寒熱を有す。是に於て。色氣を偏言して。
八〇六八　以て人の日影の專ら明暗寒熱を有するを知るを要す。
八〇六九　［素色文彩］
　蓋し物なる者は體に立す　而して
　　色に見る　故に
八〇七〇　天なる者は散虛して、清にして通ず、
八〇七一　地なる者は結實して、濁にして隔つ、
八〇七二

八〇七三　素色文彩の體に託する所なり。
八〇七四　濁は清を食す。復た能く清を吐す。是に於て
八〇七五　濁物は淡を以て清と爲す、
八〇七六　濃を以て濁と爲す、
八〇七七　濁中　清なる者は、日は光り地は会にして、以て明暗の色を播す、
八〇七八　濁中　濁なる者は、日は白く地は黒にして、以て青赤の彩を呈す、是に於て
八〇七九　色　　虚没の氣を見す、
八〇八〇　彩　呈して實露の物を見す、是に於て
八〇八一　體は色に見る、
八〇八二　色は體に露す、而して
八〇八三　天地象質、禽獣羽毛の美、
八〇八四　艸木華葉の麗、皆な彩色を出づること能わざるなり。
八〇八五　［清濁明暗］
八〇八六　是を以て淡濃は則ち露中の清濁なり。
八〇八七　天なる者は清なり、
八〇八八　地なる者は濁なり、
八〇八九　清は能く明を發す、
　　濁は能く暗を起す、

八〇九〇　明なる者は、其の彩は白、其の文は光なり、
八〇九一　暗なる者は、其の彩は黒、其の文は会なり、
八〇九二　清は能く明を發す、故に日は天中に聚る、
八〇九三―九四　水は亦た地の清物なり、是を以て水氣は明を發す、
八〇九五　水體は光を受く、
八〇九六―九七　濁は能く暗を起す、故に影は地上に散ず、
八〇九八―九九　日も亦た天の濁物なり、是を以て日體は物を隔つ、
八一〇〇　日氣は濁を爲す、
八一〇一　地火天水も。其の事は同じく然り。影は靜にして日は動く。
八一〇二　日は追い影は移る。而して晝夜冬夏有り。
八一〇三　有ると雖も而も日は則ち轉ず。影は則ち移る。
八一〇四　移る者は　靜なり、
八一〇五　運する者は動なり、
八一〇六　動なる者は天に依るなり、
八一〇七　靜なる者は地に依るなり、
八一〇八*　日影は濃を清中に爲す、故に清と雖も而も彩を隔てず、
八一〇九*　水燥は淡を濁中に爲す、故に淡と雖も而も物を隔て易し、
八一一〇　天は通ずるを以て、而して光会は明暗を播す、

八一一一　地は隔てるを以て、而して黒白は淡濃を呈す、
八一一二　日は明にして照す、
八一一三　影は暗にして蔽う、
八一一四　水は清にして通ず、
八一一五　燥は濁にして隔つ、是を以て
八一一六　地なる者は会體なり、影は会氣を以て、而して地に依りて天に充つ、然りと雖も
八一一七　日は充天の影を排す、而して地をして明中に居らしむれば、則ち
八一一八　地は常に半面の会を持す、故に之を分てば、則ち天影を有し、地影を有す、
八一一九　日なる者は易體なり、景は易氣を以て、而して天に依りて地に充つ、然りと雖も
八一二〇　地は隔色の濁を以て、日をして半面に當らしむれば、則ち　（PB 516）
八一二一　日は常に半面の明を播す、故に之を分てば、則ち天景を有し、地景を有す、
八一二二　易散地結は、體を虚實に於て露す、散虚は地を覆い、結實は天を載す、
八一二三　会收易發は、體を明暗に於て見す、發明は天を照し、收暗は地を覆う
八一二四　天機なる者は清なり、
八一二五　天象なる者は濃なり、
八一二六　天機は則ち轉持なり、
八一二七　天象は則ち日影なり、
八一二八　氣は以て東西す、

（而を欠くか。）

象は以て照蔽す、
天は東西照蔽を除くの外に見れず。見れざるを以て天の精清を觀る。
精清を觀て。而して氣象の猶お未だ清ならざるを知る。故に
天地は以て通隔す、
日影は以て照蔽す、
天なる者は體にして虚なり、
地なる者は體にして實なり、
影なる者は收めて象なり、
日なる者は發して象なり、
火を中央に點すに、四邊は必ず暝し、彼の蒼たる者は象光の到らざるの地なり、
火邊に物有れば、一邊は必ず影す、
地上の晝夜なる者は、明暗の相い轉ずるなり、
能く發揚をして上に聚らしむる者は、影の下に收むるなり、
能く收斂をして外に散ぜしむる者は、日の裏に發するなり、
明氣なる者は景なり、分れて晝を爲す、
暗氣なる者は影なり、分れて夜を爲す、是を以て
晝夜なる者は、明暗の地に徵す可き者なり、
景影なる者は、明暗の天に觀る可き者なり、蓋し

(I 465a)

八一四七　地を以て天に對すれば、則ち
八一四八　濁結は地に成る、
八一四九　清散は天に成る、
八一五〇ー五一　地を以て日に對すれば、則ち明熱は日に寓す、
八一五二　暗寒は地に依る、
八一五三　景は品彙をして彩を呈せしむ、
八一五四　影は朱緑をして色を收めしむ、
八一五五　暗寒は地に依る、故に日は隠れて暗なり、
八一五六　日は遠くして寒なり、
八一五七　明熱は日に寓す、故に日は見れて明なり、
八一五八　日は近くして熱なり、
八一五九［色界］　素は以て彩を呈す、
八一六〇ー六一　文は以て色を播す、故に質に依る者は彩に資る、
八一六二　象に依る者は文に資る、
八一六三　合して之を言えば。則ち日は白にして光る、明にして通ず、
八一六四　地は黒にして会す、暗にして隔つ、
八一六五　分ちて之を言えば。則ち彩は則ち黒白にして體に著く、
八一六六　文は則ち光会にして體を離る、

(PB 517)

八一六七　體は上下に分れて居る、
八一六八　氣は前後に分れて行わる、
八一六九　明暗は亦た寒熱を伴いて其の時に行わる、
八一七〇　清濁は亦た乾潤を伴いて其の處に居る　故に
八一七一　天は清にして乾く、
八一七二　地は濁にして潤う　是に於て
八一七三　清濁は天地を爲す、
八一七四　乾潤は象質を爲す、
八一七五　日は明にして熱す、
八一七六　影は暗にして寒す、
八一七七　寒熱は冬夏を爲す、
八一七八　明暗は晝夜を爲す、
八一七九　故に素なる者は、色の天なり、
八一八〇　　色なる者は、素の地なり、而して
八一八一　素色は運爲する所有り、
八一八二　文彩は變化する所有り、
八一八三　景明影暗は天清に居る、
八一八四　水清燥濁は地濁に居る、是を以て

八一八五　天中の散物は、亦た其の象を明暗にし、其の體を聚散す、以て景影の中に懸る、
八一八六　地中の散物は、亦た其の氣を乾潤にし、其の體を解結す、以て水燥の中に立つ、故に（PB 518）
八一八七　月辰の暗は景に於て聚る、
八一八八　星漢の明は影に於て散ず、
八一八九　景中に居る者は、其の象は暗なり、明を受けて光る、
八一九〇　偶する者は月、屬する者は辰、散じて景に居るなり、
八一九一　影中に居る者は、其の象は明なり、暗に居りて光る、
八一九二　聚まる者は漢、散ずる者は星、列して影に居るなり、（I 465b）
八一九三　地は明中に居る、景を爲し映せられて彩を見す、
八一九四　日は暗中に居る、影を爲し擁せられて光を露す、
八一九五　雲烟の濁は、自から水解す、
八一九六　雨露の清は、自から燥結す、
八一九七　日に景影有り、
八一九八　地に水燥有り、
八一九九　地なる者は、精英の根本、體を下に於て爲す、
八二〇〇　其の居は中を占め、水は地を環し、燥は水を環し、數層を一圓に并す、
八二〇一　日なる者は、本根の英華、體を上に於て爲す、
八二〇二　其の行は中を守り、景は日を環し、影は景を環し、數層を一圓に并す、是に於て

八二〇三ー〇四　日と地と勢を張るなり。故に日は景影の主を爲す、
八二〇五　地は水燥の主を爲す。
八二〇六　合すれば則ち皆な一圓に歸す。
八二〇七　是に於て。月辰は暗にして景に居る、
八二〇八　星漢は明にして影に居る、
八二〇九　雲烟は濁にして地を出づ、
八二一〇　雨露は清にして天を下る、
八二一一［運爲］　地隔燥濁は、共に濁中に濁す、
八二一二　日照影蔽は、共に清中に濁す、
八二一三　地は燥と共に濁す、而して地は濁にして隔つ、燥は濁にして通ず、
八二一四　日は影と共に濁す、而して日は濁にして隔つ、影は濁にして通ず、是を以て。
八二一五　日彩なる者は白なり、其の文は光る、明を以てして照を播す、
八二一六　地彩なる者は黒なり、其の文は会る、暗を以てして蔽を播す、故に
八二一七　明なる者は、易の色なり、其の用は照す、
八二一八　暗なる者は、会の色なり、其の用は蔽う、
八二一九　白なる者は、象の彩なり、其の用は明を持す、
八二二〇　黒なる者は、質の彩なり、其の用は暗に和す、
八二二一　暗は明に和して青なり、

八二二二　黒は白に和して赤なり、
八二二三　雲霧昏濁の中、皆既の食に遇えば、地の本彩を觀る、
八二二四　天氣晴朗の夜、無月の天を望めば、天暗の地黒に及ばざるを觀る、
八二二五　以て青黒を天地に於て辨ず可し、
八二二六　天氣晴朗の時、正晝の日を望めば、日の本彩を觀る、
八二二七　雲霧昏濁の中、晦夜の火を望めば、地明の天白に及ばざるを觀る、
八二二八　以て赤白を天地に於て辨ず可し、
八二二九　光は質に在りて澤なり、
八二三〇　会は體に在りて影なり、夫れ明暗の照蔽に於る。
八二三一－三二　照は、能く会昜を具す、昜氣は、則ち發を以てして他に播す、
八二三三　会體は、則ち收を以てして佗を假る、
八二三四　昜照は、天に在れば則ち日なり、地に在れば則ち火なり、
八二三五　会照は、地に在れば則ち水なり、天に在れば則ち月なり、
八二三六－三七　蔽も、亦た氣物を具す、氣體は、則ち濁を以てして佗を翳す、
八二三八　物體は、則ち隔を以てして佗を遮る、
八二三九　氣蔽は、天に在れば則ち影なり、地に在れば則ち燥なり、
八二四〇　體蔽は、天に在れば則ち食なり、地に在れば則ち夜なり、
八二四一　是れ明暗の運爲なり。蓋し

(PB 519)

(I 466a)

八二四二　清なる者は、　昜の素にして、　其の用は通なり、
八二四三　濁なる者は、　会の素にして、　其の用は隔なり、
八二四四　会隔の中、氣は則ち能く發す、
八二四五　　體は則ち能く隔つ、
八二四六　氣發は、　清なれば則ち物を被う、
八二四七　　濁なれば則ち己に持す、
八二四八　體隔は、　清なれば則ち彩を假る、
八二四九　　濁なれば則ち彩を見す、
八二五〇　明なる者は、　光を布きて物に被らしむ、
八二五一　暗なる者は、　会を布きて物に被らしむ、
八二五二　色にして外に發するなり、
八二五三　白なる者は、　明を含みて物を持す、
八二五四　黒なる者は、　暗を含みて物を持す、
八二五五　彩にして自から持するなり、　且つ
八二五六　隔たる者は。後を隠して前を見す、　是を以て。
八二五七　清なれば則ち佗色を假りて見る、
八二五八　猶お鏡の背面の畫圖を隠して、　而して前面の物象を寫すがごとし、
八二五九　濁なれば則ち本彩を以て見る、

猶お地の下面の天を隠して、而して地面の物彩を見るがごとし、
易通の間、氣は則ち能く透す
體は則ち能く受く、氣透は、明は則ち質を透す、
暗は則ち象を透す
物の地上に在るや。剛柔動靜に資る
寒熱明暗に受く、
明暗は事を晝夜に行う
寒熱は事を冬夏に行う
明暗は、物之を受けて、而して動靜に覺す、故に動は能く睡覺を爲す、
寒熱は、物之を受けて、而して發收に覺す、故に植は能く榮枯を爲す、
明暗は寒熱と偶を爲す。而して氣を歲日に於て用す。
物の時に路する者は。皆な此の代るがわる旺する者を經す。然り而して
其の體は則ち日に在りて熱し、
地に在りて寒し、
景を以て明す、
影を以て暗す、故に
目の色に於るや。明なれば則ち目の通に覺る、
暗なれば則ち目の塞に覺る、

八二六〇
八二六一
八二六二―六三
八二六四
八二六五
八二六六
八二六七
八二六八
八二六九
八二七〇
八二七一
八二七二
八二七三
八二七四
八二七五
八二七六
八二七七
八二七八

暗の目を塞するに非ず、惟だ暗なれば、則ち地體を隠して、而して天象を見す、
明の目を通ずるに非ず、惟だ明なれば、則ち天象を隠して、而して地質を見す、且つ
氣にして清なれば、則ち體の隔たる無し、故に
後に通ずるを以て、而して之を前に受くるを得ず、
體にして清なれば、則ち體の隔たる有り、故に
後に隔たるを以て、而して之を前に受けざるを得ず、夫れ
清なれば則ち淡なり。淡にして無體なれば、則ち底に透けざること能わず、
淡にして有體なれば、則ち前に受けざること能わず、透受の辨なり。(PB 521)

體受は、象は則ち之に浮く、
質は則ち之に沈む、
氣なる者は、能く透く、
體なる者は、能く受く、清の運爲なり。蓋し
天なる者は淡なり、
象なる者は濃なり、是を以て。
明の天に於る、濃を以て象を隠す、淡を以て質を見す、
涓埃の擾擾と雖も、其の彩を遺さず、
暗の天に於る、濃を以て質を隠す、淡を以て象を見す、
熠耀の耿耿と雖も、其の光を餘さず、且つ

有體なれば則ち後に透くる所無し、
清なれば　則ち前に受くる所有り　故に
象を浮ぶれば、則ち虹霓と爲し　波光と爲す、
艸間の露、蚌中の珠　弄するに随いて彩を轉ずる者は
質を沈むれば、則ち海市を爲し、水影を爲す、
眼中の色、鏡裏の影、見るるに随いて形を現わす者は
是れ清濁の運爲なり。

八二九八
八二九九
八三〇〇
八三〇一
八三〇二
八三〇三
八三〇四
八三〇五

受けて浮くより成る、
皆な受けて沈むより成る、

（落字か。）

［黒白青赤］

八三〇六
色は彩を運爲に於て成す。
八三〇七
彩は色を運爲に於て依る。
八三〇八
色運は窮まらず、
彩變は限り無し、是を以て。
八三〇九
黒白は體に持す、
八三一〇
光会は氣に發す、
八三一一
日體の白は、地氣の黒に隔たれば則ち赤なり、而して
八三一二
黄と赤とは、隔の厚薄に由る、
八三一三
地氣の黒は、日光の照を受くれば則ち紅なり、而して
八三一四
紅と紫とは、映の正斜に由る、

八三一五　白なる者は、清體の明彩にして、黒濁に和して赤なり、故に
八三一六　火の赤は、濁質を食するに由るなり、是を以て、
八三一七　赤彩は地に成る、而して天に成らざるなり、
八三一八　質なる者は、暗なり、
八三一九　象なる者は、明なり、
八三二〇　水なる者は、氣の質に之くなり、故に氣にして質なり、
八三二一　火なる者は、質の氣に之くなり、故に氣にして象なり、故に。
八三二二　水は、深ければ則ち暗なり、
八三二三　淺ければ則ち淡にして氣の如し、
八三二四　火は、燻ぶれば則ち暗なり、
八三二五　燃ゆれば則ち明にして象を爲す、
八三二六　水は、液を以て體を爲す、
八三二七　暗を以て氣を爲す、
八三二八　月は象を以て暗なり、
八三二九　水は質を以て暗なり、
八三三〇　月なる者は、会質の無體に依る者なり、故に能く明を爲す、
八三三一　水なる者は、会質の有體に依る者なり、故に能く暗を爲す、
八三三二　火は、焔を以て體を爲す、

(PB 522, I 467a)

八三三三　明を以て氣を爲す、
八三三四　日は白を以て明なり、
八三三五　火は黄を以て明なり、
八三三六　日なる者は　昜象の無體に依る者なり、故に其の色や白なり、
八三三七　火なる者は、昜象の有質に依る者なり、故に其の色や黄なり、
八三三八　黄なる者は。赤の未だ甚しからざるなり。猶お碧の青に於るがごとし。
八三三九　赤なる者は、黒白の間に彩す、
八三四〇　青なる者は、明暗の間に彩す、故に。
八三四一　昜火は、白なること能わざるを以て黄なり、
八三四二　会火は、明なること能わざるを以て青なり、
八三四三　天影は暗なること能わざるして青なり、
八三四四　雲烟は暗なること能わざるして黯なり、是を以て。
八三四五　火は氣と雖も、而も質に依るを以て、而も未だ日の白に若かず、
八三四六　水は質と雖も、而も氣よりするを以て、而も地の黒に若かず、
*八三四七　天氣の暗は、日氣の明に透ければ則ち青なり、而して碧と青とは、透の厚薄に由る、
八三四八　地體の濁は、日光の明を隔てれば則ち黒なり、而して黯と黒とは、隔の正斜に由る、
八三四九　黒なる者は、濁氣の暗彩にして、清明に和して青なり、故に
八三五〇　水の青は清質を結ぶに由るなり、是を以て

青彩は天に成る、而して地に成らざるなり、
天影なる者は大なり、
地影なる者は小なり、而して天影の清暗は則ち青を成す、
地影の暗濁は、黒を成すの濃に若かず、
天象なる者は大なり、
地象なる者は小なり、而して地象の濁明は則ち赤を成す、
天象の清明は、白を成すの濃に若かず、故に。
黒彩は、地に於て勝る、
青は則ち天に於て勝る、
白彩は、天に於て勝る、
赤は則ち地に於て勝る、
氣、清なれば則ち明は光を放つ、
暗は影を爲す、
濁なれば則ち明は光を含む、
暗は影を受く、
光なる者は、象の輝なり、質に在れば則ち澤を爲す、故に
澤は映ずる所有れば則ち、光を假る、

(T 467b)

八三五一
八三五二
八三五三ー五四
八三五五
八三五六
八三五七ー五八
八三五九
八三六〇
八三六一
八三六二
八三六三
八三六四
八三六五
八三六六
八三六七
八三六八［光澤会影］
八三六九

八三七〇　会なる者は、質の翳なり、清に在れば則ち影を爲す、故に
八三七一　影は印する所有りて而して彩を受く、
八三七二　均しく是れ昜なりと雖も、而も日なる者は光を發し、星は光を含む、
八三七三　均しく是れ会なりと雖も、而も月なる者は光を發し、燐は光を含む、
八三七四　同じく是れ会なりと雖も、而も夜なる者は日を隔て、影なる者は日を翳す、
八三七五　同じく是れ影なりと雖も、而も象は則ち之を映し、質は則ち之を写す、是を以て。
八三七六　月輝と波光とは、之を天光に於て受く、
八三七七　虹色と露彩とは、之を地澤に於て成す、
八三七八　靄黯と雲昏とは、之を氣濁に於て得る、
八三七九　海市と水影とは、之を質清に於て成す、
八三八〇*［色變］　清濁明暗に色せざる者莫ければ、則ち
八三八一*　黒白光会の彩に居らざる者莫し、
八三八二　且つ夫れ天地は各おの物を散じて。而して
八三八三　天物は其の體を常持す、
八三八四　地物は其の體を毎換す、
八三八五　其の體を常持する者は、新陳無し、
八三八六　其の體を毎換すれば、則ち盛衰有り、
八三八七　盛なれば則ち色澤膏膩なり、

八三八八　衰なれば則ち形容枯槁なり、
八三八九　彩と體と。同じく相い移る。
八三九〇　動は、内を赤にして外を白にす、
八三九一　植は、内を白にして外に青にす、
八三九二　是れ其の大分なり。區にして別つ。
八三九三　變にして換る。
八三九四　就きて之を認むれば則ち可なり、
八三九五　數えて之を論ずれば則ち瑣なり、
八三九六　彩は變化を盡して、運爲を色に假る、
八三九七　色は運爲を用いて、變化を彩に盡す、是を以て。
八三九八　氣は色を以て見る、
八三九九　體は形に由て成る、
八四〇〇　光に會易有り。
八四〇一　易光は、照を以て物を被う、
八四〇二　易影は、彩を以て物に印す、是を以て。
八四〇三　物として形に由らざる者莫し、形に隨いて其の影も亦た變ず、
八四〇四　氣として色に由らざる者莫し、氣に隨いて其の彩も亦た變ず、故に
八四〇五　圓珠の影を受くるは。直の中心を珠の正中に爲すを以て。

(I 468a)

八四〇六　一絲髪を差えず。而して能く大形を縮す。
八四〇七　平鏡の影を受くるは。直の直に相い當るを以て。而して
八四〇八　小大宛然として。左右は位を易う。
八四〇九　盃の淺にして影を受くるは。
八四一〇　直の中心。物の後に在るを以て。而して
八四一一　漸く其の形を大にす。其の深くして影を受くるは。
八四一二　直の中心。兩間に在るを以て。終に其の影を倒す。
八四一三　影は一直の中に成れば。則ち數鏡と雖も。而も
八四一四　物影を多くすること能わず。
八四一五　影は直圓を成すれば。則ち
八四一六　泡沫累珠は。其の物　愈いよ多し。
八四一七　　其の影　愈いよ多し。
八四一八　會影の地に布く者は。景の直に随う。而して隱見轉換の變を爲す。
八四一九　暗室の隙は。浸や明を通して。而して外邊竹樹の影を写す。
八四二〇　明の通ずる所。直の中心を孔中に結び。影をして能く倒さしむ。
八四二一　大明の中。鳥影の空に沖して。而して影　終に盡きる。
八四二二　之れ直の中心を鳥下に結ぶ者と。其の理を同じくす。而して又た
八四二三　易明會明の分有り。夫れ

八四二四　物は之を日に暴せば。則ち其の形は小なり。
八四二五　　之を水に漬せば。則ち其の形を大にす。
八四二六　氣も亦た然るなり。故に
八四二七　水氣は日月を篭すれば、則ち漸く其の形を大にす、
八四二八　雨氣は山京を篭すれば、亦た漸く其の形を大にす、
八四二九　日月は水氣を離るれば、則ち漸く其の形を小にす、
八四三〇　晴氣は山嶽に滿つれば、亦た漸く其の形を小にす、
八四三一　影の形に依りて運爲するなり。
八四三二　日白氣黒の間は、紅紫黄赤を成す
八四三三　氣暗象明の中は、青碧黯黒を成す、
八四三四　積会曖昧、
八四三五　雨意蒼茫、
八四三六　露彩璀璨、
八四三七　霞色燦爛、
八四三八　紅炭は水に赴して黒なり、
八四三九　金鐵は火に赴して赤なり、
八四四〇　木葉は秋に變ず、
八四四一　鬢髪は老に哲す、

八四四二　焔光赫筍は、晝に遇えば則ち燻にして暗なり、
八四四三　海濤暗黒は　夜に遇えば則ち爛にして光なり、故に
八四四四　細雨は日に射られて、而して青紅の暈を爲す、
八四四五　雲烟は日に照されて、而して種種の霞を爲す、是を以て
八四四六　氣の運する所は。人面は酒を得て、而して素を紅に運ぶ、
八四四七　丹砂は火を見て、而して紅を黒に轉ず、
八四四八　黄を燭に映ずれば則ち素し、
八四四九　燐を明に望すれば則ち無し、
八四五〇　彩の氣に由りて運爲するなり。
八四五一　是れ色の變化なり。
八四五二［日影成］
八四五三　氣は氣質動靜の機に起り。
八四五四　鬱達發結の態に由る。
八四五五　凝融肅舒の勢を以て。
八四五六　寒熱溫冷の氣を成す。
八四五七　之を小に試みるに。
八四五八*　物は相い摩れば則ち火、火は則ち熱、熱は則ち質動に於て成る、
　　氣は相い扇げば則ち風、風は則ち涼、涼は則ち氣動に於て成る、

(I 468b)

(PB 526)

八四五九　氣の動搖を閉ずれば則ち恬、恬は則ち溫、溫は則ち氣鬱に於て成る、
八四六〇　水は質の融盪を屛ければ則ち氷、氷は則ち寒、寒は則ち質靜に於て成る、
八四六一　今　水火を以て之を試みるに。水氣なる者は冷なり、
八四六二　燥氣なる者は溫なり、
八四六三　燥なる者は氣の解なり、
八四六四　氷なる者は質の結なり、
八四六五　其の寒熱を極む。此を以て之を推して。
八四六六　明暗の虛實の淸濁より來り、
八四六七　寒熱の氣質の動靜より來るを知る　蓋し
八四六八　虛實通隔の中は、體を明暗の色に於て成す、
八四六九　動靜發收の中は、氣を寒熱の性に於て成す、
*八四七〇―七二　日影の成る所なり、是を以て明熱の日は虛動に寓す、
八四七三　暗寒の影は實靜に寓す、
八四七四　散中に會收すれば、易は其の中に發せざるを得ず、
八四七五　結外に易解すれば、會は其の下に結ばざるを得ず、
八四七六　天なる者は散氣なり、火は發象なり、
*八四七七　地なる者は結質なり、水は結象なり、
*八四七八　華液は天地を分ちて日影水燥と成る。故に

八四七九　収影結水は地を并せて共に結会なり、
八四八〇　發日解燥は天を并せて共に散易なり、
八四八一　易にして發すれば則ち其の氣は熱す、
八四八二　会にして收むれば則ち其の氣は寒す、
八四八三　日なる者は發易、其の體は虚なり、
八四八四　其の色は白なり、
八四八五　其の機は動なり、
八四八六　其の氣は熱なり、
八四八七　影なる者は收会、其の體は散なり、
八四八八　其の色は黒なり、
八四八九　其の機は靜なり、
八四九〇　其の氣は寒なり、
八四九一　收氣結物は、地を擧げて皆な暗寒なり、
八四九二　發象解氣は、火を擧げて皆な明熱なり、
八四九三　寒熱なる者は其の極なり、
八四九四　溫涼なる者は其の微なり、
八四九五　持する者は解易して伸びず、故に蘊して溫なり、
八四九六　轉ずる者は結会して屈せず、故に達して涼なり、

八四九七　地なる者は、会を收めて質を結ぶ、故に寒なり、
八四九八　日なる者は、易を發して象を散ず、故に熱なり、
八四九九　轉は達して涼なり、
八五〇〇　持は蘊して溫なり、
八五〇一　天は日發の熱を假る、
八五〇二　地は影收の寒を假る、
八五〇三　其の用を互いにすれば。則ち
八五〇四　地は發易を以て寒を　結中に凝す、
八五〇五　天は收斂を以て易熱を散内に發す、
八五〇六　日影は已に明暗寒熱を有す　而して
八五〇七　水燥は清濁溫冷を以て應ず、
八五〇八　天地は則ち緯居す、
八五〇九　冬夏は則ち經行す、
八五一〇　氣物は動靜を交う。
八五一一　結寒は涼を轉に達す、
八五一二　發熱は溫を持に蘊す、
八五一三　景暄影凄、
八五一四　水冷燥溫、

(PB 528)
(I 469a)

八五一五　絪縕は以て滋煦を爲す。

八五一六―一七［經緯寒熱］　天地の物。既に緯に塞す。亦た經に通ぜざることを得ず。

八五一八　既已に然らざるを得ず。是を以て

八五一九　散結の塞は、乃ち天地の體なり、

八五二〇　發收の氣は、乃ち絪縕の態なり、

八五二一　運轉噫嗡は。其の理に從う。其の態用を異にするのみ。

八五二二　發の態は、質を食して氣を吐す、

八五二三　收の態は　氣を搾して質を結ぶ、

八五二四　質を食して氣を吐す、有をして無に之かしむ　其の氣は照して熱す、

八五二五　氣を搾して質を結ぶ、無を以て有に之く　其の氣は蔽いて寒す、

八五二六　動靜虛實は天地に屬す、

八五二七　明暗寒熱は日影に屬す、是を以て

八五二八　日影は、虛を以て體を爲す、

八五二九　動を以て機を爲す、

八五三〇　色を以て其の體を見す、

八五三一　氣を以て其の用を施す　是れ

八五三二　明暗は以て晝夜を行う、

寒熱は以て冬夏を行う、
晝夜冬夏なる者は、
天の事に非ず、
水燥は地に依りて海陸を爲す。
晝夜冬夏を以て。滋煦の氣候を分つ。是れ之を節物と謂う。
景の氣を吐して暄きと、轉の氣に達して涼きと偶す、
液の質を融して冷たきと、持の鬱して溫かきと偶す、
天地正圓。動止虛實。發收鬱達は。結中に絪縕す。
覆載の一結物は。地　其の核子を爲す。故に
会は上に達して、而して轉ずる者は其の外稃を爲す、
易は下に鬱して、而して持する者は其の内仁を爲す、故に
易散じて会結ぶ、
会結んで易鬱す、
結べば則ち收まる、
鬱すれば則ち發す、
發せざれば則ち收を給する者無し、
收まらずば則ち發を給する者無し、
給うれば則ち資る有り。

八五三三
八五三四
八五三五
八五三六
八五三七
八五三八ー三九
八五四〇ー四一
八五四二
八五四三
八五四四
八五四五
八五四六
八五四七
八五四八
八五四九
八五五〇
八五五一
八五五二

八五五三　資れば則ち生生盡きず。

八五五四　盡きざれば以て造化を觀る。是を以て

八五五五　發と散とは同じからず、散ずるや坱坱として、其の涯を爲さず、

八五五六　發する者は保中に居る、若し

八五五七　發する者をして保中に住ましめざれば、

八五五八　何を以てか聚めて象を爲さん、

八五五九　象は地を發して天に至る、

八五六〇　走を以て其の圓を偏にす、聚散の別なり、

八五六一　收と結とは同じからず、結ばるや杪忽として、其の形を成さず、

八五六二　收まる者は結中に向う、若し

八五六三　收まる者をして結中に住ましめざれば、則ち

八五六四　何を以てか結びて質を爲さん、

八五六五　質は天を降りて地に至る、

八五六六　乘を以て其の圓を徧にす、解結の分なり、故に

八五六七　天地も亦た一顆の木菓なり。皮肉は盡く核肉に於て營す。

八五六八　核肉は盡く皮肉に於て保す。

八五六九　結びて動く、轉じて圓ならざるを得ず、

八五七〇　結びて實す、止りて堅ならざるを得ず、

(PB 530)

(I 469b)

八五七一　会にして密結す、搾して昜を排せざること能わず、
八五七二　昜にして鬱發す　食して氣を吐せざること能わず、
*八五七三ー七四　鬱昜を以て達会に會す、故に日は象を聚めて氣を散じ、竅を東中に得て走らざる能わず、
*八五七五ー七六　結会を以て散昜に偶す　故に地は質を結んで氣を散じ、宅を天中に爲して止らざる能わず、
八五七七　轉圓の穹隆より、蒼蒼赫赫に至りて、皆な天なり、
八五七八　拗突の旁礴より、茫茫津津に至りて、皆な地なり、
八五七九　地結は融して液を爲す、
八五八〇　天鬱は發して華を爲す、
八五八一　華液は則ち水火なり。結實の地に對して象と曰う。
八五八二　象中は相い分つ。亦た象質と曰う。
八五八三ー八四　水は燥を得て、水陸を地に於て成す、大にして覆載す、小にして水陸す、
八五八五ー八六　火は影を得て、晝夜を地に於て成す　氣にして冬夏す、色にして晝夜す、
八五八七　天地は一圓物なり。　緯體は既に鋪る、
八五八八　中は則ち昜を發して斡旋す、　經氣は以て通ず、
八五八九　極は則ち会を收めて凝結す、
八五九〇　日熱は散じて而して景は暄を播す、
八五九一　地寒は融して而して水は冷を持す、
*八五九二　而して陸溫水冷なり。動植は其の地に絪縕す。蓋し

(PB 531)

八五九三　圓行の一東一西は、明暗を旋す、而して晝夜を經に爲す、
八五九四　直行の一南一北は、寒熱を互す、而して冬夏を緯に爲す、
八五九五　塊然たる一球。地表は廼ち天裏なり。
八五九六　日は轉に從いて來照すれば則ち晝なり、
八五九七　　噓に從いて來煦すれば則ち夏なり、
八五九八　影は日を追いて來復すれば則ち夜なり、
八五九九　　嗡を以て肅に歸すれば則ち冬なり、
八六〇〇　会易は結中に在り。
八六〇一－〇二　相伴の力と相走の勢を以て。各おの其の技を用す。
八六〇三　發收の物を爲し事を爲す。然らざるを得ず。
八六〇四　然り而して会絪。大給小資の中に。
八六〇五　一鬼一神は。二の通を感應に於て運す。是に於て
八六〇六　氣は寒すれば則ち地は肅す、
八六〇七　氣は熱すれば則ち地は舒す、
八六〇八　氣は肅すれば則ち物は凝す、
八六〇九　氣は舒すれば則ち物は融す、
八六一〇　日は噓すれば則ち燥は煦す、
八六一一　影は嗡すれば則ち地は寒す、

(I 470a)
(PB 532)

八六一二　動植は煦を得て發生す、
八六一三　肅を得て收閉す　蓋し
八六一四　天に運轉有り、地は之を奉じて晝夜を成す、
八六一五　地に嘘噏有り　天は之に從いて冬夏を成す、
八六一六　日なる者は昜の会中に發する者、地氣の嘘する處に之く、
八六一七　影なる者は会の昜中に收むる者、地氣の噏する處に旺す、故に
八六一八　動植は。其の嘘に應じて蕃孳す、
八六一九　　其の噏に應じて枯蟄す、
八六二〇　日は煦すれば則ち地氣は游動し、動は覺め植は開く、
八六二一　影は肅すれば則ち地氣は收斂し、動は睡り植は閉ず、
八六二二　嘘するや、天日と地燥は相い應じて、而して
八六二三　水は融し氣は溫す、是に於て其の間に遊ぶ者は、擧げて發動の用を爲す、
八六二四　噏するや、天影と地水は相い應じて、而して
八六二五　氣は沍し水は凝す、是に於て其の間に遊ぶ者は、擧げて收止の用を爲す、
八六二六　然り而して剖析變化の用を察す。則ち其の錯綜を盡くさざる莫し。
八六二七　錯綜は變を盡くすと雖も。而も條理井然たり。得て淆す可からず。
八六二八―二九［地中の物］
蓋し地中の物にては。水燥は雲を爲し雨を爲し。雷を爲し雪を爲す。

八六三〇　動植は其の間に竝び立つ。
八六三一　燥は日の暄を迎えて春を爲す、
八六三二　發は日の熱に應じて夏を爲す
八六三三　影は日の暄を送りて秋を爲す、
八六三四　收は地の寒に和して冬を爲す、
八六三五　春暄は鼓して煦め、秋涼は驅りて肅す、
八六三六　夏熱は鬱して蒸し　冬寒は達して凍る、
八六三七　煦蒸は起長す、
八六三八　肅凍は歸復す、
八六三九　嘑嗡は中線を畫す。
八六四〇　寒暑は嘑嗡を追う。
八六四一　天は運轉環守して地は極と中とを定む。
八六四二　極の一直は、則ち嘑嗡の理なり、
八六四三　中の一線は、則ち東西の路なり、
八六四四　熱象は中に循りて走る、
八六四五　寒氣は極に依りて引く、
八六四六　極にては日の政を施すの地に遠きを以て、而して聚斂の氣　旺す、
八六四七　中にては会の收斂するの地に遠きを以て、而して鬱發の物　占む、

八六四八　中帯は暄煦にして、生物蕃息の地を爲す、
八六四九　極下は寒肅にして、萬物閉息の處を爲す、地の寒熱を分つ所なり。
八六五〇　大物に於ては則ち地気を天に達すれば則ち涼なり、
八六五一　天気を地に收むれば則ち寒なり、
八六五二　天易を地に煦むれば則ち溫なり、
八六五三　地易を天に鬱すれば則ち熱なり、
八六五四　一氣一物、
八六五五　一動一靜、
八六五六　物なる者は動に熱し、結に寒す、
八六五七　氣なる者は達に涼し、鬱に溫す、是に於て
八六五八　天は則ち轉涼にして日を吹きて熱す、
八六五九　地は則ち持溫にして水を融して冷す、
八六六〇　精なる者よりして之を觀れば、則ち氣體は二ならず、
八六六一　麁なる者よりして之を觀れば、則ち氣體は素より別なり、
八六六二　氣體は各おの動止を有す。發收排喩は。動止の事なり。故に
八六六三　寒熱溫冷なる者は氣なり。動靜の精よりして見る。故に。
八六六四　氣は、動なれば則ち達して冷なり、
八六六五　靜なれば則ち舒して溫なり、

(I 470b)

(PB 534)

八六六六　體は、動なれば則ち鬱して熱なり、
八六六七　　靜なれば則ち肅して寒なり、
八六六八　氣動けば則ち體止まる者は、天地　是れなり、是に於て、
八六六九　天は動にして冷なり、
八六七〇　地は止にして寒なり、
八六七一　動靜の間は、同氣　相い和す、
八六七二　體動けば則ち氣持する者は、日燥　是れなり、是に於て、
八六七三　日は動にして熱なり、
八六七四　燥は靜にして溫なり、
八六七五　動靜の間は、同氣　相い和す、
八六七六　地は靜にして寒なり、則ち日は動にして熱なり、
八六七七　轉は動にして冷なり、則ち持は靜にして溫なり、
八六七八　錯綜すれば則ち各氣は相い交る。
八六七九　天なる者は、虛にして動なり、
八六八〇　地なる者は、實にして靜なり、
八六八一　虛實に對する者は。動靜なり。
八六八二　日なる者は、象を以て動く、故に熱なり、
八六八三　轉なる者は、氣を以て動く、故に冷なり、

八六八四　地なる者は、質を以て靜す、故に寒なり、
八六八五　持なる者は、氣を以て靜す、故に溫なり、故に
八六八六　天動地靜よりすれば、則ち其の氣は寒冷なり、
八六八七　日動燥靜よりすれば、則ち其の氣は溫熱なり、
八六八八　動靜の分なり。是を以て。
八六八九　日は物を鼓すれば、則ち持氣漸恬にして、而して風籟は驚かず、
八六九〇ー九一　其の氣は混濁鬱蒸して浮けば、雲は塞がり雨は淫う
八六九二　水は涌き海は溢る、
八六九三　艸木は怒張す、
八六九四　花は發し葉は布く、
八六九五　鳥獸は孳尾して、
八六九六　毛は革まり羽は毨す、
八六九七　結ばる者は解く、
八六九八　聚まる者は散ず、
八六九九　蟄する者は出づ、
八七〇〇　蛹する者は脫す、故に
八七〇一　暑候なる者は、質は動にして熱を鬱するなり、
八七〇二　質動けば則ち氣靜すなり、

(PB 535)

氣動けば則ち物肅すなり、是に於て
風飆激驕し、混濁浮動する者は肅として收む、
雲は霏び霖は歇む、
潦は盡き泉は涸る、
艸は子を抱きて死す、
木は葉を脱して童す、
往く者は復す、
見わる者は隠る、
流れる者は止る、
融する者は凝す、
寒候なる者は、體は靜にして寒を達するなり、
溫は、暑の漸なり、
涼は、寒の漸なり、
春秋は。寒暑の交なり。
猶お昏暁の晝夜に於るがごとし、
天氣なる者は烈なり、
地質なる者は肅なり、
日なる者は焔焔なり、

八七〇三
八七〇四
八七〇五
八七〇六
八七〇七
八七〇八
八七〇九
八七一〇
八七一一
八七一二
八七一三
八七一四
八七一五
八七一六
八七一七
八七一八
八七一九
八七二〇

(I 470a)

八七二一　燥なる者は煦煦なり、故に
八七二二　寒熱は天に由ると雖も。而も地も亦た之を有す。
八七二三　惟だ微甚の異なり、
八七二四　若し熱は惟だ日のみ之を有すと曰わば。則ち
八七二五　夏至　當に熱すべし、
八七二六　冬至　當に寒すべし、而るを今
八七二七　夏至を過ぎて熱すること進む、
八七二八　冬至を過ぎて寒すること進む、
八七二九　春秋二分して。溫涼は當に均しかるべし。而るに
八七三〇　春分は寒に勝らず、
八七三一　秋分は暑に勝らず、
八七三二　精麁は錯綜す。
八七三三　變化は參差す。
八七三四　夏夜は時有りて、晝より熱し、
八七三五　冬日は時有りて、夜より寒し、故に
八七三六*　其の事は。固より日に從う有りと雖も。專ら日に從わざる者有り。故に
八七三七　日退きて暑は進む。
八七三八　日進みて寒は從う。

八七三九　海なる者は質の動なり、故に海上は則ち氣は靜にして溫なり、
八七四〇　山なる者は質の靜なり、故に山頂は則ち氣は動にして寒なり、
八七四一　山は日に近きを以て溫ならず、
八七四二　海は日に遠きを以て冷ならず、
八七四三　各自に動靜有るなり。是を以て。
八七四四ー四六　轉の涼と、地の寒とは同じからず、轉は則ち動を以て涼なり、地は則ち靜を以て寒なり、
八七四七ー四九　持の溫と、日の熱とは同じからず、持は則ち靜を以て溫なり、日は則ち動を以て熱なり、
八七五〇　是の故に煦煦は質動に和して熱なり、
八七五一　肅肅は氣動に和して寒なり、
八七五二　氣體の動靜は。寒熱溫涼の成る所なり。
八七五三　日は物を鼓して、其の事を肇む、
八七五四　地は其の事を承けて、物を成す、
八七五五　猶お夫唱え婦和し。君令し臣奉ずるがごとし。
八七五六　蓋し地は動くこと能わず、火を以て動く、
八七五七　日は止ること能わず、地に依て止る、
八七五八ー五九　之を小に於て言わば。灯火は一盞の油を根として、燃えて止まらず、
八七六〇　陶瓦は罏火の攻るに由りて、結びて彌よ堅し、
八七六一　緯なれば則ち寒は地に歸す、

(PB 536)

熱は日に歸す、
經なれば則ち噫に從いて熱す、
喩に從いて寒す　夫れ
宙通宇塞、天容地居の間、
日熱影涼、水冷燥溫の中、
上にして雲雨なり、
下にして動植なり、
雨なる者は、結びて地に歸す、
雲なる者は、解けて天に之く、
動なる者は、動きて天を行る、
植なる者は、止りて地に立つ、
雨露の融、寒は之を收むれば則ち霜雪なり、
雲烟の釀、熱は之を發すれば則ち雷電なり、是に於てか。
雲は暖かく雨は冷たし、
動は溫かく植は冷たし、
霜雪は寒の極に居る、
雷電は熱の極に居る、
陸なる者は溫處なり、

(I 471a)

八七八〇　水なる者は冷處なり、
八七八一　溫中の動植は自から溫なり、
八七八二　冷中の動植は自から冷なり、
八七八三　溫中は。動質は溫なり、
八七八四　止質は冷なり、則ち
八七八五　冷中も亦た同然ならざること能わず。
八七八六ー八七　猶お之を分てば。則ち鳧雁は寒を好む
八七八八　燕子は暑を好む、
八七八九　稻粱は夏に生ず、
八七九〇　牟麦は冬に生ず、
八七九一［人身寒熱］　人の造化胎中に居るは、溫を以て我が中を立つ。
八七九二　鱗比血肉の弱質は、氣鬱すれば則ち熱す、熱すれば則ち神を喪う、
八七九三　氣達すれば則ち寒す、寒すれば則ち神を脱す、
八七九四　以て剛堅天地と同じからざる所なり。
八七九五［圈帶］　性境は動圈に成る、其の物を爲すや虛なり、環りて時を行う、
八七九六　體境は靜圈に成る、其の物を爲すや實なり、止りて虛を立す、
八七九七　動中の物は、紀を衰衰に於て爲し、鬼神を其の中に行う、

八七九八　靜中の物は、章を坱坱に於て爲し、山壑を其の表に立す、

八七九九　地は水燥を有す、

八八〇〇　天は日影を有す、

八八〇一　水燥は乾潤滋煦を爲す、

八八〇二　日影は照蔽寒熱を爲す、

八八〇三　兩環は合一して、造化を成す。

八八〇四　中線下は常に熱す、

八八〇五　兩極下は常に寒す、

八八〇六　南北は以て其の節氣を反す、

八八〇七　日の到る處は常に明なり、

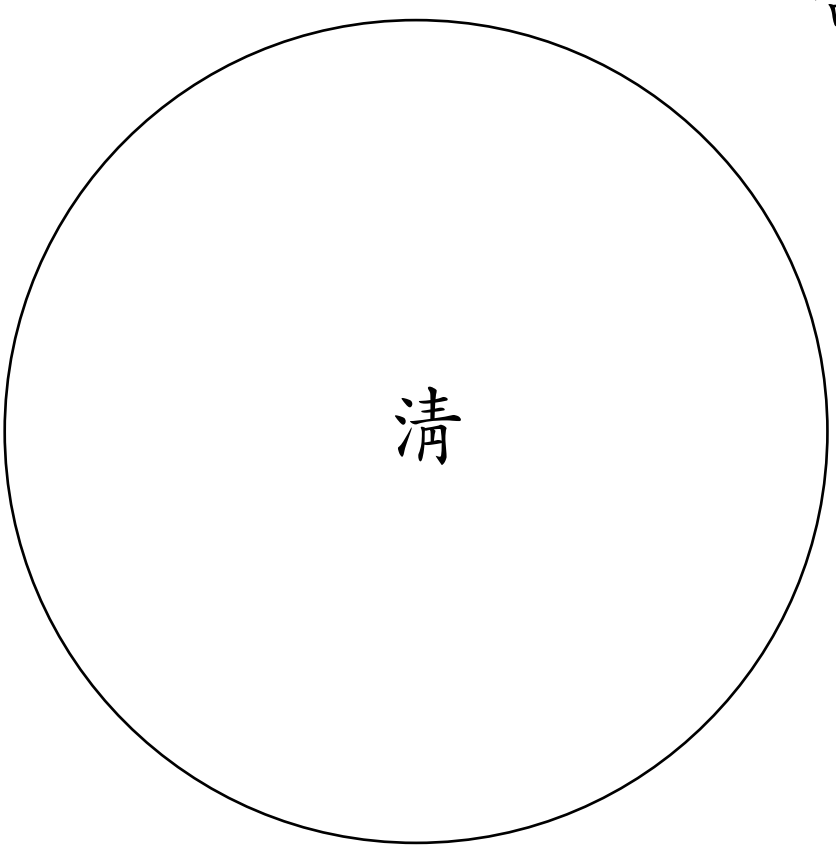
八八〇八　影の隨う處は常に暗なり、

八八〇九　東西は以て其の刻分を反す、

(PB 538)

(PB 539)

# 清濁圖一合

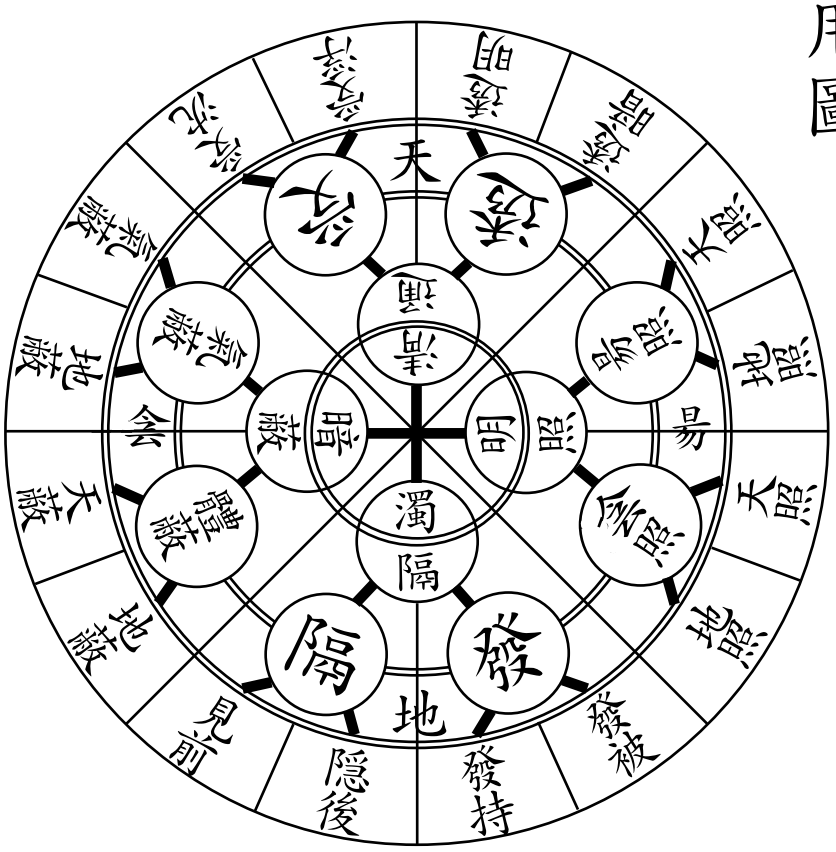


濁

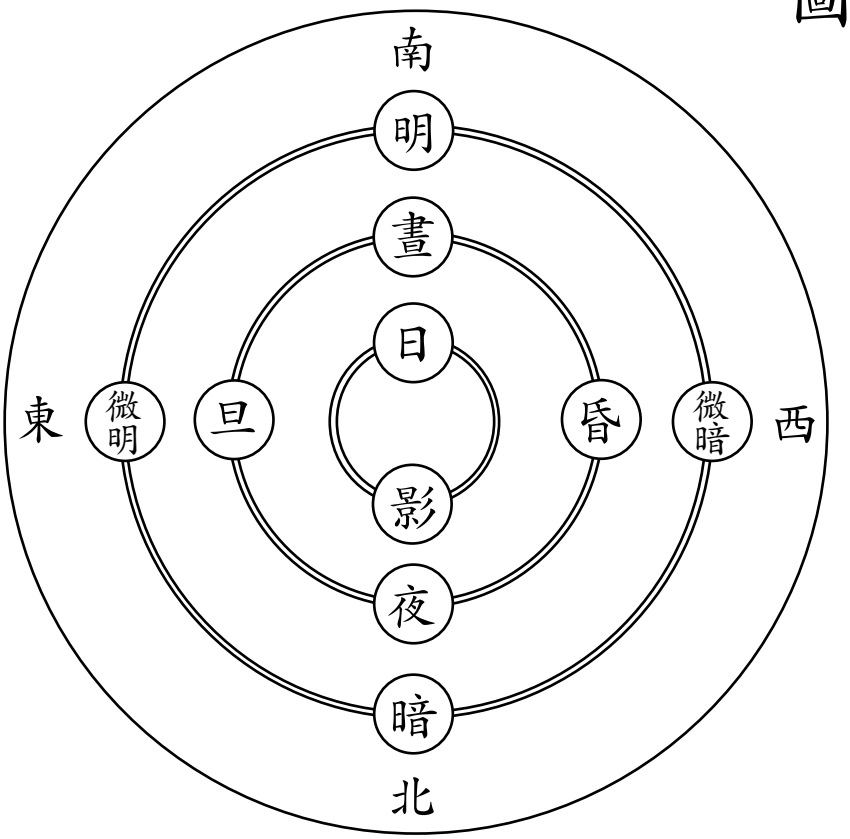
# 素色文彩圖


天位
地位
地位
天位
清
濁
明
暗
浅
深
淡
濃
薄
厚
光
黄
白
赤
朱
紫
青
緑
碧
会
易
晝
夜
明
暗
色
清
濁
浅
深
淡
濃
薄
厚
光
黄
白
赤
朱
紫
青
緑
碧

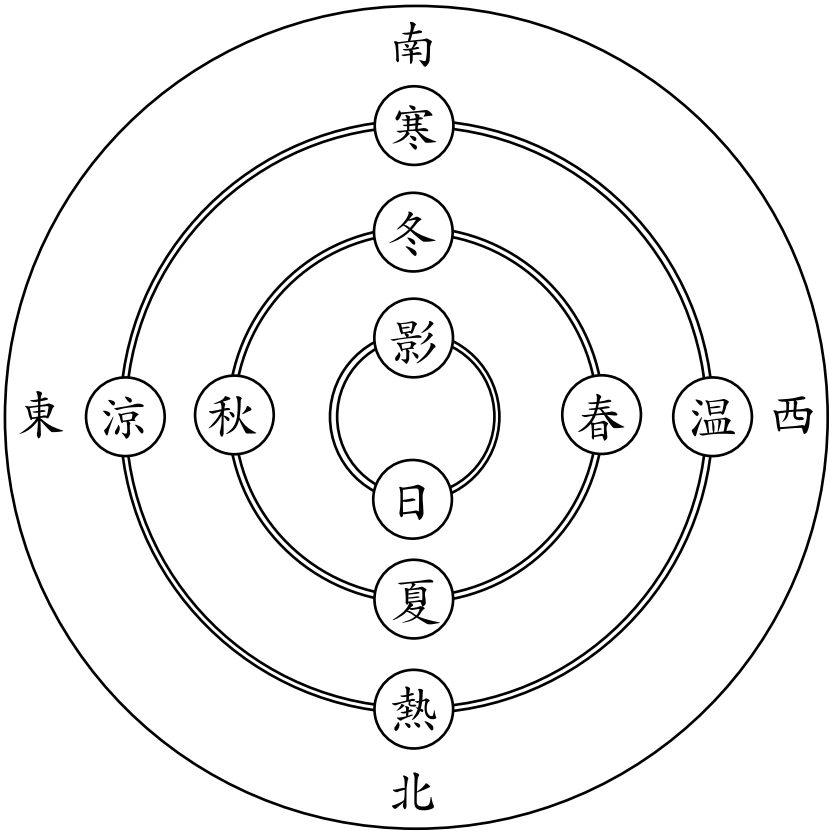
# 素色運用圖


天
地
濁
隔
發
隔
透
明
發
持
隱
後
發
被
照
地
照
天
照
易
照
日
照
暗
殺
濁
隔
體
殺
天
殺
地
殺
參
考
殺
地
殺
天
殺
體
殺
見
前
隔
後
發
持

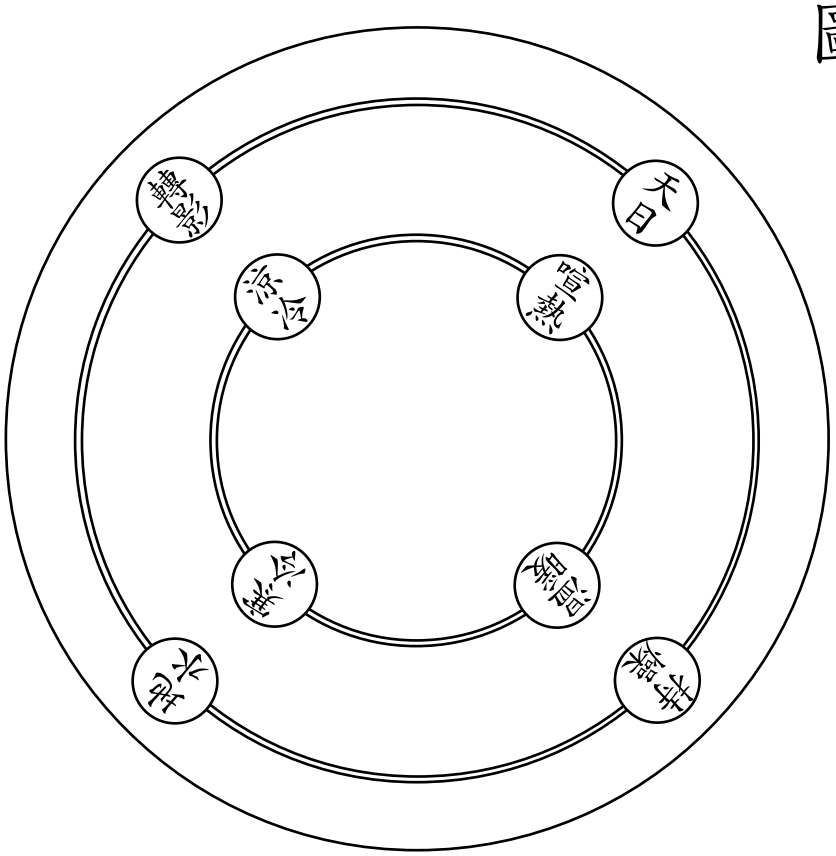
# 明暗圖



# 寒熱圖



# 寒熱緯圖



水燥

*八一八 天體なる者は剛なり、
八八一九 地體なる者は堅なり、
*八二〇 天は柔を以て持に歸す、
*八二一 地は輭を以て上に歸す、是を以て
八八二二 天成は其の極なり、
*八二三 持成は其の微なり、是を以て
八八二四 天形は其の正を極む。
八八二五 天體は其の大を極む。
八八二六 天動は其の疾を極む。
八八二七 天壽は其の長を極む。
八八二八 天色は明暗を極む。
八八二九 天氣は寒熱を極む。
八八三〇 地は此れ無きに非ず。
*八三一 柔輭の境。以て其の微を成す。是を以て
八八三二 持中は溼燥を分つと雖も、燥の極は乾なり、
八八三三 水火を分つと雖も、火の微は潤なり、是を以て
八八三四 持中は柔潤を以て天地を立すと雖も。是に於て

八八三五　上は剛の天に上らず、
八八三六　下は堅の地に陥らず、
八八三七　斜止溫冷の間は。弱物を生化し。以て其の内を塞ぐ。
八八三八　夫の正大の體と、
八八三九　　攸遠の壽の、色氣の盛を極むる者と異なるなり。
八八四〇　天圈に居る者は、循環を爲す、
八八四一　地圈に居る者は、鱗比を爲す、
八八四二　鱗比する者は弱質にして水を含む。
八八四三　蠢然莽然。擾擾然として。絪縕を爲す。
八八四四　水燥景影は。滋煦の氣を化釀して。而して萬物を成す。
八八四五　日影の圈は、中を己に於て爲す、
八八四六　水燥の圈は、中を地に於て假る、
八八四七　地なる者は駁然たり。山嶽島嶼を突出す、
八八四八　　川谷湖海を陷入す、
八八四九　生生の氣は。物を生ぜざること能わず。
八八五〇　乾虛の中は則ち乾虛の物を爲す、
八八五一　潤實の中は則ち潤實の物を爲す、
八八五二*－五三　潤實の分は水燥に於て物す。地突は燥の處を餘す、

(PB 549)

地陥は水の處を餘す、
八八五四*　衆生は　各　其の處を得る。條理なる者の巧を觀る。
八八五五
八八五六　［日影水燥］
持中にては。其の氣は柔にして燥なり、
其の質は輭にして溼なり　故に
八八五七
持中は則ち水燥　政を爲す。
八八五八
寒熱明暗は。其の極を殺して。其の微を致す。
八八五九
絪縕は天地に合す。
八八六〇
造化は乾潤滋煦に於て成る。蓋し
八八六一
天圈は則ち運の枝頭に華す、
八八六二
地圈は則ち轉の根頭に幹す、
八八六三
地勢高下は山壑の章を成す、
八八六四
象形聚散は星漢の文を成す、
八八六五
是れ孿圈の地なり、是を以て
八八六六*
天文は、日弧は日に繫り　月弧は月に繫る、
八八六七
地章は、低處は水を容れ、高處は火を發す、
八八六八
是れ孿圈の天なり、
八八六九*
本天は則ち精虚にして。麁實の處に隱没す。
八八七〇

八八七一　日なる者は火を發して自から處す、
八八七二　月なる者は露を含んで相い從う、
八八七三　水なる者は溼を釀して自から處す、
八八七四　火なる者は星を吐して相い立す、
八八七五　月規なる者は小なり、
八八七六　日規なる者は大なり、
八八七七ー七八　駕して以て運轉す、而して星漢なる者は大規にして、能く靜虛の影に居る、
八八七九　水球なる者は小なり、
八八八〇　燥球なる者は大なり、
八八八一ー八二　乘りて以て止住す、而して土石なる者は小球にして、能く動虛の天に居る、而して
八八八三　星漢なる者は變動の物なり、
八八八四　土石なる者は實靜の物なり、
八八八五　星漢は變動の物を以て、靜虛の景に居る、故に其の脈絡を一にす、
八八八六　月辰は各会の物を以て、變動の口に賴む、故に其の脈絡を別にす、是を以て
八八八七　影曜は率從の分無し、
八八八八　景曜は率從の別を爲す、
八八八九　地なる者は山壑の方位を定む、
八八九〇　運なる者は樞機の活動を變ず、

(I 472b)

八八九一　地質は聚結して、其の表に物を置く、
八八九二　天氣は散敷して、其の中に物を容る、故に
八八九三ー九四　彼の星漢の文は、猶お此の山壑の章のごとし、
八八九五ー九六　彼の日月の繫規は、猶お此の水燥の球に依るがごとし、
八八九七　各おの依ること有りて然り。
八八九八ー九九　天の日月を比するは、猶お地の水火を比するがごとし、
八九〇〇ー〇一　地の水燥を反するは、猶お天の日影を反するがごとし、
八九〇二　日影は晝夜冬夏を爲す、而して月の功は微なり、
八九〇三　水燥は乾潤滋煦を爲す、而して火の功は微なり、
八九〇四　日月星漢は。天を周り地を周る。
八九〇五　衆辰は日機軸の中に在り。以て其の所屬と爲す。是に於て
八九〇六　影曜と日とは易徳を同じくす、
八九〇七　景影と月とは会徳を同じくす、
八九〇八　日と火と其の物を同じくす、而して地に於ては則ち火は微を爲す、
八九〇九　水と月と其の物を同じくす、而して天に於ては則ち月は微を爲す、
八九一〇　月なる者は暗象なり、
八九一一　暗は日の爲に轉せられ。晦朔弦望を爲す。
八九一二　而して衆辰は皆な暗象なり。景中に同居す。小なる者は見難し。

(PB 551)

八九一三　或いは日に傍らして繞る。
八九一四　或いは歳塡に傍して繞る。
八九一五　僅かに鏡力を假りて之を見る。
八九一六　顯なる者は塡を爲す。歳を爲す。熒惑を爲す。太白を爲す。
八九一七*　辰は則ち日に近し。日に近きに從いて其の旋を急にす。夫れ
八九一八　轉ずる者は地氣を達して上る、
八九一九　運する者は天氣を以って降る、是を以て
八九二〇　易華の開きて地に近き者は。
八九二一　運轉の脈理を其の標に歸す。地なる者は實質の根を託する處なり。
八九二二　是を以て華は枝頭に發す。故に口圈は極易の地を爲す。
八九二三　易は舒暢の力を盡くすを得る。
八九二四　舒暢の易餘と。地解の燥と和す。
八九二五　鬱發は火を爲す。火井熱池なる者は其の常なり。
八九二六　時として山を裂き火を出す。
八九二七　天に入りては霹靂流隕を爲す。
八九二八　燥の火は。猶お水の氷のごときなり。夫れ
八九二九　水なる者は氣より來るを以て、而して其の質は密なり、
八九三〇　燥　は質より往くを以て、而して其の氣は麁なり、

（者を欠くか。）

結ばる者は重にして密なり、結びて密なりと雖も、而も
地の堅凝にして不動なるがごときこと能わざれば、則ち
勢は水ならざること能わず、
解くる者は輕にして散なり、
輕にして散ずと雖も、而も
天の精融にして不濁なるがごときこと能わざれば、則ち
勢は燥ならざること能わず、
天を占むる者は、易物会氣なり、
地を占むる者は、会物易氣なり、
水燥の地は、則ち溼火を微と爲す、而して
溼は則ち水の散なり、
火は則ち燥の發なり、故に
地に於ては則ち火を客と爲す、
地ならざる者は則ち天なり、
水ならざる者は則ち燥なり、
水燥は相い拒む。性の反するを以てなり。
天地を合して之を言えば則ち天散の中にては火は之に懸く、
地結の上にては水は之に布く、

(PB 552, I 473a)

八九三一
八九三二
八九三三
八九三四
八九三五
八九三六
八九三七
八九三八
八九三九
八九四〇
八九四一
八九四二
八九四三
八九四四
八九四五
八九四六
*八九四七ー四八
八九四九

八九五〇　日と影と歳を爲す、
八九五一　水と燥と運を爲す、
八九五二　天に於ては則ち水を客と爲す、
八九五三　地に於ては則ち水を雌と爲す、故に
八九五四　火なる者は虚體の昜氣よりして、發して象を見すなり、
八九五五　溼なる者は實體の会質よりして、解けて體を失すなり、故に
八九五六　水は燥に偶す、
八九五七　火は質に對す、蓋し
八九五八　火なる者は燥中に體有り。以て水外の解體に偶す。
八九五九　比すれば則ち能く水に對す。
八九六〇　再び剖析する所に比すれば。則ち燥の火は猶お水の氷のごとし。
八九六一　燥は昜にして解く、
八九六二　水は会にして結ぶ、
八九六三　水は結體を以て潤う、
八九六四　火は解體を以て乾く、
八九六五　燥は、其の氣　溫なり、甚しければ則ち熱して火を爲す、
八九六六　水は、其の氣　冷なり、甚しければ則ち寒して氷を爲す、
八九六七　地火の體は微なり。未だ能く水と竝び立ちて。

八九六八　解結の用を專らにすること能わず。然りと雖も。
八九六九　體體は相い比して。能く體を結び體を解けば。則ち
八九七〇　氣質の端は此に見る。是を以て
*八九七一　火なる者は質の氣に之くなり、故に體は清にして色暗し、故に
*八九七二　水なる者は氣の質に之くなり、故に體は清にして氣濁る、
八九七三　水は質密を以て、能く麁解に入る、
八九七四　火は氣麁を以て、能く堅密に入る、
八九七五　水は苔を生じ蟲を化す、無をして有に之かしむ、
八九七六　火は水を涸し木を食う、有をして無に之かしむ、是を以て
八九七七　水は高きより卑きに就く、
八九七八　火は地を出でて天に歸す、
八九七九　水なる者は氣の動きて結ばるなり、
八九八〇　火なる者は質の動きて解くるなり、故に
八九八一　結びて質を成す者は、先ず水に始る、
八九八二　解けて質を失う者は、皆な火に由る、
八九八三　水は能く收む、故に塵垢を洗う可し、是を以て
八九八四　能く其の内を見して外を照さず、
八九八五　漬れば則ち物色をして深からしむ、

八九八六　滌げば則ち物質をして白からしむ、
八九八七　火は能く散ず　故に實體を化す可し、（「是を以て」を欠くか。）
八九八八　　能く外を照して内を見ず、
八九八九　燥けば則ち物色をして淺からしむ、（「其の」を欠くか。）
八九九〇　燒けば則ち物質をして黒からしむ、（I 473b）
八九九一　水は質に就きて住まえば則ち青し、
八九九二　火は質に就きて住まえば則ち赤し、
八九九三　水は日に値えば則ち明なり、
八九九四　　影に値えば則ち暗なり、
八九九五　火は日に値えば則ち暗なり、
八九九六　　影に値えば則ち明なり、
八九九七　水の體や實なり、其の氣や收なり、
八九九八　收めて質成れば則ち凝す、故に融けて流るる者は、氣の動なり、
八九九九　火の體や虚なり、其の氣や散なり、
九〇〇〇　散じて虚すれば則ち竭く、故に動きて住まう者は、質の持なり、故に
九〇〇一　烟なる者は溼の燥中に居ること能わず、火を兼ねて散るなり、
九〇〇二　雲なる者は燥の溼中に處すること能わず、水を帶びて上るなり、
九〇〇三　日影の處は、則ち月景を微と爲す、而して

九〇〇四　影は則ち易の散なり、
九〇〇五　月は則ち会の結なり、故に天に於ては則ち月を雌と爲す、
九〇〇六　景溼なる者は、氣の體より生ずるなり、
九〇〇七　月火なる者は、體の氣より生ずるなり、是を以て
九〇〇八　日影水燥の用は、天地に雄にして、
九〇〇九　月景溼火の用は、天地に雌なり、故に
九〇一〇　水は燥を措きて火に對す、
九〇一一　日は影を措きて月に對す、對の比なる者なり。是を以て
九〇一二　日月は明暗を異にすと雖も、
九〇一三　水火は明暗を異にすと雖も、共に是れ有體の物なり。是を以て
九〇一四　水火と日月と。溼燥と景影と。天地虚實は相い隔たると雖も。
九〇一五　體を反して性を同じくするなり。
九〇一六　水は能く收む、故に、火氣をして冷に、火象をして暗ならしむこと能わず、
九〇一七　火は能く發す、故に亦た水氣をして熱に、水質をして照ならしむこと能わず、
九〇一八　一收一發は会易の道なり。
九〇一九　日は暗中に在り、而して、暗寒を受けず、（能を欠くか。）
九〇二〇　猶お炬を暗中に秉りて、而して暗寒の自から遠ざかるがごときなり、
九〇二一　月は景中に居る、而して能く明瑩を受く、

(PB 554)

猶お水の火邊に在りて、而して其の光耀を受けるがごときなり、
鏡は炬の明を受けて。一邊を照す。
傍觀の人は。鏡と炬とを竝べ觀て。以て同物と爲す。
是れ見る所に由りて誤るなり。故に。
月なる者は蝕を正とす、
日なる者は蝕を蔽とす、蓋し
月は水を體すれば、則ち月に屬するの象にして景中に在る者は、皆な水を體するなり、
日は火を體すれば、則ち日に屬するの象にして影中に在る者は、皆な火を體するなり、
然りと雖も。月は地の水の實するが如くんば、則ち滴りて地に歸らん、
　日は地の火の麁なるが如くんば、則ち降りて之に著かん、
日は無質の会を食す、
月は虛體の天に浮く、
火は則ち質を食す、地を離れて燃ること能わず、
水は則ち地に依る、虛に在りて居ること能わず、然り而して
月の天に在るは、諸を日の象に比すれば、則ち質なり、
地質より之を觀れば、則ち氣は精にして體は虛にして、象に幾し、
火の地に在るは、諸を水の質に比すれば、則ち象なり、
天象より之を觀れば、則ち氣は麁にして體は實にして、質に幾し、是を以て。

九〇二二
九〇二三
九〇二四
九〇二五
九〇二六
九〇二七
*九〇二八ー二九
*九〇三〇ー三一
九〇三二
九〇三三
九〇三四
九〇三五
九〇三六
九〇三七
九〇三八
九〇三九
九〇四〇
九〇四一

九〇四二　水質は亦た象中の質なり、
九〇四三　火象は亦た質中の象なり、夫れ。
九〇四四　月なる者は、明中の物なり、天に在りて地に近し、
九〇四五　日に近きを以て、而して其の體暗し、
九〇四六　天に在るを以て、而して其の氣光る、
九〇四七　火なる者は、暗中の物なり、地に發して天に之く、
九〇四八　天に之くを以て、而して其の體光る、
九〇四九　地を發すを以て、而して其の氣暗し、是を以て。
九〇五〇　水は能く地に充つ、
九〇五一　火は天に充ること能わず、
九〇五二　日は能く晝を爲す、
九〇五三　月は夜を爲すこと能わず、
九〇五四　水なる者は会を結ぶ、
九〇五五　燥なる者は易を解く、
九〇五六　水は常に萬物を液す、
九〇五七　燥は常に萬物を煦む、
九〇五八　日なる者は聚易なり、
九〇五九　影なる者は散会なり、

(PB 555)

九〇六〇　日は天下をして晝ならしむ、
九〇六一　影は天下をして夜ならしむ、蓋し
九〇六二　氣體の交は。其の道同じからず。
九〇六三　體は相い交る、之を接と爲す、
九〇六四　氣は相い交る、之を交と爲す
九〇六五　體接は混ぜず、
九〇六六　氣交は分せず、故に
九〇六七　地日は體を隔つ、
九〇六八　天影は氣を混ず、
九〇六九　燥なる者は、地に居るの氣なり、持中の天を爲す、
九〇七〇　轉なる者は、天に在るの氣なり、轉中の天を爲す、而して
九〇七一　轉の天なる者は、清なり、精なり、
九〇七二　持の天なる者は、濁なり、麁なり、故に
九〇七三　月は乾燥の象に在りと雖も、而も天中に質を爲し、性を地中の水に比す、
九〇七四　火は潤溼の質に居ると雖も、亦た地中に象を爲し、性を天中の日に比す、而して
九〇七五　月、暗體を以て光り、
九〇七六　火、光體を以て暗なる者は、各おの其の藩囲を出でざればなり。
九〇七七　地は、自から照すこと能わず、一半の光を日より受けて、晝を爲す、

九〇七八　月も亦た自から照すこと能わず、一半の光を日より受けて、明を爲す、
九〇七九　其の光を受けざるの處は。地に於て夜と謂う、
九〇八〇　月に於て魄と謂う、
九〇八一　日の地を照すこと一周は、之を一日と謂う
九〇八二　日の月を照すこと一周は、之を一月と謂う
九〇八三　雌なりと雖も而も敵を爲す。
九〇八四ー八五　燥と水と持中に充ちて、生化解結の用を爲す、火の燥に在るは、猶お氷の水に在るがごとし、
*九〇八六ー八七　影と日と轉中に充ちて、寒暑晝夜の用を爲す、月の影に於るは、猶お火の景に於るがごとし、
九〇八八　是を以て。燥も亦た火なり、解くるを以て火より精なり、
九〇八九　火も亦た燥なり、發するを以て燥より麁なり、
九〇九〇　水も亦た溼なり、結ばるを以て溼より實なり、
九〇九一　溼も亦た水なり、解くるを以て水より虚なり、故に
九〇九二　燥は常に充つ、火は時に發す、
九〇九三　溼は時に動く、水は常に有り、
九〇九四　燥は常に燥く、火は時に燒く、
九〇九五　溼は時に冷ゆ、水は常に溼る、
九〇九六　物を燥かせて其の跡無し、故に燥は火より精なり、
九〇九七　物を溼らせて體を見さず、故に溼は水より虚なり、是を以て。

(I 474b)

(PB 556)

九〇九八　影の日に於るは、月より切なり、
九〇九九　燥の水に於るは、火より切なり、故に
九一〇〇　水は一檐と雖も、猶お化育を助く、
九一〇一　火は則ち大なりと雖も、而も物を育む能わず、
九一〇二　故に曰く。生化解結は。水燥に非ざれば則ち成らざるなり。
九一〇三　正偶は反す、
九一〇四　傍偶は比す、
九一〇五　日影水燥は、偶の正なり、
九一〇六　日月水火は、偶の比なり、
九一〇七　質を有質の中に於て解きて、而して天に散ずる者は、火なり、
九一〇八　質を無質の中に於て結びて、而して地に聚まる者は、水なり、
九一〇九　火を以て物を煨す、熱囲んで会を散ずること能わず、潤は其の中に生ず、
九一一〇　玉を以て火を取る、影囲んで昜を出だすこと能わず、火は中に於て起る、
九一一一　分かつ者は二なり、
九一一二　統ぶる者は一なり、
九一一三　水は火を待ちて質を結ぶ、
九一一四　火は水を待ちて氣を起す、
九一一五　水は火を見して質を散ず、

九一一六　火は水を見して象を斂す、
九一一七　水の未だ質を結ばず、火の未だ象を發せざるを觀る、
九一一八　水の既に質を散じて、火の既に象を斂めるを觀る、
九一一九　其の未だ始めて二を有せざるを知る。
九一二〇　今夫れ假りに月を除かしむとも、而も晝夜寒暑は則ち有らん、
九一二一　今夫れ假りに火を除かしむとも、而も山水雲雨は則ち有らん、故に
九一二二　影と日と、
九一二三　水と燥と、
九一二四　氣物を反す　而して
九一二五　会易を對す、
九一二六　以て生化を爲す。
九一二七　物なる者は立す、
九一二八　神なる者は活す、故に
九一二九　性物は活して通ず、
九一三〇　體物は立して塞ぐ、
九一三一　活通の中は。其の活通を以て、而して日影は常に其の處を移す、
九一三二　　其の立塞を以て、而して水燥は常に其の處を占む　夫れ
九一三三　天地なる者は。虚實は居を同じくす、

(I 475a)

九一三四　　動止は界を分かつ、
九一三五　居を同じくする者は何ぞ　天は能く地に在り、地は能く天に居る、
九*一三六　界を分かつ者は何ぞ　　轉は能く天に在り、持は能く地に在る、
九一三七　輪轉の到らざる處、之を内と謂う、
九一三八　輻持の及ばざる處、之を外と謂う、
九一三九　外は則ち日影整齊して、地を周り天を周る、
九一四〇　内は則ち水燥錯雜して、天に之き地に之く、
九一四一　整齊の期は歲を爲す、
九一四二　錯雜の變は運を爲す、蓋し
九一四三　地は上下表裏有り、天は之に居る、
九一四四　天は東西南北有り、地は之を奉ず、故に
九一四五　兩端は噫嘻に從う、
九一四六　中線は運轉に依る、
九一四七　兩端は日に遠し、
九一四八　中線は日に近し、蓋し
九一四九　物は必ず一體にして二用を具す。
九一五〇　中分は南北して、而して春秋冬夏は代がわる行わる、
九一五一　日は面背を分ちて、而して昏曉晝夜は迭いに成る、經緯の異なり。

(PB 557)

九一五二　日影は明暗寒熱を以て政を爲す。而して
九一五三　水燥なる者は日影の反物なり。
九一五四　明暗寒熱を以て。清濁溫冷を爲す。清濁は本と天地の色なり。
九一五五　天地の清濁は。日影より大なり。
九一五六　水燥の清濁は。日影より小なり。是を以て
九一五七　水質は清なること天の如くなれども、天の透徹に及ばず、
九一五八　燥氣は濁なること地の如くなれども、地の隔遮に若かず、是に於て
九一五九　濁中水燥の清濁なる者は、淡にして素なり、
九一六〇　清中日影の明暗なる者は、濃にして色なり、
九一六一　水は解けて溼を爲す、
九一六二　燥は發して火を爲す、
九一六三　燥中に火の有るは、猶お
九一六四　水中に氷の有るがごとし、皆な其の極なり。
九*一六五　［吹火珠］
　水火珠を得て之を弄するに。一銅空丸に一繊孔を鑿つ。
九*一六六　之を火にすれば則ち丸中の氣を發し盡す。
九*一六七　水に投ずれば則ち氣を發し盡くすを以て。水を嗡いて實す。
九一六八　水を實して火に投ずれば。則ち結質を解きて風を爲して竭く。故に

九一六九　会質は將に結ばんとすれば、則ち麁易を排して實を搾成す、
九一七〇　易象は將に發せんとすれば、則ち密会を衝いて虚を發成す、
九*一七一　小を熟觀して。之を大に推すに。
九一七二　地会の轉を以て天に達する、
九一七三　天易の運を以て持に鬱する、
九一七四　風颯の地下の畜鬱に發する、
九一七五　霪霖の天下の淫質に疏する、以て想像す可し。　(I 475b)
九一七六　日なる者は易宗なり、中位を得て、而して發す、
九一七七　迸する者は嘒嘒として布列す、
九一七八　散ずる者は其の象を失す、
九一七九　易鬱は噴發すれば、則ち結会を求めて之を嗡う、
九一八〇　易は求めて嗡えば、則ち会は輒く從う、
九一八一　從うと雖も而も乾熱の發象を食すれば、
九一八二　則ち其の中に存すること能わざるなり、
九一八三　從いて涌く、
九一八四　適きて没す、
九一八五　適没は已に其の物を没す、
九一八六　從涌は正に其の質を露す、　(PB 559)

九一八七　従えば則ち冷なり、
九一八八　涌けば則ち潤なり、
九一八九　水なる者は其の宗なり、拗處を得て瀦る、
九一九〇　適く者は津津として下り灑ぐ、
九一九一　結ぶ者は其の質を凝す、
九一九二　通塞より之を觀れば、機なる者は会なり、
九一九三　氣物より之を觀れば、性なる者は易なり、
九一九四　轉ずる者は会に達して色を没す、而して冷動して火を鼓す、
九一九五　日なる者は易に鬱して明を釀す、而して發熱して風を御す、故に
九一九六　火は風の鼓するに由りて燃ゆ、
九一九七　水は土の戴だくに由りて湛う、是を以て
九一九八　竪軸なる者は、保氣を轉ずるの根なり、而して
九一九九　東規なる者は、鬱易を洩するの方なり、
九二〇〇　会なる者は下に聚る、故に易は收会の罅隙無きに搾排せらる、
九二〇一　易なる者は上に散ず、故に会は發易の充塞する所に疏なる所なり、
九二〇二　滋液なる者は、易華の嗡う所なり、從涌して化す、故に
*九二〇三―〇五　轉中にては質に之くの雨、山中にては原に發すの水、合して一體を爲す、
九二〇六　乾明なる者は、会液の排す所なり、噴發して出づ、故に

九二〇七ー〇九
九二一〇*
九二一一*
九二一二
九二一三
九二一四ー一五
九二一六ー一七
九二一八
九二一九ー二〇
九二二一
九二二二
九二二三1復元
九二二三2復元
九二二三3復元
九二二三
九二二四*
九二二五
九二二六

地中にては昜を洩すの竅、影中にては光を發すの象、散じて蜂窠の如し、
火は会の搾排に遭いて發すと雖も、亦た能く其の液を喩いて立つ、
水は昜の求喩に遭いて涌くと雖も、亦た能く其の氣を排して立つ、
火の薪を食するを觀れば、則ち火は木を離れて立つ者に非ず、
火は物を離る可くんば、赫赫焔焔、外に向いて散ず、
象行の本位に於て升降せざるを觀れば、則ち地を以て薪と爲すや識る可きなり、
夏にして水の溢るるを觀れば、則ち水は火を離れて立つ者に非ず、
水は日に従がわざれば、洪洪蕩蕩、下に在りて結ぶ、
水液の能く持中に升降するを觀れば、則ち火を以て原と爲すや識る可きなり、故に
火なる者は、地に食して、而して天に燃ゆ、
水なる者は、天に生じて、而して地に瀦る、

■■。轉持分界而水火相層、（判読困難）
轉中、則水火■東、（同）
持中、則水降火升、■亦來■■。（同）
夫れ地中の物は、地に親しみて地に居る、
　天中の物は、天に親しみて東に行く、
火なる者は。膩液に向いて進む。
其の尾は能く天に向う。

(I 476a)

九二二七　其の實は升る能わず。
九二二八　升れば則ち其の象を失す。
九二二九　火の膩液に向いて進むと、
九二三〇　水の地質に就きて止るは、
九二三一　共に下に就く有り　而して
九二三二　　升り去る無し　故に
九二三三　日月は共に東行す　之を分てば、則ち月は東に行く、
九二三四　　日は西に行く、
九二三五　水火は共に地居す　之を分てば、則ち水は退きて居る、
九二三六　　火は進みて居る、故に
九二三七　氣は散ずれば則ち物結ぶ、結ばる者は中に歸る、
九二三八　物は結ばれば則ち氣散ず　散ずる者は外に向う、
九二三九　散中にては会　收む、
九二四〇　結中にては易　發す、
九二四一　發中にては会を喩う、
九二四二　收中にては易を噴く、
九二四三　水は大物に液す、
九二四四　火は一氣に華す、故に

(PB 561)

九二四五ー四六　收会天中の影、従涌景中の月より　雨露河海、水氷汞臓に至りて、水に非ざる靡きなり、

九二四七ー四八　搾排海中の氣、鬱發持中の燥より　燐火雷電、日景星漢に至りて、火に非ざる靡きなり、

九二四九　一瓶の水、

九二五〇　一炉の火、人の用に資る所の者なり。

九二五一　火は噴けば則ち質を解く、質は亡すれば、則ち噴く所の火を失す、

九二五二　会は涌けば則ち質を結ぶ、質は存すれば、則ち噴く所の火を繼ぐ、故に

九二五三　天華は盡きざるの会を薪にす、

九二五四　地液は已まざるの易を原にす、

九二五五　会と易とは同壽なり。彼此は給資す。華液は常住す。

九二五六　瓶水炉火の。仰給する所無くして竭絶する者とは異なるなり。

九二五七　大物の火を發するは。小物と同じからざる有り。夫れ

九二五八　大物なる者は體を攸遠に於て持す、

九二五九　小物なる者は物を前後に於て換う、

九二六〇　體を攸遠に於て持する者は、会易の力抗す　故に

九二六一　發する者は收不斷の中に於て發す、

九二六二　鬱は其の縫に由りて發す、

九二六三　物を前後に於て換える者は、收絶え發盡る　故に

九二六四　發する者は收不斷の處に於て發す、

九二六五　鬱發は體を食して盡くす、
九二六六　之を水に於て言はば。易は醸の水を有す。
九二六七　衰衰は盡きず。汲みて甕中に納む。
九二六八　既に其の本を絶す。上鼎下木。火は竭る可し。
九二六九　水なる者は　融物なり、
九二七〇　氷雪なる者は凝物なり、
九二七一　氷雪の晛に澌きるは。其の結の固からざればなり。
九二七二　是を以て其の物有りて凝する。若し氷雪より固ければ。則ち
九二七三　其の寒の氷雪より甚しきや知る可し。　(I 476b)
九二七四［乾潤滋煦］
　一氣は本と全なり、
九二七五ー七六　会易は背走す、背するや反す、
九二七七　面するや合す、故に
九二七八　地氣は收めて晻なり、
九二七九　天象は發して明なり、
九二八〇　天氣は乾きて喁う、
九二八一　地質は潤いて噴く、
九二八二　天象は地氣を得て、而して日影は上に相い偶し、以て其の歲を成す、　(PB 562)

地質は天氣を得て、而して水燥は下に相い偶し、以て其の運を成す、
天影地溼は、同一の会氣なり、
地燥天景は、同一の昜氣なり、
乾華潤液は。境を隔てれば則ち其の氣も亦た異なるなり。故に
景と燥と同じく乾物なり、唯だ燥なる者は潤中に噴く所の昜を以て、而も
乾と雖も而も煦を以て徳と爲す、而して其の溫や、熱して地寒に和するなり、
月と水と同じく潤物なり、唯だ水なる者は乾中に噙う所の会を以て
潤と雖も而も滋を以て徳と爲す、而して其の冷や、寒して天熱に和するなり、
聚結は歸して一ならざるを得ず、
逆散は散じて布かざるを得ず、
津津は地に合す、
彗彗は天に分つ、故に
水なる者は、清虚の中より、乾熱の噙に涌きて、而して蒸騰の中に結ぶ、
氣より質に之くを以て、而して其の氣や清なり、
燥なる者は、濁質の中より、潤寒の排に噴きて、而して收肅の中に發す、
質より氣に之くを以て、而して其の物や濁なり、故に
水は則ち融して冷、寒凝して氷を爲すなり、
燥は則ち鬱して溫、發熱して火を爲すなり、故に

九二八三
九二八四
九二八五
九二八六
九二八七
九二八八
九二八九
九二九〇
九二九一
九二九二
九二九三
九二九四
九二九五
九二九六
九二九七
九二九八
九二九九
九三〇〇

(PB 563)

九三〇一　水燥は滋煦の悦を有す、
九三〇二　氷火は凍焚の惨を有す、
九三〇三　燥は或いは持中に居る、或いは地中に居る、
九三〇四　地に居る者は、質の爲に收斂せらるるを以て、激して發す、
九三〇五　持中に居る者の處を得て和するが如くならず、
九三〇六　水は或いは地中に居る、或いは持中に居る、
九三〇七　地に居る者は、氣の煎熬を受けて、清にして濃なり、
九三〇八　持中に居る者の清にして淡なるが如くならず、是を以て
九三〇九　同じく是れ燥なり、而して天燥なる者は和なり、地燥なる者は激なり、
九三一〇　同じく是れ水なり、而して天水なる者は淡なり、地水なる者は濃なり、是を以て
九三一一　燥に和激有り、
九三一二　水に淡鹹有り、
九三一三　風なる者は動天なり、
九三一四　燥なる者は靜天なり、
九三一五　水なる者は動地なり、
九三一六　地なる者は靜地なり、
九三一七*　燥の地に在りて、密質の爲に排せられ、空穴に由て其の氣を釀して發するは、猶お
九三一八　水の天に在りて、清氣の爲に疏せられ、而して其の質を釀すがごとし、是を以て

(PB 564)

(I 477a)

燥の持中に發する者は、風なり、
雲なり、
烟なり、
霧なり、
雷なり、
火なり、
雨なり、
露なり、
雪なり、
霜なり、
泉なり、

水の持中に釀す者は、

動地と靜地とは。靜地は高低を有し、燥に居りて水の養を受く、
動地は深淺を有し、水に居りて燥の煦を受く、

陸は平原・長流・火穴・風孔を有す、
水は平海・長流・潮汐の吐納を有す、而して
我が爲に造化す。柔和を爲す者は。持なり。

水は融すと雖も而も本と收物なり、
火は微かと雖も而も亦た發物なり、

給資を通じて立つ、
乾潤を反して成る、
之に逆えば則ち相い食す、
之に順えば則ち相い生ず、
讎敵を爲す者は、
能く親昵を爲す、
　收むる者は寒なり、
　發する者は熱なり、
微甚に從いて寒冷溫熱を分つ。
地なる者は收の極なり　而して
水なる者は氣の始めて質に之くなり　故に水冷は地寒に若かず、
火なる者は發の極なり　而して
燥なる者は質の始めて氣に之くなり　故に燥溫は火熱に若かず、
会は肅結すれば則ち昜は鬱す、
鬱せざる者は上に達して地に保す、　是に於て
日は鬱して熱なり、
轉は達して涼なり、
昜は鬱達すれば則ち会は結ぶ、

九三五五　結ばざる者は下に生じて天に營す、是に於て
九三五六　会は結びて寒なり、
九三五七　持は止りて溫なり、
九三五八　氣物の動靜に從いて其の氣を見すや此の如し。是を以て
九三五九　火は能く水に給す、
九三六〇　水は能く火に給す、
九三六一　無原の水は、有餘の火に會えば則ち涸る、
九三六二　無根の火は、有餘の水に會えば則ち滅す、
九三六三　溫煦冷滋。動植の生化は。絪縕を此に假る。
九三六四［水火］　水火なる者は發收の物なり。
九三六五　比すと雖も而も造化の端は此に於て漏す。
九三六六　水　濯いで物をして潔からしむる者は、塵垢を兼ねて此を收むればなり、
九三六七　物の映る所、影をして含ましむる者は、其の色を收むればなり、
九三六八　火　焚きて物をして盡くさしむる者は、形質を兼ねて之を發すればなり、
九三六九　物の照す所、彩をして呈せしむる者は、其の彩を發すればなり、
九三七〇　收むる者は、之を靜止に歸すのみ、
九三七一　發する者は、之を動散に輪るのみ、故に
九三七二　散ずる者は天に之きて化す、

九三七三　結ばる者は地に歸して造す、
九三七四　生ずる者は化して來る、
九三七五　化する者は化して往く、
九三七六　生ずる者は新を食す、
九三七七　化する者は故を吐す、
九三七八　水は潤中の柄を執る　是を以て
九三七九　水功は天に及ばず、
九三八〇　火は乾中の柄を執る　故に
九三八一　火功は地に及ばず　是を以て
九三八二　日は影を以て乾中の偶と爲す、
九三八三　水は燥を以て潤中の偶と爲す　此に於て
九三八四　華液は天地に合す、
九三八五　水燥は地中に偶す　故に
九三八六　持中の造化は。火燒は陳腐を去り、
九三八七　　水滋は新鮮を出す、
九三八八　大物を合して之を觀れば。火は走りて外に燒し　恒に以て其の故を去る、
九三八九　　水は融して内に液し　恒に以て其の新を出す、
九三九〇　燒して盡さず、　嘒嘒は布列す、

液して已まず、津津は淋漓す、故に
火は水に資る、
水は火に資る、
火は有より無に之くの跡を觀る、
水は無より有に之くの跡を觀る、
之を天に發すれば則ち華なり、日は乃ち諸火の宗なり、
之を地に收むるは則ち液なり、海は諸水の歸を爲す、是を以て
性物は是れ象なりと雖も。既に其の居る所に類す。是を以て
日影なる者は氣象なり、
水燥なる者は氣質なり、亦た其の分なり。
天なる者は氣にして象を華に發す、
地なる者は物にして質を液に收む、
華液なる者は会易の文なり。彼此は給資す。常恒に相い持す。
天地相い望むは。眞成の本偶なり。然り而して
天に在る者は與を天に於て得る、
地に在る者は與を地に於て得る、是に於て
日は影に偶して上に照蔽す、
水は燥に偶して下に滋煦す、

(PB 567)

九三九一
九三九二
九三九三
九三九四
九三九五
九三九六
九三九七
九三九八
九三九九
九四〇〇
九四〇一
九四〇二
九四〇三
九四〇四
九四〇五
九四〇六
九四〇七
九四〇八

燥煦めざれば則ち水　融せず、
水滋さざれば則ち燥　長ぜず、
水は極して氷を結ぶ、
燥は極して火を發す　是を以て
燥は自から潤意有り。
乾は則ち潤意を絶す。
乾なる者は天華にして之を全有す、　地火は則ち潤中に在るを以て、　其の全を有さず、　猶お
潤なる者は地液にして之を全有す、　天水は則ち乾中に在るを以て、　其の眞を有さず、　故に
天火地水は。爲眞の本偶を成すと雖も。而も
天中　日の影を以て自から偶し、
地中　水の燥を以て自から偶するより之を觀れば、　則ち
天中　日の月に對し、
地中　水の火に對するは、
猶お叔の姪に對するがごとし。是を以て
天中の水なる者は、滋すと雖も而も能く乾く、
地中の火なる者は、乾くと雖も而も能く潤う、
收めて塞がる者は、会の氣なり、
發して熱する者は、昜の物なり、

(I 478a)

九四〇九
九四一〇
九四一一
九四一二
九四一三
九四一四
九四一五ー一六
九四一七ー一八
九四一九
九四二〇
九四二一
九四二二
九四二三
九四二四
九四二五
九四二六
九四二七
九四二八

寒熱なる者は、絪縕の見氣なり、
明暗なる者は、絪縕の著形なり、是を以て
溫動冷植は、昜熱会寒の間に介す、
水冷燥溫の中に居る。
燥溫の煦と、
水冷の滋とは、
之を春暖秋涼、
夏暑冬寒の經に於て織る、

[天象地質]

體は析して天地轉持なり、體の小なる者は、風恬水陸を爲す、
氣は析して明暗寒熱なり、氣の標なる者は、晝夜冬夏を爲す、
天会は影を以て收め、月を以て結ぶ、
地会は水を以て結び、溼を以て融す、
天昜は日を以て發し、景を以て散ず、
地昜は燥を以て解け、火を以て發す、
相い類する有りと雖も。而も天地を隔てれば。則ち
潤濁乾清。輕虛重實の同じからざるなり。是を以て
月は能く天に浮きて明なり、



九四二九
九四三〇
九四三一
九四三二
九四三三
九四三四
九四三五
九四三六
九四三七ー三八
九四三九ー四〇
九四四一
九四四二
九四四三
九四四四
九四四五
九四四六
九四四七

火は能く地に沈みて暗なり、
燥は郤って潤を含む
影は郤って乾を含む　故に
地中の火は、大は雷を起し、
　小は薪に著き、
　易にして焔焔、
　会にして耿耿と雖も
猶お自から溼を食す　而して首は地に向うがごとし、
之を推して天に至る　天火も亦た其の理を同じくす、
地中の水は、大は鹹を湛え
　小は淡を疏し、
　易に遇いて光を假り
　会に居りて清を含むと雖も
猶お自から燥に由る　而して尾は地に向うがごとし、
之を推して天に至る、天水も亦た其の理を同じくす、　故に
條理の態は。跡を反して理を同じくす。是を以て
天物の乾を以て體を爲すは、猶お地物の潤を以て體を爲すがごとし、
地物の體を換うるは、猶お天物の體を常にするがごときなり、

九四六六［經通緯塞］

故に鬱易は迸散し、轉に居りて通物を爲し、乾光は常に一體を持す、
收斂は聚結し、持に居りて塞物を爲し、潤濁は毎に其の體を換う、故に

九四六七　氣の聚散、
九四六八　質の解結、
九四六九　反すると雖も。亦た比して應ず。
九四七〇　比して應ずるより之を觀れば。則ち
九四七一　聚散解結は、大物の塞なり、而して
九四七二　來去生化は、一氣の通なり
九四七三　塞すれば則ち宇の天地なり、
九四七四　通ずれば則ち宙の前後なり、
九四七五　洪曠攸遠の中。東西南北は方を紀す、
九四七六　晝夜冬夏は節を紀す、
九四七七　天物なる者は精にして、生化を没して體を通ず、通ずと雖も亦た緯に充つ、
九四七八　地物なる者は麁にして、生化を露して體を塞す、塞すと雖も亦た經に從う、
九四七九　杳眇は識り難しと雖も。而も撫摩は以て之を推す。
九四八〇　此に反して彼を觀る。彼は焉んぞ廋さんや。
九四八一　地著潤濁の質、水燥を分ちて居るを觀て、

(I 478b)

(PB 570)

九四八三　天麗乾光の象、景影を分ちて居るを知る、故に
九四八四　物は虚實　其の地を爲す、而して
九四八五　　水燥　各おの其の天を爲す、
九四八六　水物は水氣を以て其の天を爲す、
九四八七ー八八　　水質を以て其の地を爲す、天地を混して其の混中に遊ぶ、
九四八九　燥物は燥を以て其の天を爲す、
九四九〇ー九一　　土を以て其の地を爲す、天地を分ちて其の粲中に遊ぶ、
九四九二　天物は常に其の體を一にす、而して歲は能く整齊す、
九四九三　地物は毎に其の體を換にす、而して運は能く錯雜す　是に於て
九四九四　物は獨り成らず。水燥の事を用するに。之を日影に於て仰ぐ。故に
九四九五　陸水は日に由りて溢涸す、
九四九六　海水は月に従いて消長す
九四九七　　日は正に影に對す、是を以て一寒一暑は、冬夏を上に爲す、
九四九八　燥は正に水に對す、是を以て一長一消は、發收を下に爲す、
九四九九ー〇〇　　日來りて燥煦かし、燥煦かくして地澤は融す、
九五〇一ー〇二　影來りて地肅す、地肅して　水澤は凝す、故に
九五〇三　日は能く水を乾かすと雖も、而も發昜は鼓して、鬱昜は煦かし、故に
九五〇四　水澤は暑候を以て溢る、

九五〇五　影は能く水に和すと雖も　而も散会は鼓して、結会は粛す、故に
九五〇六　水液は寒候を以て涸る、
九五〇七　日なる者は天の易象なり、
九五〇八　月なる者は天の会質なり、而して
九五〇九　日月は天中に相い比す、
九五一〇　陸なる者は地の易質なり、
九五一一　海なる者は地の会象なり、而して
九五一二　海陸は地中に相い比す、夫れ
九五一三　天地なる者は類を以て應ずる者なり。故に
九五一四　日は能く燥中の物を率ゆ、
九五一五　月は能く水中の物を率ゆ、
九五一六　陸は發收を以て日に從う、
九五一七　海は潮汐を以て月に從う、
九五一八　陸水は發收　氣中に在り、
九五一九　海氣は潮汐　質中に在り、
九五二〇　日行は冬夏を爲す、
九五二一　月行は晦望を爲す、蓋し
九五二二　日影なる者は会易の兩物なり、

明魄なる者は一会の月體なり、
陸水は夏にして燥煦を得て溢る、
冬にして地粛を得て涸る　蓋し
明暗は兩物なり、
月の海水に於けるは、
正に衝けば則ち昜鬱甚だしくして溢る、
傍に衝けば則ち昜鬱微かにして涸る　蓋し
明の正衝、魄の正衝、
其の方を專らにすれば則ち水の應ずる所同じ。是を以て
朔望の潮汐は其の勢を同じくす。
上弦下弦は。明魄相い半ばす。是を以て
其の力　駁りて鬱勢は微なり。是を以て
潮汐も亦た勢は盛んならず。
陸物は夏にして長ず、
　冬にして消す、
海物は晦にして肥ゆ、
　望にして痩す、　是れ晦望の冬夏に等しき所なり。
日は燥中の物を率いて、　燥物は能く冬夏を知る、

(I 479a)

月は水中の物を率いて、水物は能く晦望を知る、故に
水は天に生ずれば則ち疏れて雨を爲す、
地に老すれば則ち釀して海を爲す、
燥は陸に達すれば則ち風を爲す、海に鬱すれば則ち湖を噴く、
陸なる者は氣を上に煦め、水を下に滋す、
海なる者は水を上に和す、燥を下に鬱す、
滋液は能く通ず、
氣鬱は能く發す、
水通の路は、之を川と謂う、
氣發の路は、之を窖と謂う、
水は氣中より注ぎて海を爲す、
氣は水中より泝りて潮を爲す、
是れ海水の月に從うなり。夫れ
水なる者は衆物なり、
氣なる者は易物なり、
水と月と相い應ず。故に月は上に在れば則ち
易氣は勢を屈して。而して水中に鬱す。故に
鬱易は月の兩邊に洩して。而して潮汐を爲す。

九五四一
九五四二
九五四三
九五四四－四五
九五四六
九五四七
九五四八
九五四九
九五五〇
九五五一
九五五二
九五五三
九五五四
九五五五
九五五六
九五五七
九五五八
九五五九

九五六〇　朔望にては、則ち月體は正に衝く、
九五六一　兩弦にては、則ち月體は斜に衝く　故に
九五六二　昜氣の鬱發。勢は同じからざるなり。是を以て濤の大小は齊しからず。
九五六三　或るひと曰く。然らば則ち海氣は日を以て洩せず。
九五六四　月を以て鬱する者は。何ぞやと。
九五六五　曰く日は燥に和す、故に陸物は之に應ず、
九五六六　　月は水に和す、故に水物は之に應ず、
九五六七　海中の氣は、月を見て屈す、猶お
九五六八　陸中の水は、火を見て乾くがごときなり、
九五六九　夫れ地上一層なる者は、水の毬なり、
九五七〇　　水上一層なる者は、燥の毬なり、
九五七一　水毬の燥なる者は其の氣濁す、其の性悍く水を衝きて上る、是を以て
九五七二　雨露の下るは、陸燥の和に由る、
九五七三　潮汐の泝るは、海氣の悍に由る、
九五七四　海味の濃は、水底の鬱蒸に由る、
九五七五　陸氣の濁は、地面の溼濁に由る、故に
九五七六　天中は燥疏すれば、則ち水結びて川谷其の通路を爲す、
九五七七　地中は燥鬱すれば、則ち火發して窖穴其の達路を爲す、

九五七八　天中燥疏の盛んなる、水は滂孛を爲す、
九五七九　地中燥鬱の甚だしき、火は山嶽を裂く、
九五八〇　燥なる者は猶お體を没す、火は其の鬱して發するなり、故に
九五八一　地昜は地氣を鼓舞して、水溼を蒸騰す、
九五八二　濁りて清に入らず、升りて轉に入る能わざれば、則ち
九五八三　俯覆して雲霧を爲す、
九五八四　雲なる者は水土の氣。濁りて靄靄なり。
九五八五　其の白くして玲瓏たる者は、象と映ずるなり、
九五八六　其の黒くして慘澹なる者は、象と隔たるなり、
九五八七　赤にして亦た空に映る者は、日光と斜に射るなり、
九五八八　昏にして地に俯す者は、上面の氣清なり、
九五八九　風無ければ則ち綿の如く練の如し。
九五九〇　風有れば則ち鱗の如く翼の如し。
九五九一　雲霧なる者は。氣の質を帯びるなり。
九五九二　其の結や。雨雪を爲す。其の解や散ず。
九五九三　散ずる者は質の氣に之くなり、
九五九四　結ばる者は氣の質に之くなり、是を以て
九五九五　升る者は則ち其の氣を以て能く升る、

九五九六　降る者は則ち其の質を以て能く降る、
九五九七　質を有すと雖も、而も氣に勝る者は升る　升ると雖も而も其の質は終に降る、
九五九八　氣を有すと雖も、而も質に勝る者は降る、降ると雖も而も其の氣は終に升る、
九五九九　水火は相い撃ちて、而して怒れば則ち雷電を爲す、
九六〇〇　氣は通ずれば則ち巳む。鬱すれば則ち火を發す。
九六〇一　爆竹を以て之を言わんに。其の氣は鬱して迫る。
九六〇二　撃して發するや。轟然として響を爲す。是を以て会氣　地を封ずれば。
九六〇三　則ち昜は下に鬱す。鬱昜は迫りて發し。衝きて出づれば。則ち
九六〇四　地に震有り。
九六〇五　鳴有り。
九六〇六　裂有り。
九六〇七　火出有り。
九六〇八　衝きて直ちに升らんと欲して。
九六〇九　中間会氣の壅閉に遇えば。則ち
九六一〇　火勢は愈いよ愈いよ鬱し愈いよ屈す。
九六一一　愈いよ迫り愈いよ激す。
九六一二　出でんことを求めて縦横相い衝く。
九六一三　闘いて相い撃てば。則ち雷を爲し電を爲す。

九六一四　秋夜の暑さ將に退かんとし。涼しさ將に至らんとするの交は。
九六一五　必ず閃電有り。俗に稻郎と曰う。
九六一六　言うこころは此の物夜に來れば。則ち稻は必ず子を結ぶ。是れ亦た鬱火なり。
九六一七　唯だ發する者は輕く。閉ずる者は密ならず。
九六一八　物と激すること能わずして散ずるのみ。（I 480a）
九六一九　会質に逆すれば、則ち野馬澤燄、火井熱池の氣を起す、
九六二〇　会性に順すれば、則ち涼燄湖光、龍燈鬼燐の象を爲す
九六二一　会は閉ずれば則ち易は鬱して氣を起す、火山熱池なり、
九六二二　暗は深ければ則ち淺なる者は色を爲す、野火湖光なり、蓋し
九六二三　至暗の間は。氣有りて暗と融せず。其の氣は青くして燄の如し。
九六二四　見なる者は鬼龍の爲す所と爲す。
九六二五　龍は未だ龍燈を挑げず、
九六二六　鬼は焉んぞ鬼火を解かん、
九六二七　其の變に至りては、則ち火體は能く天象を爭う
九六二八　火は。或いは地に在りて火を爲す、
九六二九　　或いは天に在りて象の如し、然りと雖も。皆な一なるのみ。而して
九六三〇　地火は質を食する、故に其の火は時に發す、然りと雖も
九六三一　地膩の結ばる所、則ち　火は常に有り、（PB 574）

九六三二　天火は会に圍まる、故に其の火は常に見る、然り而して
九六三三　会守の疏する所、則ち其の火は時に滅す、
九六三四　麁濁の昜は、精清の中に散ずること能わざれば、則ち
九六三五　日と暉を爭う、
九六三六　月と共に繋る、
九六三七　彗と化し孛と化す、
九六三八　轉中の動なる者なり、象に類する有り、
九六三九　聲有りて天狗と爲す、
九六四〇　聲無くて抂矢と爲す、
九六四一　飛びて流星を爲す、
九六四二　隕ちて星雨の如し、
九六四三　持中の動なる者なり、麁火の類なり、
九六四四　水なる者は、已に質を有す、溼なる者は、其の解けて融するなり、
九六四五　清氣は相い逼る、
九六四六　雲霧は相い感ず、
九六四七　獨氣は重を爲す、
九六四八　溼體は相い引く、則ち
九六四九　降結して雨露を爲す、

九六五〇　雲霧なる者は、氣の蒸蒸として濁中より升るなり、猶お氣の鏡を呵するがごとし、(PB 575)
九六五一　雨雪なる者は、質の津津として清中より來るなり、猶お露の鏡面に結ぶがごとし、
九六五二　寒溫は相い逼りて肅すれば、則ち雪霜なり、
九六五三　昜象に逆らえば、則ち烟霞虹暈の彩を發す、
九六五四　地氣蒸蒸の暗濁は、
九六五五　升浮披布して散ずれば、則ち
九六五六　其の氣は茫茫として、而して烟靄を爲す、
九六五七　降低分靡して結べば、則ち
九六五八　其の質は紛紛として、而して霰霖を爲す、
九六五九　烟靄は雲より疎なり、
九六六〇　霰霖は雨より密なり、
九六六一　日月の光。其の薄處より。直に茫茫の烟靄を射れば則ち暈を爲す、
　　斜に紛紛の霰霖を射れば則ち虹を爲す、
九六六二　其の輪は則ち明の暗を衝き。暗の明を抱くの界なり。故に
九六六三　日月は至高なれば、則ち虹を爲し易からず、
九六六四　至低なれば、則ち暈を爲し易からず、
九六六五　易性に從がえば、則ち硫礬膏膩の物を爲す、
九六六六　其の變に至れば、則ち水氣は能く物象を奪す、

(I 480b)

九六六八　清にして體を没する者は能く色を透す、
九六六九　清にして體を露する者は能く色を受く
九六七〇　明にして體を有する者は能く光る、
九六七一　明にして體を没する者は能く見る　是の故に
九六七二　明なる者は色を外に施す、
九六七三　清なる者は色を内に受く、　是の故に
九六七四　水は天間に遊んで、能く地の物影を受く、之を天開と謂う、
九六七五　水面に遊んで、能く傍の物影を受く、之を海市と謂う、
九六七六　景影中に物有り、能く循環を爲す、
九六七七　影物を影曜と曰う、
九六七八　景物を景曜と曰う、
九六七九　水燥中に物有り、能く鱗比を爲す、
九六八〇　燥物を燥生と曰う、
九六八一　水物を水生と曰う、蓋し
九六八二　寒熱なる者は、發收の氣なり、
九六八三　滋煦なる者は、嗡噴の性なり、
九六八四　天は先んじ地は後れ。天は唱し地は和す。
九六八五　春夏は滋煦す、

九六八六　秋冬は寒收す、
九六八七　燥煦にして生育す、
九六八八　水液にして聚結す、
九六八九　其の神は斯に活す、
九六九〇　其の物は斯に立す、
九六九一　天は動きて歳は定まる、
九六九二　地は靜して運は變する、
九六九三　晝夜は本神の開閉を爲す、
九六九四　冬夏は生化の活息を爲す、
九六九五　地物の生は。潤えば則ち結ぶ、
九六九六　　乾けば則ち化す、
九六九七　火の燒きて質を散じ、
九六九八　水の潤いて質を結ぶは、
九六九九　亦た其の徵なり。艸木は土氣に長ず、
九七〇〇　　禽獸は食息に長ず、是の故に
九七〇一　生を爲す者は解結よりす、
九七〇二　生を養う者は乾潤よりす、夫れ
九七〇三　寒熱の爲す所は則ち冬夏なり、

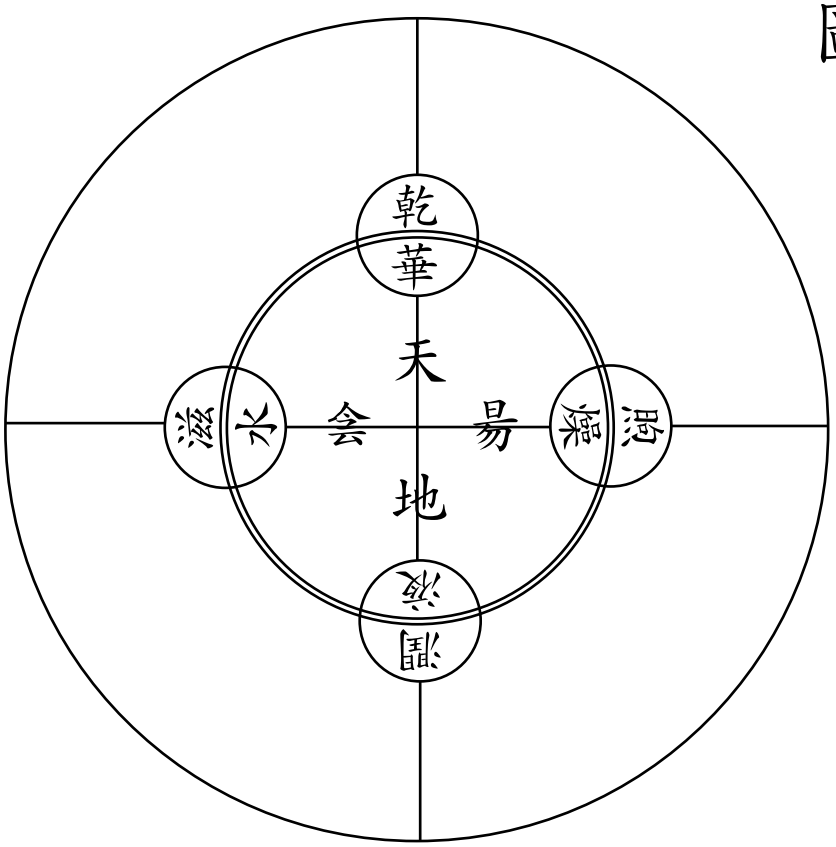
九七〇四　明暗の爲す所は則ち晝夜なり、是を以て
九七〇五　生は。明暗に隨いて睡覺す、
九七〇六　　寒熱に隨いて榮枯す、
九七〇七　覺なる者は神の旺なり、
九七〇八　睡なる者は本の旺なり、
九七〇九　榮なる者は、精華の發なり、
九七一〇　枯なる者は、本根の復なり、而して
九七一一　艸木は榮枯の氣に顯なり、
九七一二　鳥獸は睡覺の氣に顯なり、
九七一三　華葉の夜閉じ晝開くを觀れば、則ち
九七一四　彼れ亦た睡覺を具する者なり、
九七一五　禽獸の暖にして孶尾し、
九七一六　　寒にして氄毛するを觀れば、則ち
九七一七　此れ亦た榮枯を具する者なり、
九七一八　唯だ人は神氣に長ず、故に
九七一九　羽毛の用を假らず。
九七二〇　孶尾の時。故に見難しと爲す。
九七二一　猶お松柏の本氣に長じ。而して

九七二二　榮枯(えいこ)の時(とき)の見難(みがた)きがごときなり。

九七二三　動植(どうしょく)の用(よう)は氣液(きえき)にして活立(かつりつ)すなり、

九七二四　水燥(すいそう)の滋潤(じゅん)を以(もっ)て絪縕(いんうん)すればなり、

(PB 577)

(PB 578, I 481b)

# 乾潤滋煦圖